貝塚市埋蔵文化財調査報告第21集

加治神前畠中遺跡発掘調査概要

1991・3

貝塚市教育委員会

はじめに

加治・神前・畠中遺跡は、近木川右岸に位置し、縄文時代より続く大遺跡であります。従前の調査では、市庁舎周辺地区において古墳時代から平安時代の遺構が数多く確認されており、現状の大部分が耕作地として保存されている本遺跡には貴重な埋蔵文化財が多数眠っていることが考えられます。

今回、本遺跡の歴史の一端を明らかにする機会に恵まれ、また本調査報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

貝塚市教育委員会

教育長　岡根和雄

例　　言

1. 本書は、貝塚市役所水道部業務課、総務部庶務課の依頼により、大阪府貝塚市畠中1丁目他において実施した、市庁舎周辺整備工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2. 調査は別館部分を平成2年1月8日から3月16日にかけて、浄化槽部分を平成2年5月18日から7月13日にかけて、駐車場部分を平成2年6月4日から6月18日にかけて実施した。なお、内業調査については、平成2年9月29日に終了した。

3. 調査にあたっては貝塚市役所水道部業務課、総務部庶務課、建設部建築課より多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表す。

4. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員前川　浩一、三浦　基（平成2年4月より）が担当した。

現地調査および本書作成にあたる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

榛佐枝子	上野　元	上東　東	奥谷　隆	岸本由紀子	清水久子
下中良仁	田代自子	中辻澄子	藤井記代美	古谷　務	森野晶子

5. 本書の作成にかかる執筆編集は前川が担当した。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第 1 章　調査に至る経過 …… 1
第 2 章　位置と環境 …… 3
第 3 章　調査結果 …… 5
第 1 節　第 1 区の調査 …… 5
1. 調査の概要 …… 5
2. 基本層序 …… 11
3. 検出遺構 …… 11
4. 出土遺物 …… 17
第 2 節　第 2 区の調査 …… 23
1. 調査の概要 …… 23
2. 基本層序 …… 23
3. 検出遺構 …… 23
4. 出土遺物 …… 30
第 3 節　第 2 区の調査 …… 37
1. 調査の概要 …… 37
2. 基本層序 …… 37
3. 検出遺構 …… 37
4. 出土遺物 …… 38
第 4 章　まとめ …… 45

図版目次

図版１　第１区
調査区全景

図版２　第１区
１．調査区南部全景
２．調査区北部全景

図版３　第１区
１．調査区南部全景
２．調査区中央部全景

図版４　第１区
１．調査区北部全景
２．同　　上

図版５　第１区
１．調査区西部完掘状況
２．同　　上

図版６　第１区
１．溝ＳＤ－6.12.13.16.17.20
２．同　　上

図版７　第１区
１．溝ＳＤ－15.21～23
２．同　　上

図版８　第１区
１．掘立柱建物ＳＢ－１
２．同　　上

図版９　第１区
１．掘立柱建物ＳＢ－２
２．同　　上

図版10　第１区
ＳＤ-22(2~6)、ＳＤ-15(7)、ＳＤ-11(8、9)
ＳＢ－１(10)包含層第６層(16)出土遺物

図版11　第１区
包含層第６層(26、56)
包含層第５層(33、34、43)出土遺物

図版12　第２区
１．調査区全景
２．同　　上

図版13　第２区
１．調査区南部全景
２．調査区北部全景

図版14　第２区
１．土坑ＳＫ－１
２．同　　上

図版15　第２区
１．土坑ＳＫ－２遺物出土状況
２．同　　上

図版16　第２区
１．土坑ＳＫ－２
２．同　　上

図版17　第２区
１．溝ＳＤ－１
２．同　　上

図版18　第２区
１．溝ＳＤ－１
２．溝ＳＤ－１石組基礎部

図版19　第２区
ＳＫ－２(63～66)Pit-33(71、72)
出土土器

図版20　第２区
SD-2(73、76) SD-1(89、90、92、97)
包含層第６層(101、105)、
包含層第５層(124) 出土土器

図版21　第３区
１．Ａ区全景
２．同　　上

図版22　第３区
１．Ａ区遺構掘削状況
２．同　　上

図版23　第３区
１．Ｂ区全景
２．同　　上

図版24　第３区
Pit-17(128)、Pit-43(132)、包含層第５層
(137、141~143)、包含層第４層(140)
出土遺物

挿図目次

図1　貝塚市遺跡分布図

図2　調査地位置図

図3　調査地概略図

図4　第1区調査区土層図

図5　第1区遺構配置図

図6　溝ＳＤ－６、12、13、16、17、19、20

図7　溝ＳＤ－15、21～23

図8　掘立柱建物ＳＢ－１

図9　掘立柱建物ＳＢ－２

図10　ＳＤ－22出土遺物

図11　ＳＤ－15(7)、ＳＤ－11(8、9)、ＳＢ－１(10)、ＳＤ－１(11)出土土器

図12　包含層第6層出土土器

図13　包含層第5層出土土器

図14　包含層第6層（46～58）、包含層第5層（59～62）出土遺物

図15　第2区調査区土層図

図16　第2区遺構配置図

図17　土坑ＳＫ－２

図18　溝ＳＤ－１

図19　ＳＫ－２出土土器

図20　ＳＫ－１(67、68)、ＳＸ－４(69)、Pit－９(70)、Pit－33(71、72) 出土土器

図21　ＳＤ－２(73～76)、ＳＤ－８(77、78) 出土土器

図22　ＳＤ－１出土土器

図23　包含層第6層（98～112)、包含層第5層（113～125）出土遺物

図24　第3区調査区土層図

図25　第3区遺構配置図

図26　Pit－14(126)、Pit－17(127、128)、Pit－31(129)、Pit－47(130)、Pit－44(131)、Pit－43(132)、Pit－３(133) 出土遺物

図27　包含層第6層(134～136)、包含層第5層(137～139、141～143)、包含層第4層(140)出土遺物

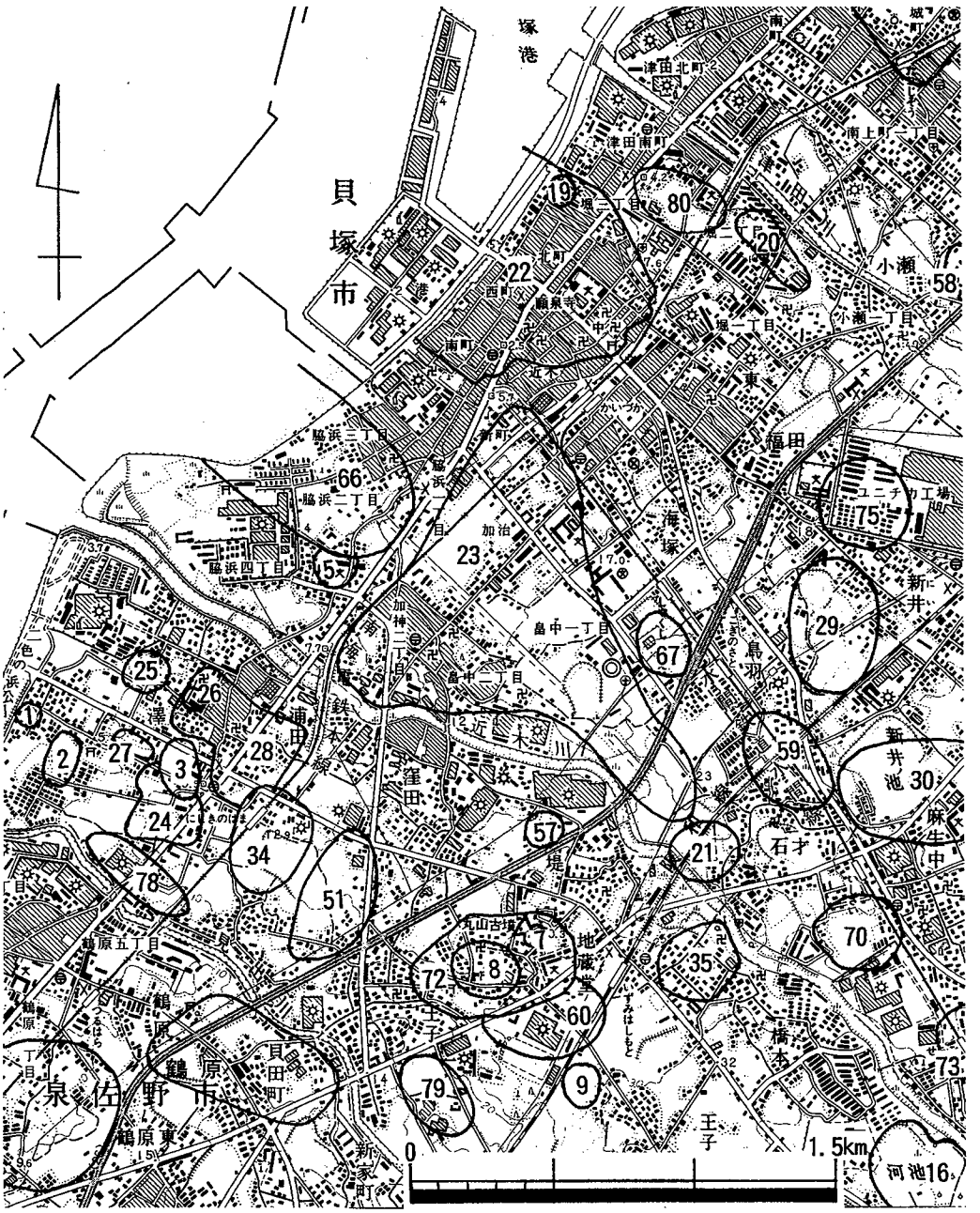
第 1 章　調査に至る経過

貝塚市役所では、貝塚市畠中１丁目他地内に所在する市庁舎周辺の整備を平成２年度事業として計画し、貝塚市水道部業務課より庁舎別館及び浄化槽建設について、また、総務部庶務課より職員駐車場建設について埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れがあった。

当開発予定地は周知の遺跡加治神前畠中遺跡に含まれ、さらに、本教育委員会、大阪府教育委員会、㈶大阪文化財センター、㈶大阪府埋蔵文化財協会により数度の発掘調査が行なわれており、古墳時代から近世にかけての遺構が集中して検出され、今回も多数の遺構が検出されることが充分考えられる地域であった。そこで、事業担当課と貝塚市教育委員会との間で協議を行なった結果、庁舎別館及び浄化槽部分は工事により破壊を受ける部分を事前に全面発掘調査すること、駐車場部分は事前に試掘調査を行い遺構の広がり遺構面の深度を確認後、埋蔵文化財に影響のない工法にて施工することの合意をみた。

発掘調査は建設工事との関係で３期に分け、第１区（別館部分、調査面積約 680㎡）を平成２年１月８日より３月16日にかけて、第２区（浄化槽部分、調査面積約 330㎡）を平成２年５月18日より７月13日にかけて、第３区（駐車場部分、調査面積約75㎡）を平成２年６月４日から６月18日にかけて実施した。

なお、これらの諸事業は平成２年度において総務部庶務課が事業担当として総括され、同課と第３区の遺構等の保存について再度協議した結果、事業予定地約 800㎡について埋蔵文化財を保存し施工することとなった。



1.沢新出遺跡 2.沢海岸遺跡 3.沢遺跡 5.長楽寺跡 7.丸山古墳 8.地蔵堂廃寺 9.下新出遺跡 16.河地遺跡 19.泉州麻生塩壺出土地 20.堀遺跡 21.橋本遺跡 22.貝塚寺内町遺跡 23.加治神前畠中遺跡 24.明楽寺跡 25.沢共同墓地遺跡 26.沢西出遺跡 27.沢海岸北遺跡 28.沢城跡 29.新井鳥羽遺跡 30.新井ノ池遺跡 34.澱池遺跡 35.積善寺城跡 51.窪田遺跡 57.堤遺跡 58.小瀬五所山遺跡 59.石才遺跡 60.王子遺跡 66.脇浜遺跡 67.今池遺跡 70.石才南遺跡 72.地蔵堂遺跡 73.名越西遺跡 75.新井鳥羽北遺跡 78.沢西遺跡 79.王子西遺跡 80.津田遺跡

図1. 貝塚市遺跡分布図

第 2 章　位置と環境

調査を実施したのは貝塚市北西部に位置する加治神前畠中遺跡の一角である。

加治神前畠中遺跡は、貝塚市のほぼ中央を縦断する近木川右岸の段丘上に位置し、東西約1500m、南北約1200mの範囲に広がる古墳時代から近世にかけての集落跡である。遺跡のマーク地内約半分は農地として利用されており、今後、これらの農地を対象として開発の進むことが充分考えられる地域である。海抜約10～21mを測る。

周辺に散在する遺跡としては、北には中世から近世にかけて繁栄した貝塚寺内町遺跡、西には近年の調査にて縄文時代晩期から中世にかけての集落跡が検出された脇浜遺跡、中世の城郭・集落跡である沢城跡、弥生時代から中世にかけての集落跡である沢遺跡、中世の集落跡である澱池遺跡、南には全長約70mを測る前方後円墳の丸山古墳、これを取り囲む５世紀代の埋没古墳、中世の集落跡の地蔵堂遺跡、東には古墳時代の集落跡と思われる今池遺跡などが散在する。（図１）

本遺跡では十数回の調査が行なわれているが、いずれも遺構が検出されるのは市庁舎周辺の畠中地区に集中している。主なものでは、府道貝塚中央線建設に伴う、㈶大阪府埋蔵文化財協会の調査において、６世紀の竪穴住居跡等が検出されている。大阪府教育委員会の調査では、古墳時代から中世にかけての集落跡が検出されている。また、本教育委員会が行なった市道鳥羽畠中線建設に伴う調査では、古墳時代から中世にかけての集落跡、特に平安時代集落跡を検出するなど、古墳時代から中世にかけての集落の様子が明らかにされつつある。

今回の調査地は遺跡マーク地内南東部、遺構が集中的に検出される地点にあたり、海抜約19mを測る貝塚市畠中１丁目他地内である。第１・３区は先述の昭和61・62年度にて調査した市道鳥羽畠中線に接しており、その中でも平安時代の遺構が多数検出された地点の両隣に位置し、これらの遺構が続いていることが充分考えられる地区であった。

第３章　調査成果

第１節　第１区の調査

１．調査の概要

本調査は現状使用している概設建物を除去後、建設計画に基づき、調査予定地内に東西約20m、南北約37mの調査区を設定した。その内、調査区中央を通る水路部幅約１ｍと調査区東部の電気配線部分は除去が困難であり、両部分については調査区から省くこととなった。調査面積は約 680㎡である。

また、調査区において南北に対し東へ50°振ったラインを基準とした10×10mの区画を用い、東西に３区画を設け西よりＡ～Ｃの記号を与え、南北に５区画を設け南より１～５の番号を与えた。（図３）

調査では調査区のほぼ全域において遺構を検出したが、市庁舎西側に近い部分、Ｃ－５・４区の東半部分は庁舎建設時に削平されていた。

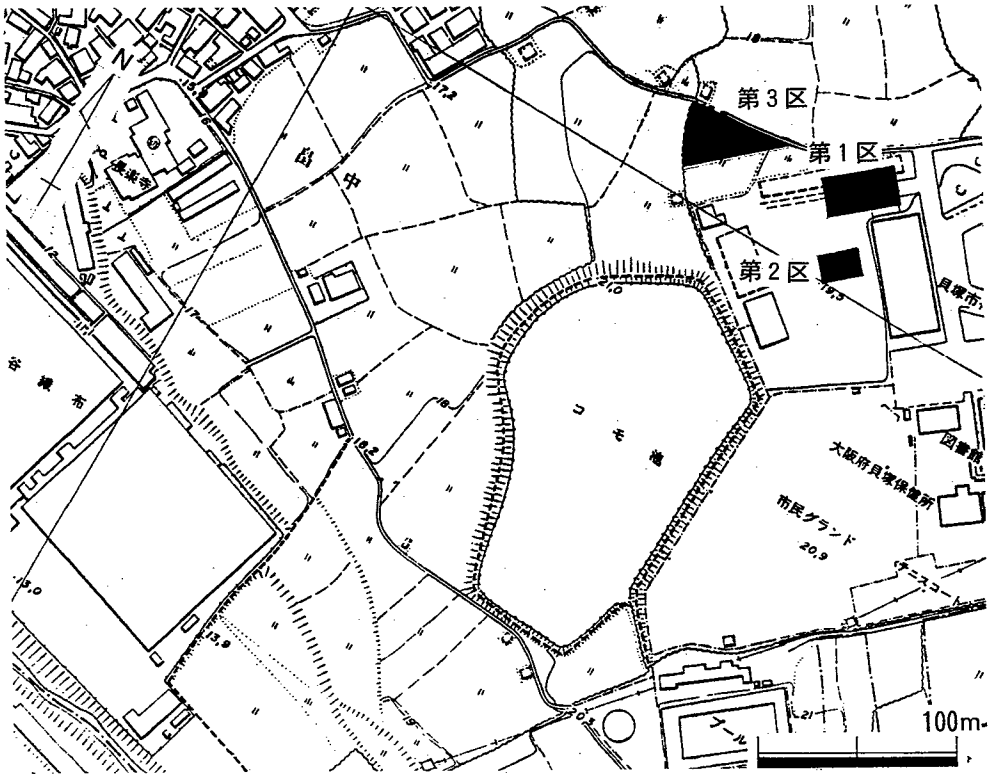


図２.　調査地位置図

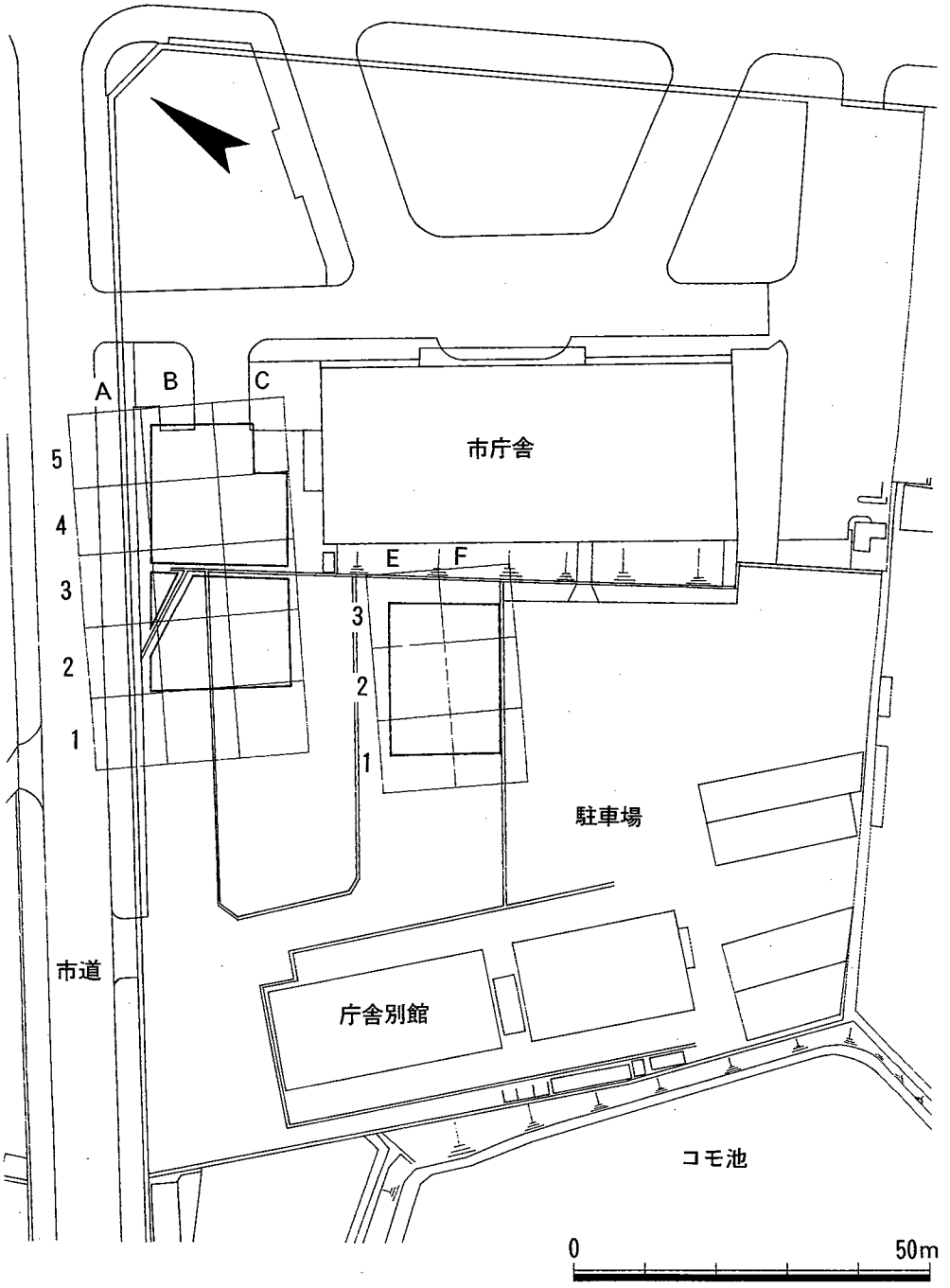
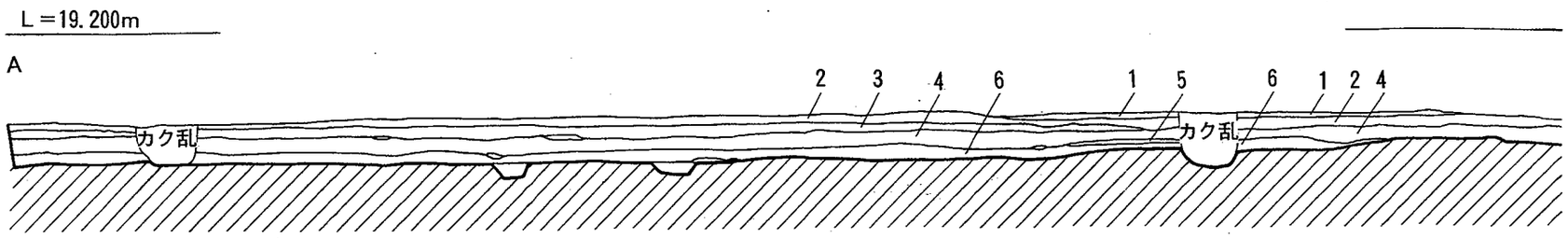
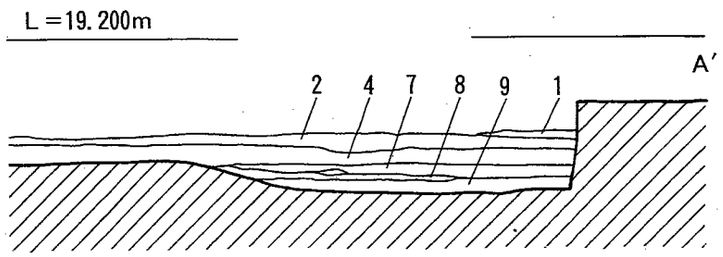
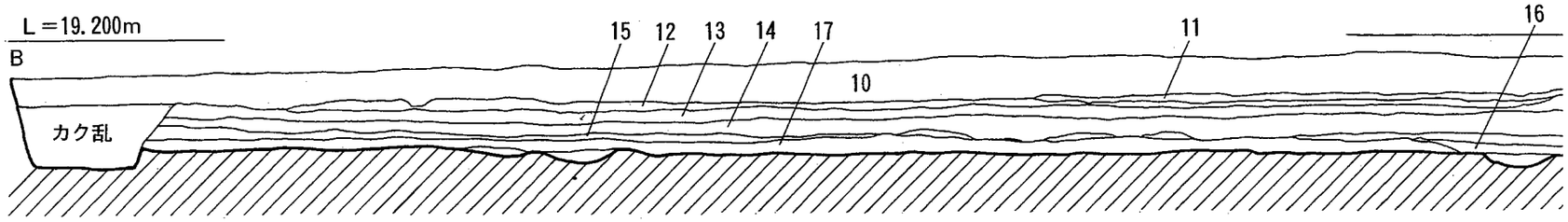


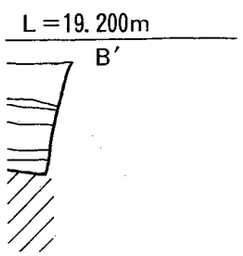
図 3.　調査地概略図





1. 床　土
2. 淡灰褐色土
3. 灰 褐 色 土　（第 4 層）
4. 暗灰褐色土（第 5 層）
5. 黒褐色礫混土層
6. 〃　（第 6 層）
7. 黒褐色礫土層
8. 黒褐色礫混粘土層
9. 〃





10. 盛　土
11. 淡赤褐色土
12. 淡黄茶色土　（第 4 層）
13. 茶 灰 色 土
14. 淡灰褐色土
15. 黄 茶 色 土　（第 5 層）
16. 灰 黒 色 粘 土
17. 黒灰色粘質土　（第 6 層）

A～A′　B－5・4・3区北壁
B～B′　C－3・2・1区南壁

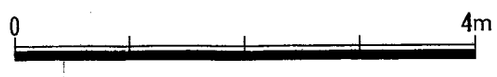


図 4.　第 1 区調査区土層図

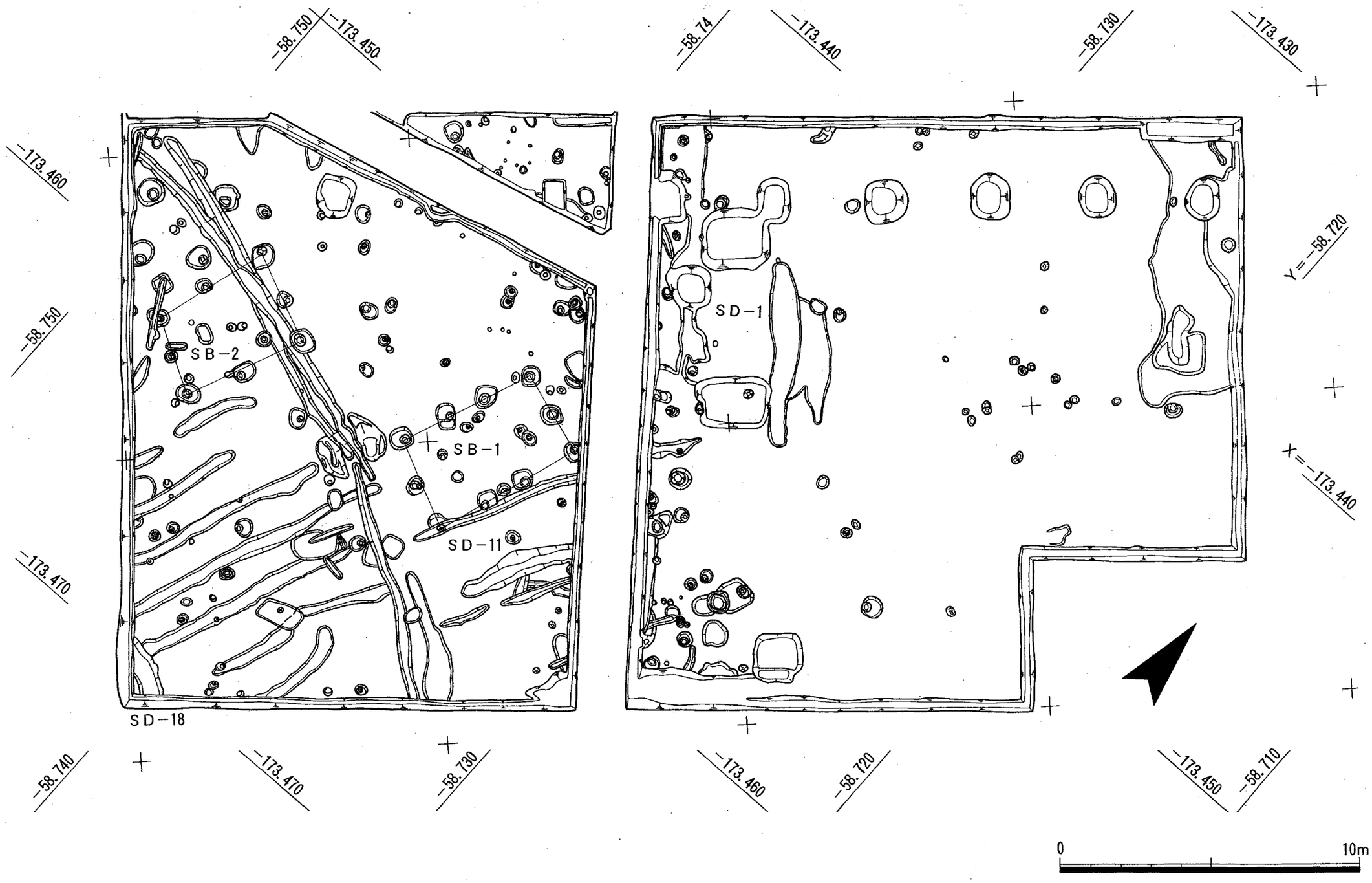

-58.750
-173.450
-58.74
-173.440
-58.730
-173.430
-173.460
-58.750
Y=-58.720
X=-173.440
SB-2
SB-1
SD-11
SD-18
SD-1
-173.470
-58.740
-173.470
-58.730
-173.460
-58.720
-173.450
-58.710
0
10m

図5.　第1区遺構配置図

2. 基本層序　（図4）

調査区における基本層序は、大まかに6層に分別できる。現代盛土（約 0.4m）、耕作土（約0.05m）、床土（約0.05m）の下、上から順に、層厚 0.1～ 0.2mを測る灰褐色土（第4層）、層厚 0.1～ 0.2mを測る暗灰褐色土（第5層）、層厚 0.1～0.15mを測る黒褐色粘質土（第6層）が堆積する。地山は5～4区にかけては暗黄茶色礫層、3～1区にかけては黄色粘土となる。地山面は、庁舎西側のC－5・4区では大きく削平を受けているが、削平した土をそのまま埋め戻したものと思われるほど一見しただけでは区別がつかない。また、地山面の標高は調査地の北から南に向かって低くなっており、比高約 0.2mを測る。

調査地区の現地表面はT.P.18.6～19mを測り、地山面はT.P.17.9～18.1mを測る。

包含層は3層全てが調査地全域に堆積している。第4層は出土遺物が少なく時期は明確ではないが中世以降のものと思われ、第5層は、瓦器等が多く出土し中世のものと思われる。第6層は古墳時代～平安時代にかけての遺物が出土しているが、断面精査によると平安時代、中世の遺構は第6層上面より掘り込まれており、古墳時代以降に堆積したものと思われる。

3. 検出遺構　（図5）

調査では調査区のほぼ全域において各種の遺構を検出したが主に1～3区に集中している。内容は、古墳時代の溝、平安時代建物・溝、中世の溝・土坑・柱穴等を検出した。しかし、先述のとおり、土層断面精査後、古墳時代の遺構以外は第6層上面からのものであることが判明した。第6層上面の遺構検出作業中では、土色等が非常に一到しており遺構の判別がつかず、第6層除去後地山面にて検出したためこの様な結果となったものである。

以下、調査によって明らかとなった主なものについてその概要を示す。

溝　SD－6、12、13、16、17、19、20　（図6　図版6）

本遺構はB・C－2区にて検出した溝である。南北方向にほぼ並行に走るため群としてとらえている。溝間は約1mを測る。幅 0.4～ 0.6m、深さ約 0.1mを測り、断面は薄いレンズ状を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。遺物はそれぞれ土師器細片が出土したが図示し得ない。遺構の性格としては、耕作に係わるものと思われるが確定できない。

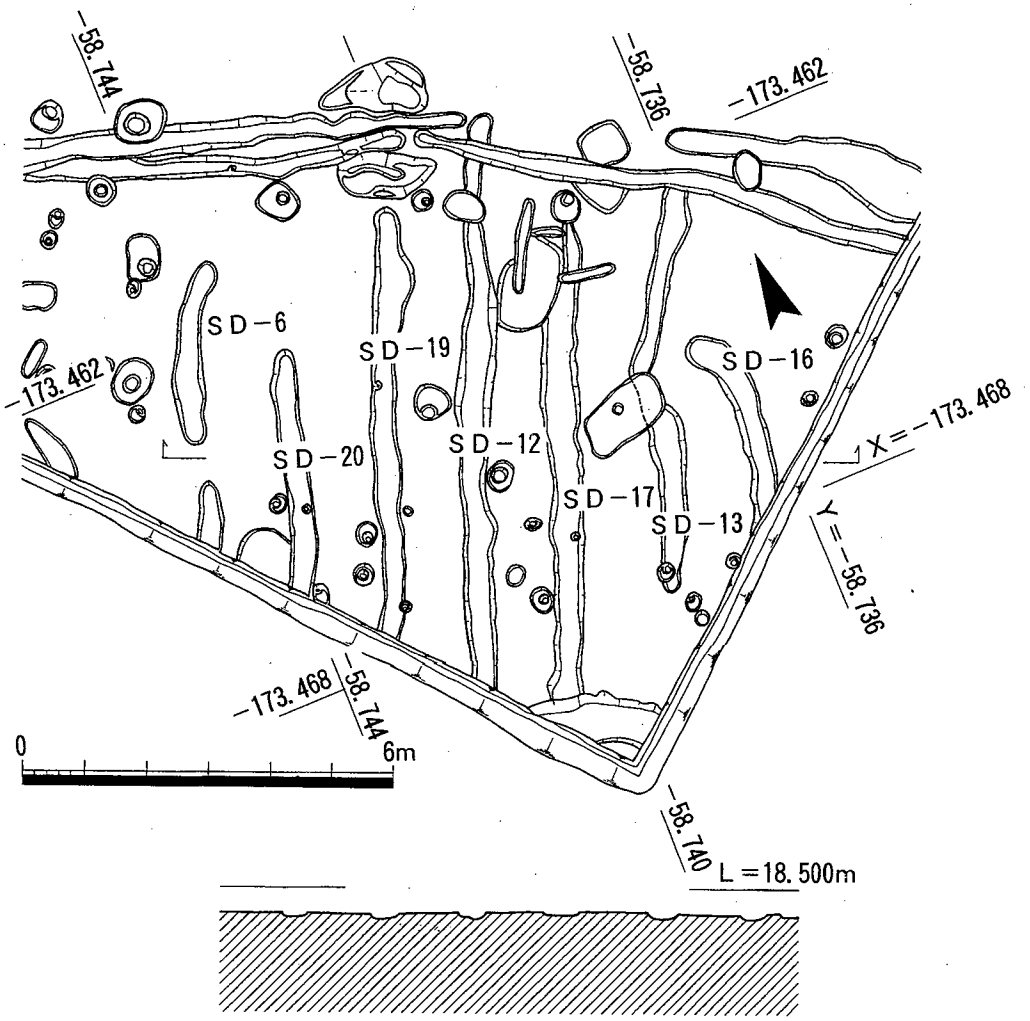


図6．溝　SD－6、12、13、16、17、19、20

溝　SD－15、21、22、23　（図7　図版7）

本遺構はA・B・C－2区にて検出した溝である。SD－21とSD－22、SD－15とSD－23はそれぞれ同一のものであり、SD－23はSD－22を切り位置する。ほぼ東西に走り、SD－21・22は幅 0.4～ 0.6m、深さ約0.35m、SD－15・23は幅 0.4～1m、深さ約 0.2mを測る。埋土はどちらも黒褐色粘土であり、断面は逆台形を呈す。両溝とも東が高く、西が低くなっている。遺物はSD－22より土師器壷等、SD－15より土師器高杯が出土している。なお、SD－23は昭和62年度市道調査部分のSD－405 と同一のものと思われる。

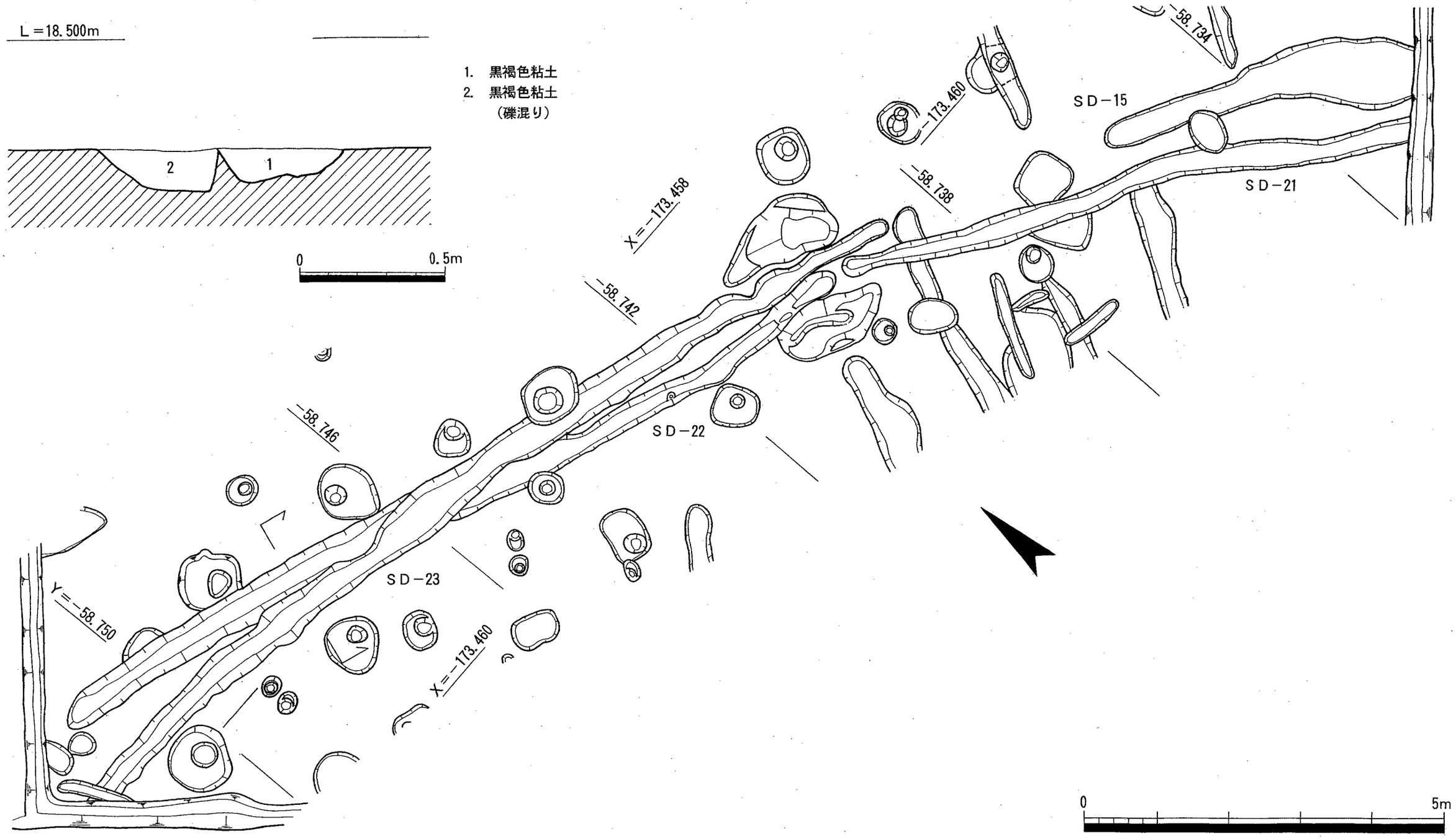


図7. 溝　SD－15、21～23

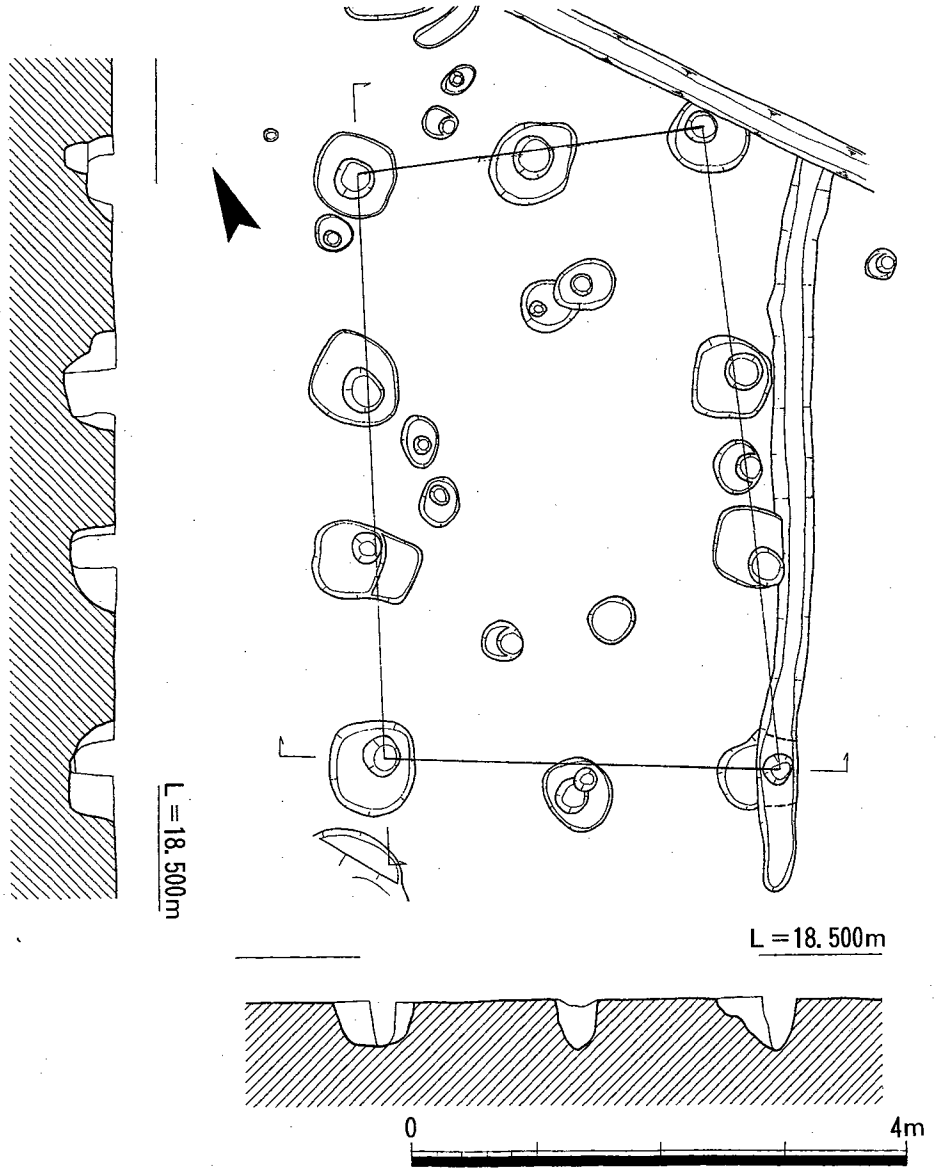


図８．掘立柱建物　ＳＢ－１

溝　ＳＤ－11

本遺構はＣ－３区にて検出した溝である。やや東に向いた南北方向に走り、ＳＢ－１に切られ位置する。幅 0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は黒褐色土、断面は逆台形を呈す。遺物は須恵器杯蓋、土師器皿等が出土している。

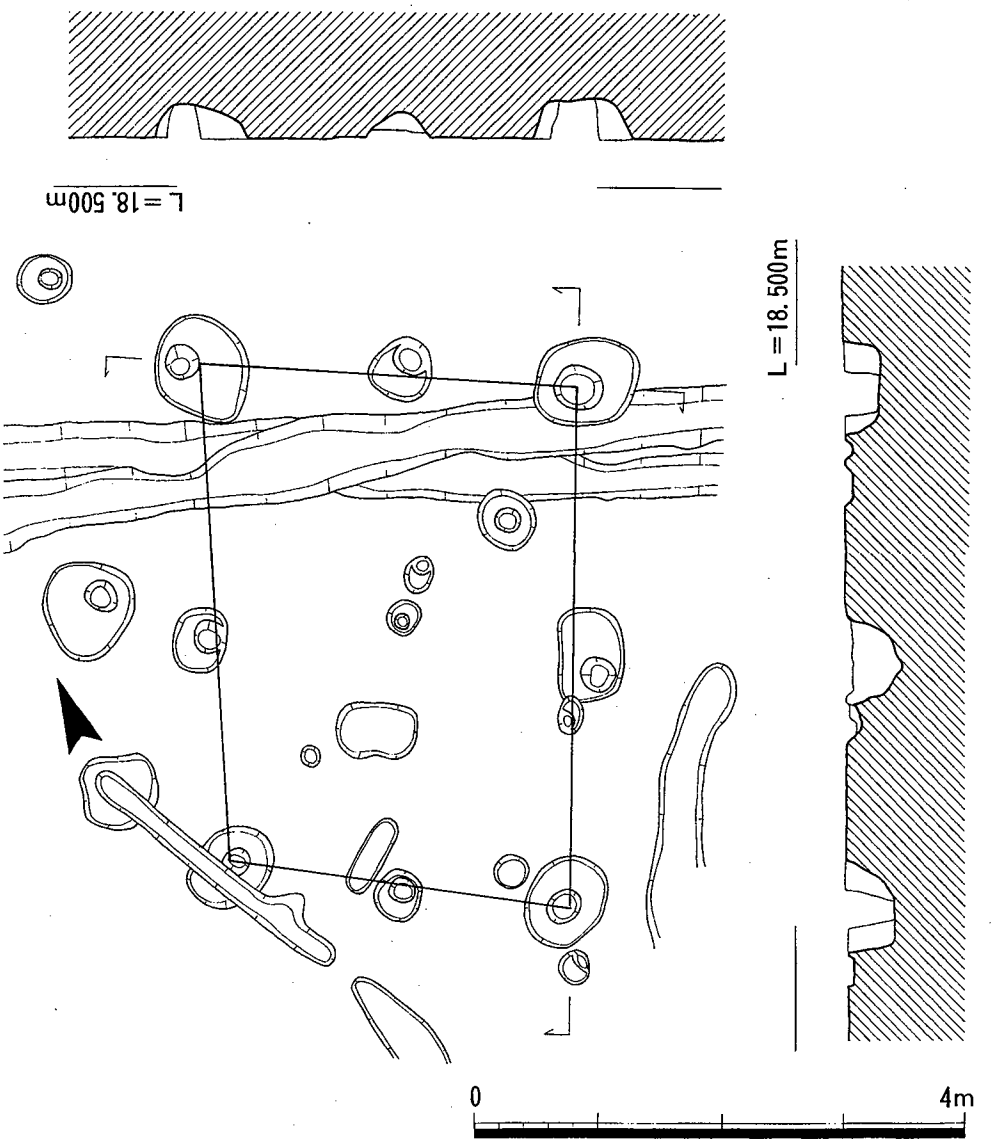


図9．掘立柱建物　ＳＢ－２

溝　ＳＤ－18

本遺構はＣ－１・２区にて検出した溝である。ＳＤ－17を切り位置する。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、幅 0.7m、深さ 0.1mを測る。埋土は黒褐色土であり、断面はレンズ状を呈す。遺物は土師器、須恵器の細片が出土しているが、図示できない。

溝　ＳＤ－１

本遺構はＢ－４区にて検出した溝である。北西～南東方向に走り、幅 0.6～１m、深さ

約0.05mを測る。埋土は暗茶色粘質土である。遺物は瓦器椀片、土師器細片が出土している。

掘立柱建物　ＳＢ－１　（図８　図版８）

本遺構はＢ・Ｃ－３区にて検出した掘立柱建物である。ＳＤ－11を切り位置する。梁行２間（ 1.6× 1.5= 3.1m）、桁行３間（ 1.7×1.25× 1.7=4.65m）であり、棟方向はやや東へ傾く南北方向である。掘方は平面プランがほぼ円形を呈し、径 0.6～ 0.8m、柱当は径0.25～0.35m、深さ0.35～0.55mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は Pit－11掘方より須恵器杯片が出土している。

掘立柱建物　ＳＢ－２　（図９　図版９）

本遺構はＢ－２区にて検出した掘立柱建物である。梁行２間（ 1.8× 1.4= 3.2m）、桁行２間（ 2.3× 1.9= 4.2m）である。棟方向はやや東へ傾く南北方向である。掘方は平面プランが楕円形、隅丸方形を呈し、径 0.5～ 0.9m、柱当は 0.3m、深さ 0.3～0.45mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器片等が出土しているが図示できない。ＳＢ－１と近い時期の建物と思われる。

4. 出土遺物

本調査では古墳時代から近世にかけての土器が出土している。量的には平安時代のものが最も多く、それ以外のものはそれほど多くはない。出土状態としては大部分のものが、包含層からの出土であり、遺構内からは少量出土したに止っている。さらにいずれの土器も細片となっており、出土量に対して図示し得るものは非常に少ない。その他、時期不明のサヌカイト片も少量だが出土している。

以下、主なものについて概要を示す。

溝　ＳＤ－22　（図10　図版10）

１～６は土師器である。

１は甕口縁部片と思われる。復元口径12.3cmを測る。口縁部端は内側に肥厚する。調整は内外面共にヨコナデを施す。

２は高杯杯底部である。杯体部は弱く内弯する。内面は不定方向のナデ、外面は横位ナデを施していると思われる。

３、４は壷である。３は鋭く「く」の字を呈する頸部を有し、その復元外径は 8.4cmを

測る。体部外面は斜位ハケ、内面下部は横位ケズリを施す。4は緩やかな頸部を有す。体部外面は縦位ハケ、内面下部は横位ケズリ、上部は不定方向ナデを施す。

5は小型壺である。頸部は鋭く曲がるが内面の稜は弱い。内外面共に調整は不明。

6は蛸壺である。復元口径 9.5cmを測る。体部は内弯し、口縁部端は内傾している。体部外面はタタキ、内面は縦位ナデ、口縁端部はヨコナデを施す。

6以外はいずれも布留式期のものと思われる。

溝　ＳＤ－15　（図11　図版10）

7は土師器高杯脚部である。脚部は外下方に下った後緩やかに開く。脚部外面は、縦位の強いナデ、内面上部は絞り痕を有し、下部は縦位ナデを施す。

溝　ＳＤ－11　（図11　図版10）

8は須恵器杯蓋である。小破片であるため調整の詳細は不明だが、口縁端部ヨコナデ、その他は不定方向のナデを施す。復元口径14.5cmを測る。

9は土師器皿である。復元口径13cmを測り、内外面共にヨコナデを施す。

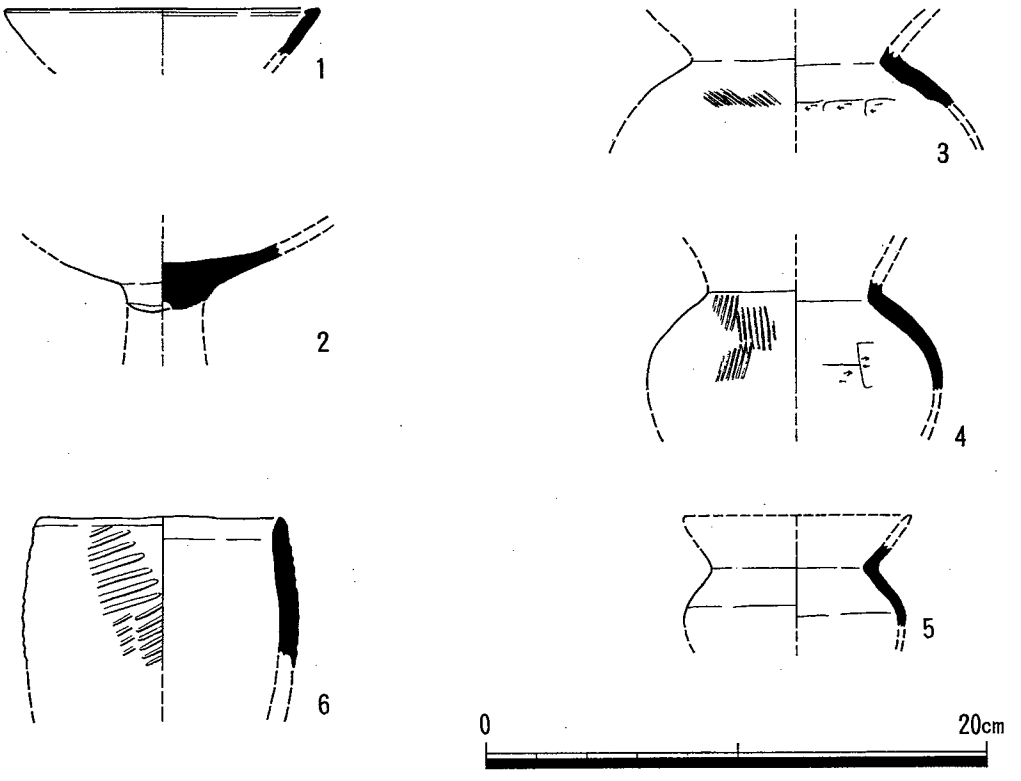


図10.　ＳＤ－22　出土遺物

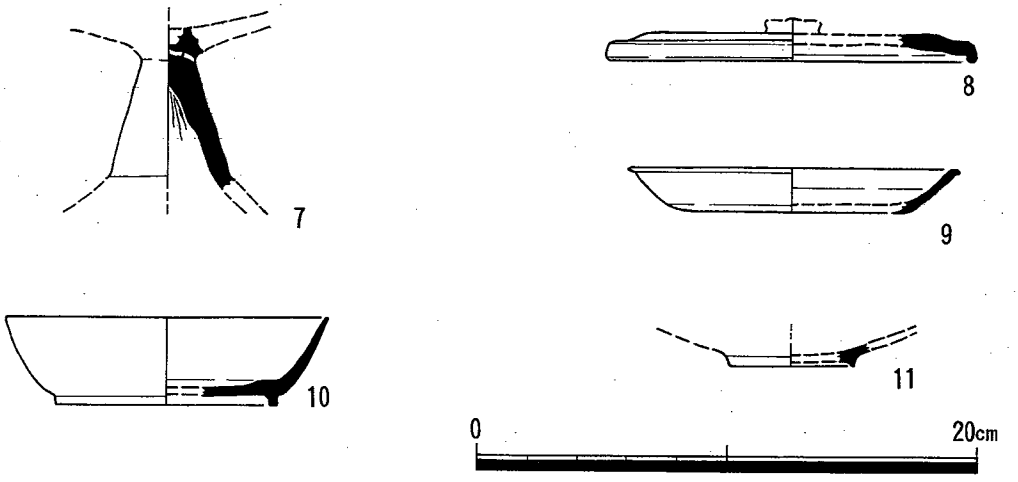


図11. ＳＤ－15(7) ＳＤ－11(8、9) ＳＢ－１(10)ＳＤ－１(11)出土土器

掘立柱建物　ＳＢ－１　（図11　図版10）

10は Pit－11掘方より出土した須恵器杯である。内外面共に回転ナデを施し、復元口径13cmを測る。

溝　ＳＤ－１　（図11）

11は瓦器椀底部である。断面三角形の弱い貼り付け高台が付く。内外面共に保存不良のため調整は不明。復元高台径５cmを測る。

包含層第６層出土土器　（図12　図版10・11）

12～14は土師器である。12は甕口縁部片である。頸部は「く」の字を呈すが内面の稜は弱い。口縁部は外反した後端部を丸くおさめる。内外面共に不定方向のナデを施すものと思われる。復元口径16cmを測る。13、14は高杯脚部である。13は中実、14は中空のものである。14は脚部接合痕にて剝れている。

15、16は須恵器杯蓋である。16は復元口径16cmを測る。

17～23は黒色土器Ａ類椀である。17は口縁部片である。口縁内面には沈線一条が巡り、内面は横位ミガキ、外面は横位ナデを施す。復元口径14.8cmを測る。18～23は底部片である。高台が断面三角形のもの（18）、長く下方に伸びた後丸くおさめるもの（19～23）の２種がある。調整は明確ではないが、内面はミガキ、外面はナデを施す。

24～26は須恵器である。24、25は杯蓋である。24は環状つまみを有し、調整は回転ナデを施す。25は復元口径12.6cmを測り、調整は回転ナデを施す。26は杯身である。底部にやや弱い高台が付き、内外面共に回転ナデを施す。復元口径14.0cm、器高 5.1cmを測る。

27は土師器杯である。内外面はヨコナデを施し、復元口径13.8cmを測る。

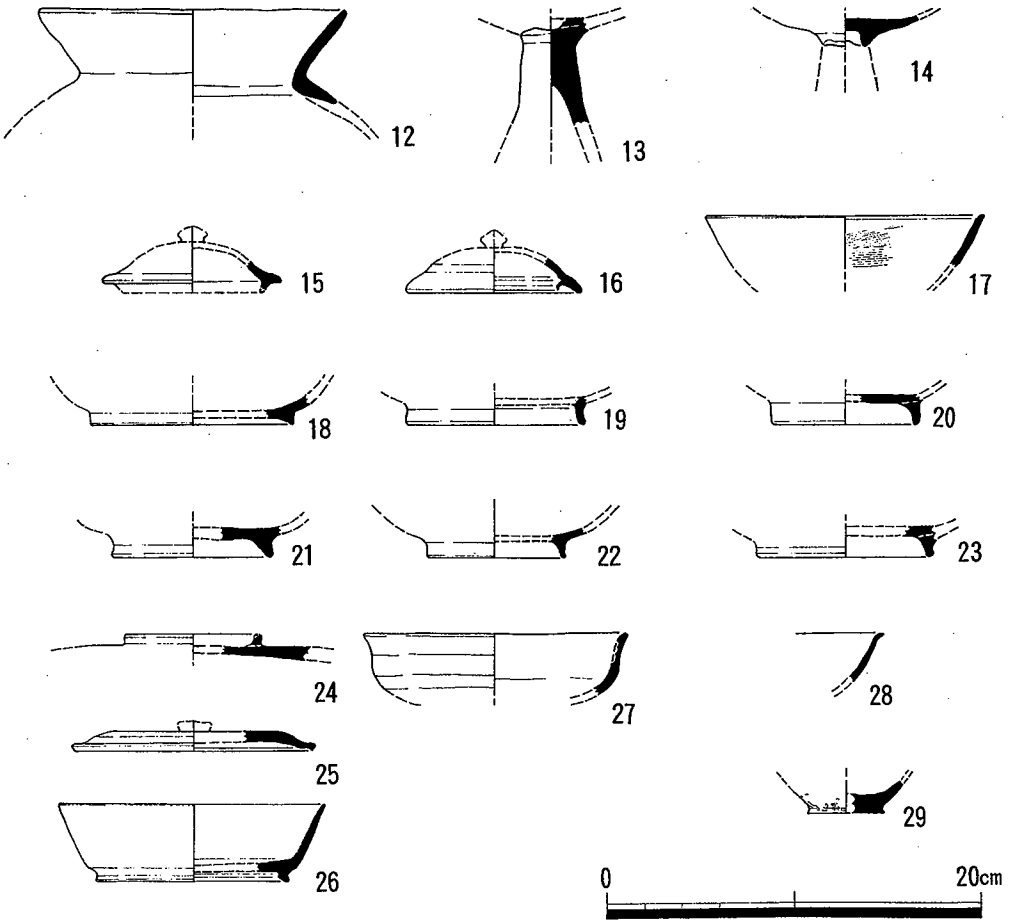


図12. 包含層第６層　出土土器

28、29は緑釉陶器である。28は椀であり、全体に釉がかかる。29は部分的に釉が残っており、底部には糸切痕を持つ。

包含層第５層出土土器　（図13　図版11）

30～32は須恵器である。30は復元口径 9.9cmを測る杯蓋である。31は壷口縁部であり、復元口径８cmを測る。32は杯である。復元高台径10.6cmを測る弱い高台が付く。

33、34は緑釉陶器である。33は椀底部片である。復元高台径 7.6cmを測る。34は椀口縁部である。

35は黒色土器Ａ類椀である。保存不良のため調整不明。復元高台径７cmを測る。

36～38は青磁、39は白磁である。38は見込み部に花文を有す。39は復元口径16.6cmを測る玉縁口縁碗である。

40～43は瓦器である。40、41は椀である。いずれも口縁部に粗いヨコナデを施す。42、

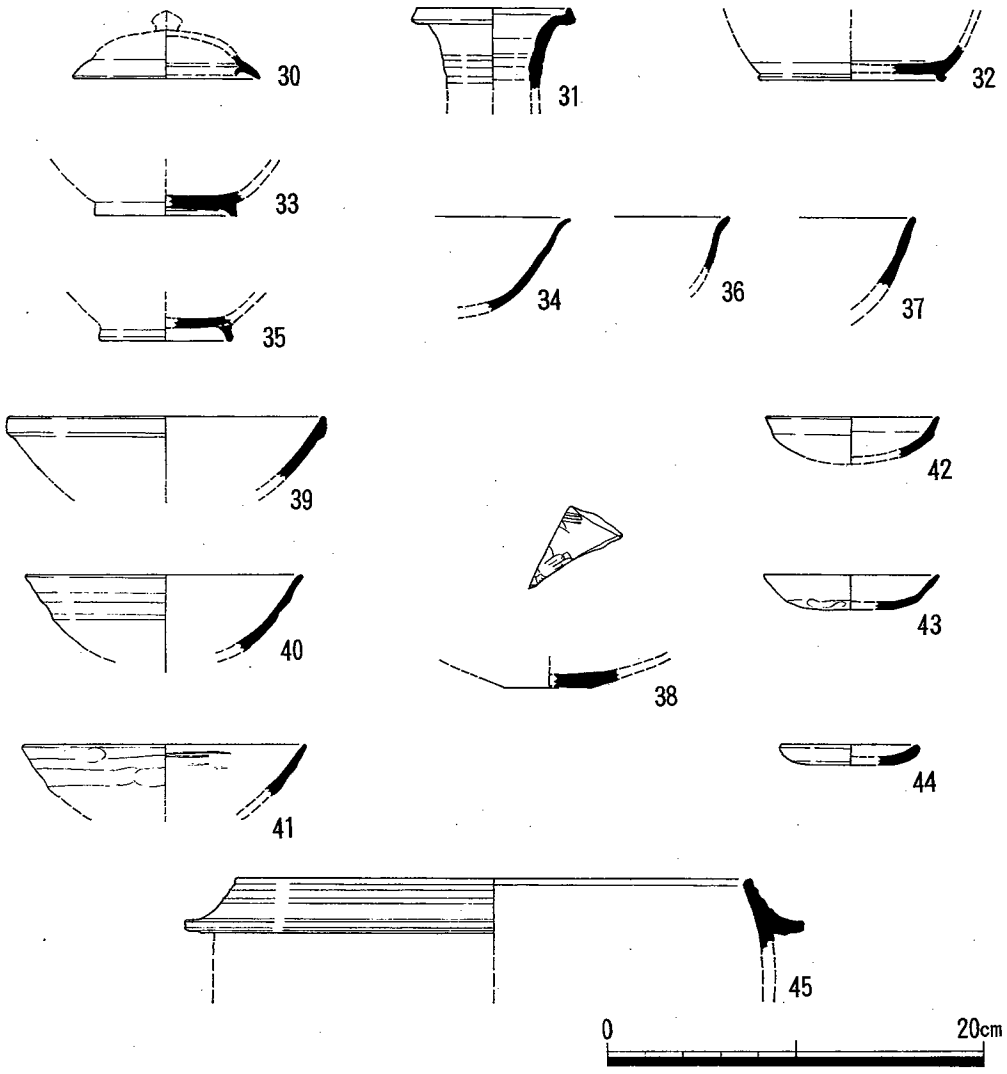


図13. 包含層第５層　出土土器

43は小皿である。42は口縁部をやや外反させるもので、復元口径９㎝を測る。

44は土師器小皿である。復元口径 7.2㎝を測る。

45は瓦質羽釜である。復元口径27.2㎝を測り、口縁部はヨコナデを施す。

漁　具　（図14　図版11）

46～58は包含層第６層出土の漁具である。46～48、54は土師質蛸壺の釣手部である。54は真蛸用。49～51は須恵質蛸壺、52、53は土師質である。55～58は土師質土錘である。55、56は楕円形、57、58は柱状を呈す。

59～62は包含層第５層出土の漁具である。59は土師質、60は須恵質の蛸壺である。61は

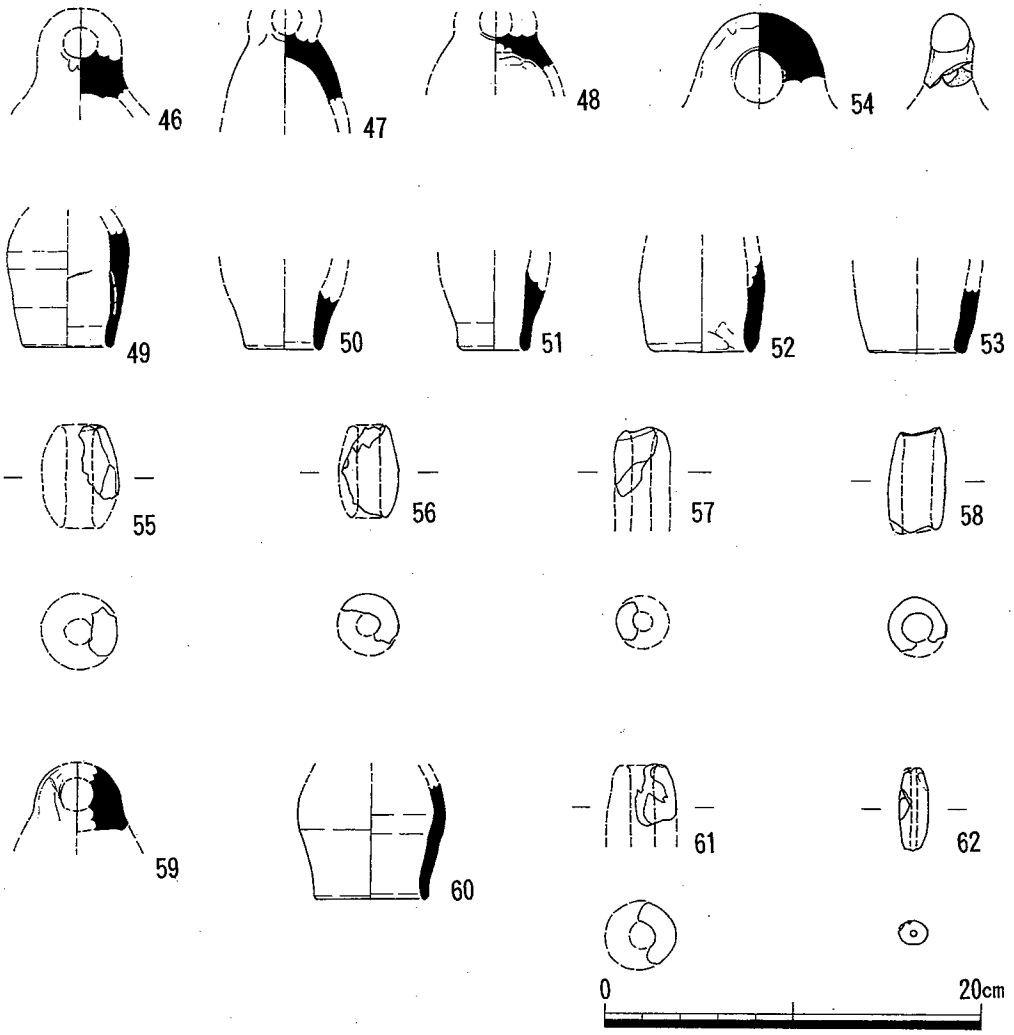


図14. 包含層第６層（46～58）、包含層第５層（59～62）出土遺物

楕円形、62は細い楕円形を呈す土師質土錘である。

第２節　第２区の調査

１．調査の概要

本調査地は第１区の南東側にあたり、来庁者駐車場の一角である。

建設計画に基づき、調査予定地内に東西約16m、南北約21mの調査区を設定し調査を開始した。調査面積は約 330㎡である。

調査において、第１区と同じ基準をもとに10×10mの区画を用い、東西方向に２区画を設け西よりＥ・Ｆの記号を与え、南北に３区画を設け南より１～３の番号を与えた。なお調査の関係で、第１区と第２区との南北方向の地区番号は一致しない。（図３）

調査では調査区のほぼ全域において遺構を検出した。

２．基本層序　（図15）

調査区における基本層序は大まかに６層に分別できる。駐車場建設時の盛土(約0.35m)、耕作土（約0.05m）、床土（約 0.2m）の下、上から順に、層厚 0.1～ 0.2mを測る淡灰褐色土（第４層）、層厚 0.2mを測る灰褐色土（第５層）、層厚 0.1～ 0.2mを測る暗茶褐色粘質土（第６層）が堆積する。地山は黄色粘土である。

地山面は調査地東端が高く、西に向って低くなっており、東がT.P.18.3m、西がT.P.18.1mを測る。調査地の現地表面はT.P.18.9～19.1mを測る。

包含層は全てのものが調査地のほぼ全域に堆積するが、後述する溝ＳＤ－１より西の部分には堆積せず、ＳＤ－１建設時もしくはそれに係わると思われる近世遺物を含む土層が存在する。また、第４・５層については第１区の第４・５層と対応すると思われるが、第６層については、今回の調査において検出した遺構の大部分が地山からの掘込みであり、部分的にしか堆積しておらず、第１区の第６層と対応するものかどうか明確でない。

３．検出遺構　（図16）

調査では調査区のほぼ全域において各種の遺構を検出したが、主にＥ区側に集中しており、Ｆ側での密度は小さくなる。

遺構は殆どを地山面にて検出しており、一部第６層上面より切り込んだものがあるがこれらも地山上にて検出した。また、駐車場設置時の盛土を除去した状況にて、溝ＳＤ－１を検出しており、盛土下にある耕作土に伴うものと思われる。

以下、調査によって明らかとなった主なものについてその概要を示す。

土　坑　ＳＫ－１　（図版14）

本遺構はＥ－３区にて検出した土坑である。調査区外へ広がるため全体の規模は不明だが、検出長軸約２ｍ、短軸約１ｍ、深さ 1.5mを測る。埋土は２層に分別でき、上層は暗灰褐色土、下層は上層と同色同質であるが黄色粘土ブロック、礫を含む。遺物は須恵器、土師器、黒色土器の細片が出土している。

土　坑　ＳＫ－２　（図17　図版15・16）

本遺構はＥ－３区にて検出した土坑である。調査区外へ広がるため全体の規模は不明だが、検出長軸 1.7m、短軸1.65m、深さ0.35mを測る。断面はレンズ状を呈し、埋土は２層に分別でき、上層が灰褐色粘質土、下層が淡灰褐色粘質土であり両層とも黄色粘土ブロックを含む。遺物は、上層上面より、須恵器杯、土師器蓋が、下層やや底より浮いた状態にて土師器皿が出土した。

性格不明遺構　ＳＸ－４

本遺構はＥ－２区にて検出した性格不明遺構である。平面プランは不整形を呈し、長軸２ｍ、短軸 1.4m、深さ 0.1mを測る。埋土は暗灰褐色土である。遺物は須恵器杯蓋等が出土している。

性格不明遺構　ＳＸ－５

本遺構はＥ－１・２区にて検出した性格不明遺構である。平面プランは不整形を呈し、検出最大長約７ｍ、幅約４ｍ、深さ 0.1mを測る。断面はレンズ状を呈し、埋土は淡灰褐色土である。遺物は土師器細片が出土している。

柱穴群

Ｅ・Ｆ－２・３区では多数の柱穴を検出したが、まとまりがなく建物等の復元はできなかった。時期的には出土遺物の殆どが土師器細片のみであり明確ではないが、ほぼ平安時代のものと思われる。

Pit －33はＥ－１区にて検出した。平面プランは円形を呈し、掘方径約 0.4m、柱当径 0.2 m、深さ0.21mを測る遺物は柱当から土師器甕２点が出土した。

溝　ＳＤ－３

本遺構はＥ・Ｆ－２区にて検出した溝である。検出長16m、幅0.55～ 1.1m、深さ 0.1～ 0.2mを測る。断面は薄いレンズ状を呈し、埋土は上層が暗茶褐色土、下層が暗灰色粗砂である。遺物は土師器細片が少量出土した。

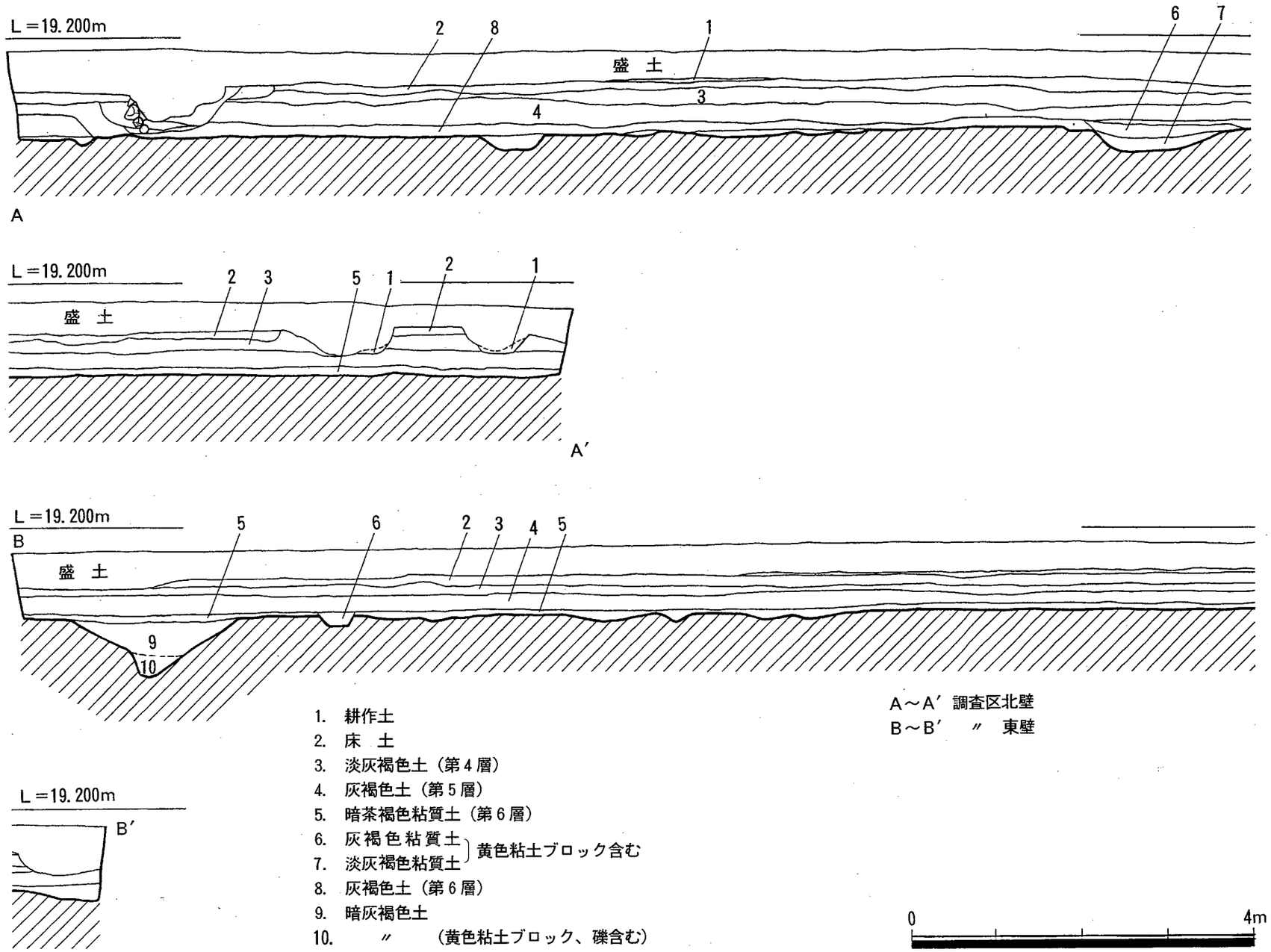


図15. 第2区調査区土層図

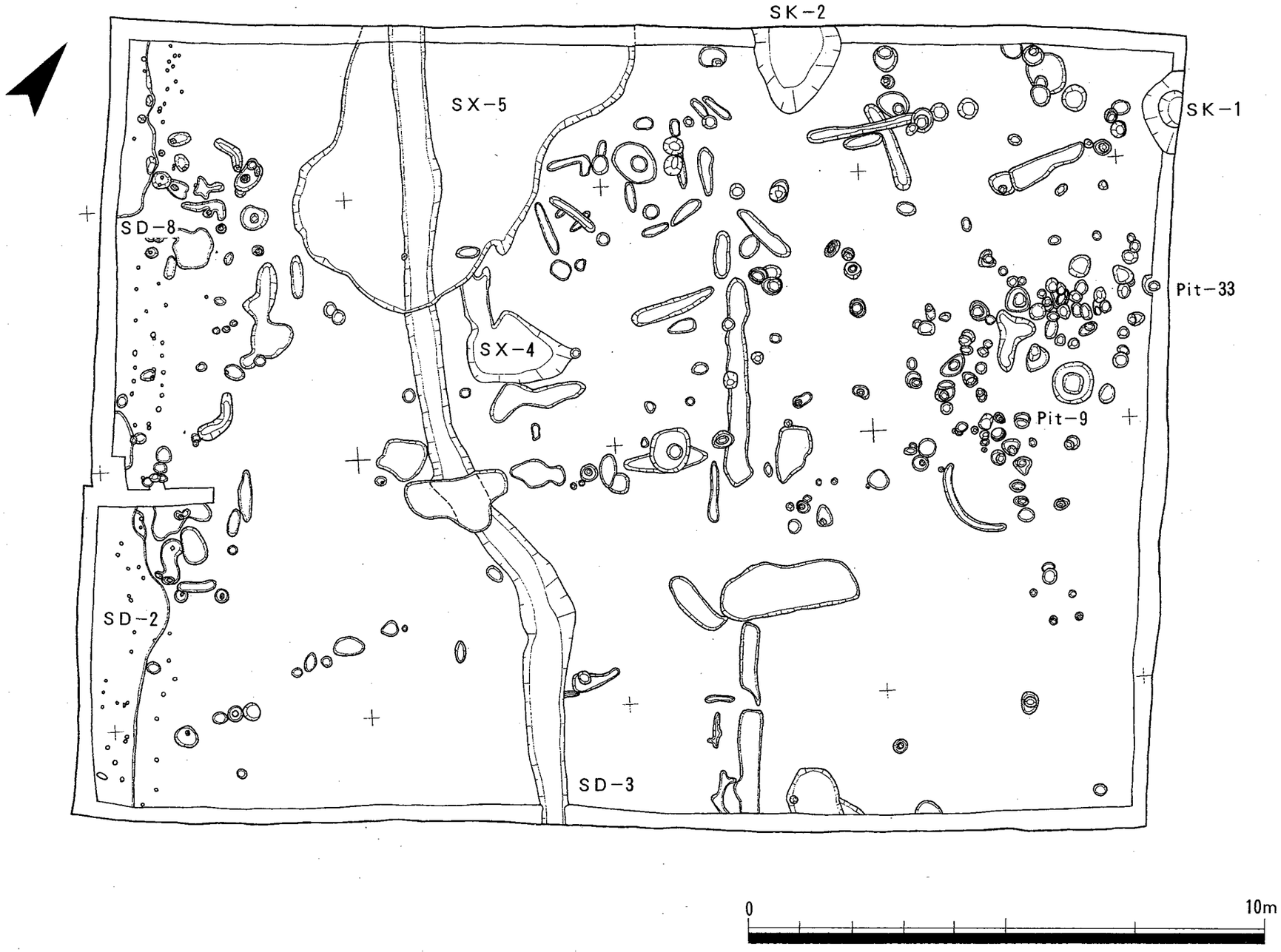


図16. 第２区遺構配置図

溝　ＳＤ－２

本遺構はＦ－１区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長 5.8m、幅 1.5m、深さ0.05mを測る。埋土は淡灰色粘質土である。遺物は瓦器椀・小皿、須恵器こね鉢、須恵器、土師器細片が出土している。

溝　ＳＤ－８

本遺構はＥ－１区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長 3.4m、幅 0.7m、深さ0.05mを測る。埋土は淡茶灰色土である。遺物は瓦器椀等が出土している。

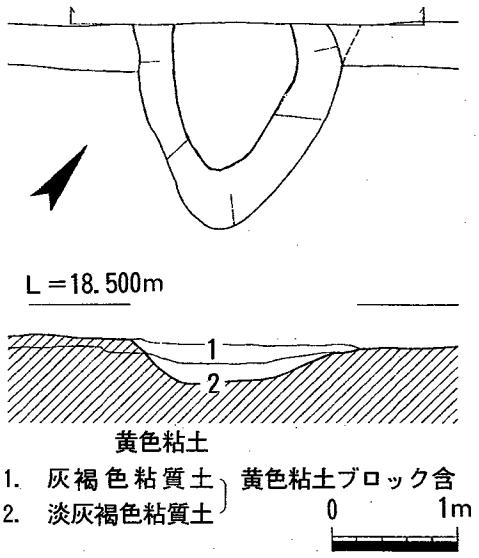
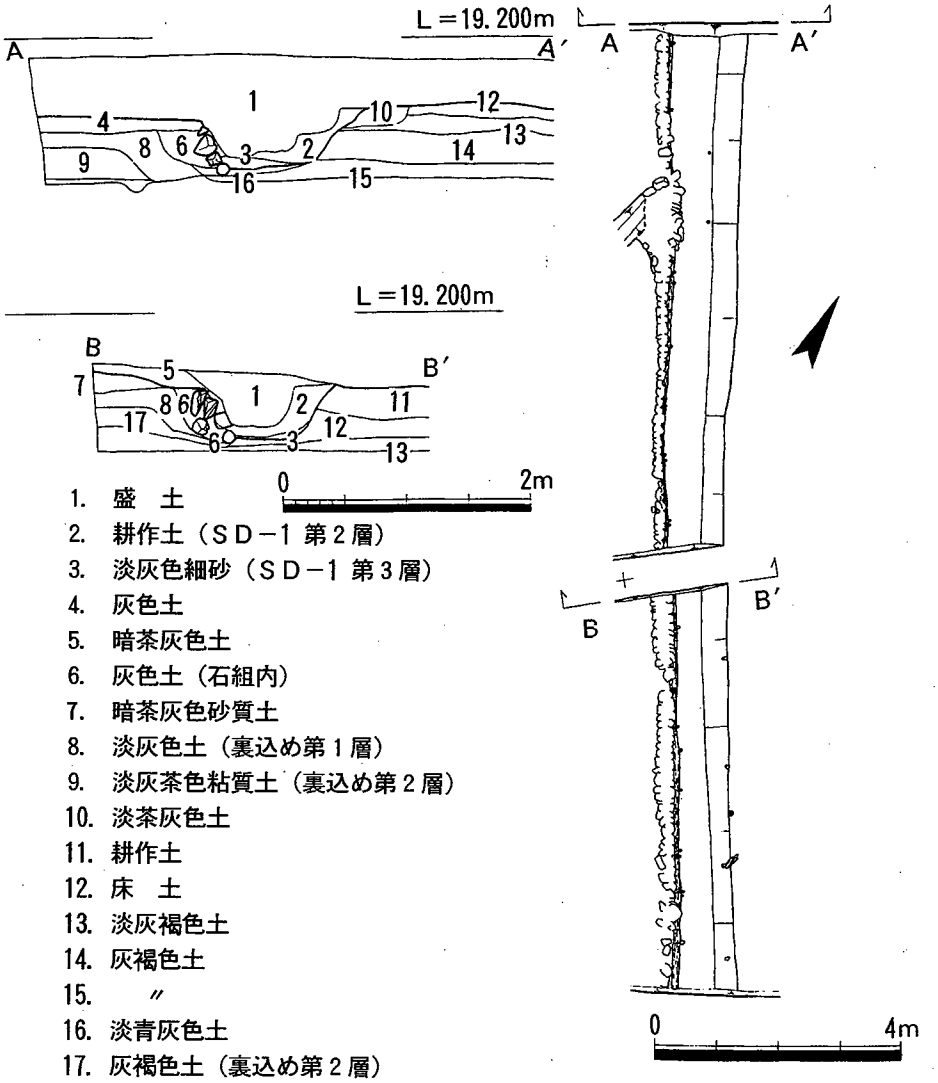


図17. 土坑　ＳＫ－２

溝　ＳＤ－１　（図18　図版17・18）

本遺構はＥ・Ｆ－１区にて検出した溝である。盛土を除去した状況にて検出し、床土上面より切り込んでいる。北西～南東方向に走り、検出長15.5m、幅１～ 1.3m、深さ 0.4～ 0.5mを測る。東肩は包含層を斜めに切り込んだものであるが、西肩は横木を杭にて固定した後、10～25㎝前後の河原石を積み上げている。埋土は盛土が入っており、その下に耕作土、細砂層が堆積しているため、現代まで使用されていたものと思われる。遺物は耕作土、細砂より陶磁器等が出土した。

さらに、本溝より東と西とでは包含層の堆積の状況が全く違なり、東側は第４層以下の包含層が存在するが、西側では近世遺物を多く含む層が存在し、本溝より西側に何らかの遺構が存在する可能性がある。しかし、調査区の端部にての検出であったためその詳細は不明である。なお、石組内や裏込め内から近世以前の遺物しか出土しないため、本溝は近世に掘削されたものと考えられる。



1. 盛　土
2. 耕作土（ＳＤ－1 第２層）
3. 淡灰色細砂（ＳＤ－1 第３層）
4. 灰色土
5. 暗茶灰色土
6. 灰色土（石組内）
7. 暗茶灰色砂質土
8. 淡灰色土（裏込め第１層）
9. 淡灰茶色粘質土（裏込め第２層）
10. 淡茶灰色土
11. 耕作土
12. 床　土
13. 淡灰褐色土
14. 灰褐色土
15. 〃
16. 淡青灰色土
17. 灰褐色土（裏込め第２層）

図18. 溝　ＳＤ－１

4. 出土遺物

本調査では古墳時代から近世にかけての土器が出土している。量的には平安時代、近世のものが多い。出土状態としては第１区調査と同様、包含層からのものが多いが、土坑や溝などからまとまって出土しているものもある。

以下、主なものの概要を示す。

土　坑　ＳＫ－２　（図19　図版19）

63は土師器皿である。完形に近い状態にて出土したものである。口縁部内面には沈線が

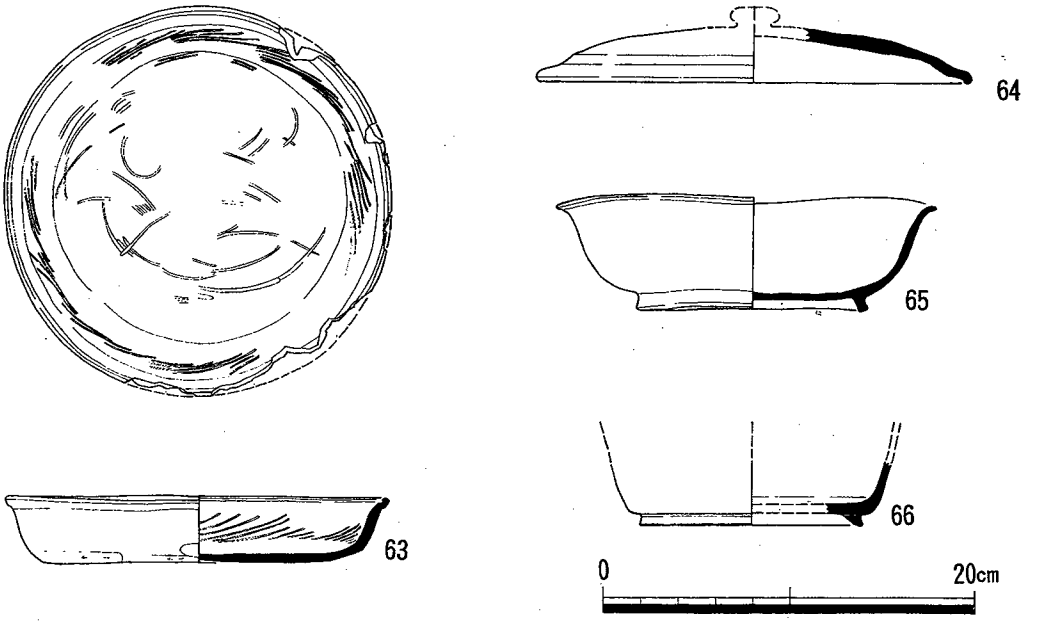


図19. ＳＫ－２　出土土器

一条巡り、体部は右上がりの暗文、見込みにはミガキを施す。外面はヨコナデ、底部ケズリ後ナデを施す。口径20.1cm、器高 3.6cmを測る。

64は土師器蓋である。内外面共にナデを施す。復元口径22.8cmを測る。

65・66は須恵器杯である。65は無蓋のものであり、体部が緩やかに伸びた後、口縁部は外反する。やや歪であるが、口径20.4cm、高台径11.8cm、器高 6.2cmを測る。66は底部片である。復元高台径11.6cmを測る。

土　坑　ＳＫ－１　（図20）

67は黒色土器Ｂ類椀である。保存不良のため調整は不明瞭だが、内面横位ミガキ、外面はナデ後ミガキを施すものと思われる。

68は須恵器杯である。弱い高台が付く。復元高台径 9.5cmを測る。

性格不明遺構　ＳＸ－４　（図20）

69は須恵器杯蓋である。内外面共に回転ナデを施す。復元口径13cmを測る。

柱　穴　Pit －９　（図20）

70は須恵器杯である。内外面共に回転ナデを施し、弱い高台が付く。復元高台径 7.8cmを測る。

柱　穴　Pit －33　（図20　図版19）

71、72はPit －33柱当内より出土した土師器甕である。71は体部外面に縦位ハケ、内面

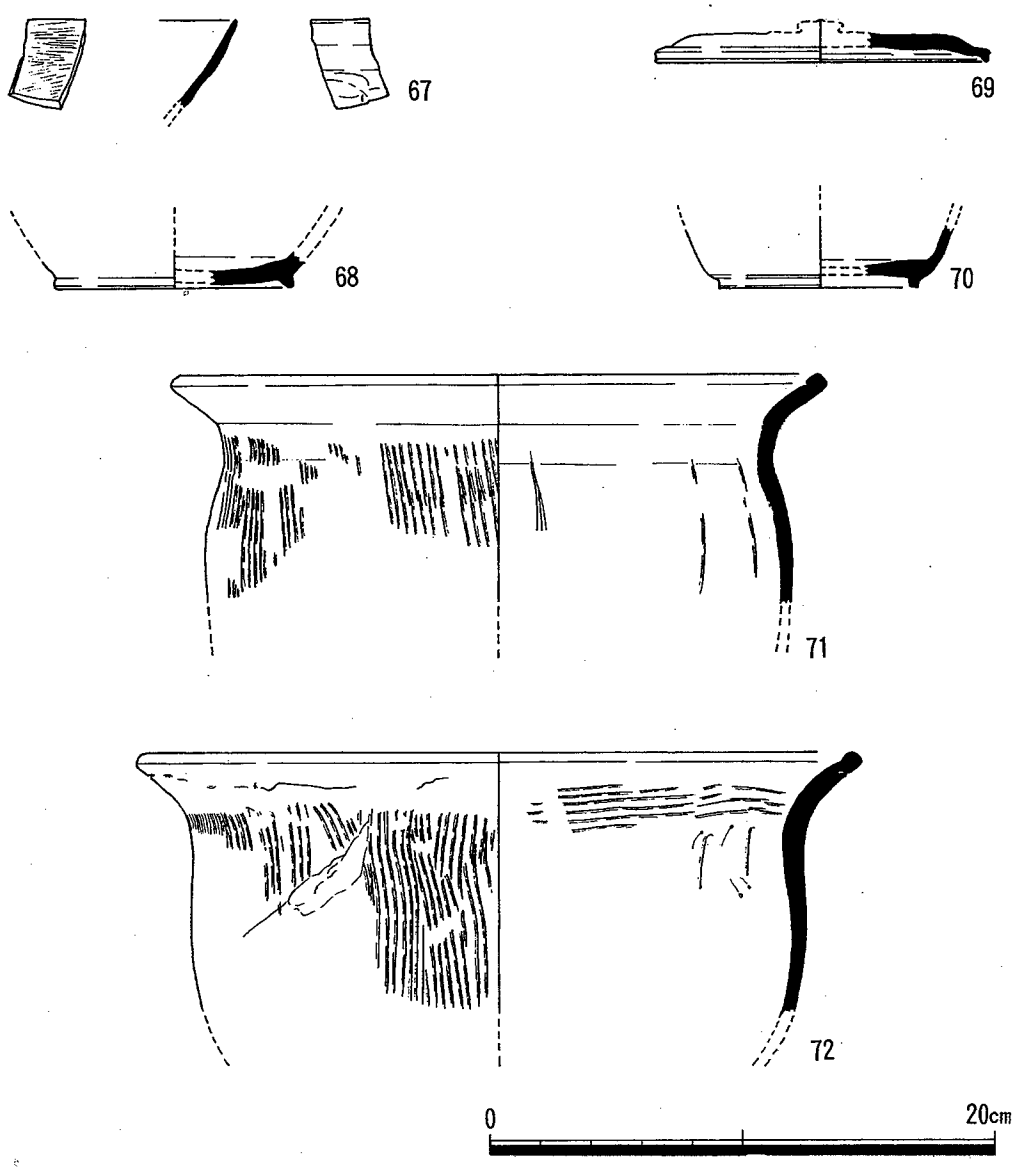


図20. ＳＫ－１(67、68)、ＳＸ－４(69)、Pit －９(70)、Pit －33(71、72) 出土土器

は強い縦位ナデ、口縁部はヨコナデを施す。復元口径25.2cmを測る。72は体部外面に縦位ハケ、内面強い縦位ナデを施す。口縁内面は横位ハケ後ヨコナデを施し、外面には接合痕を有す。復元口径27.8cmを測る。

溝　ＳＤ－２　(図21　図版20)

73は須恵器こね鉢である。体部が内弯し立ち上がる。口縁部外面には釉がかかる。体部外面、口縁内面は回転ナデ、体部外面は不定方向のナデを施す。

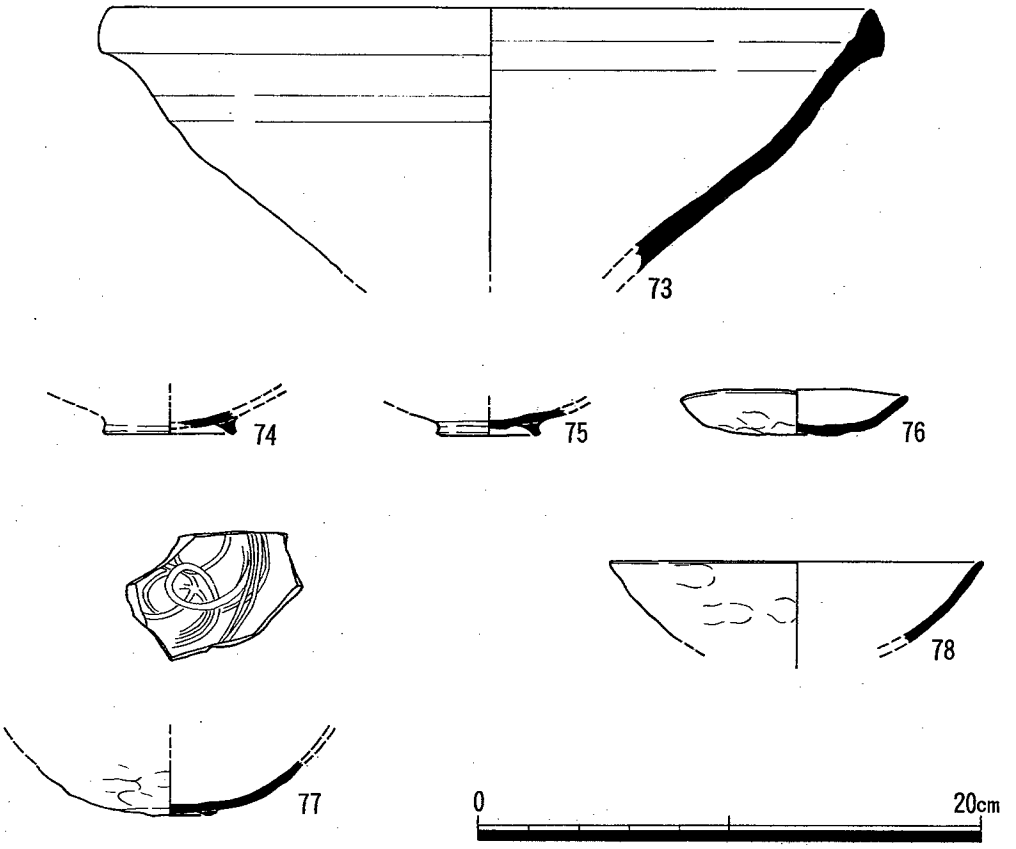


図21. ＳＤ－２(73 ～76)、ＳＤ－８(77、78) 出土土器

74～76は瓦器である。74・75は椀底部片である。両方共に保存不良のため調整は不明。復元高台径は、74は4.9cm、75は3.6cmを測る。76は小皿である。復元口径９cm、器高 1.8cmを測る。

溝　ＳＤ－８　(図21)

77、78は瓦器椀である。77は底部に弱い高台が付き、見込み部にはラセン状ミガキ、体部外面には指オサエを施す。78は外面に指オサエを施す。復元口径14.6cmを測る。

溝　ＳＤ－１　(図22　図版20)

79～83は溝埋土第３層出土である。79は須恵器杯身である。復元口径12.3cmを測る。80～82は染付である。80、82は碗、81は湯呑である。

84～88は石組内出土である。84は須恵器杯、85は須恵器壷底部である。86は染付碗である。蛇目高台を持ち、内外面に染付を施す。87、88は陶器である。87の外面には胎土目が付着する。

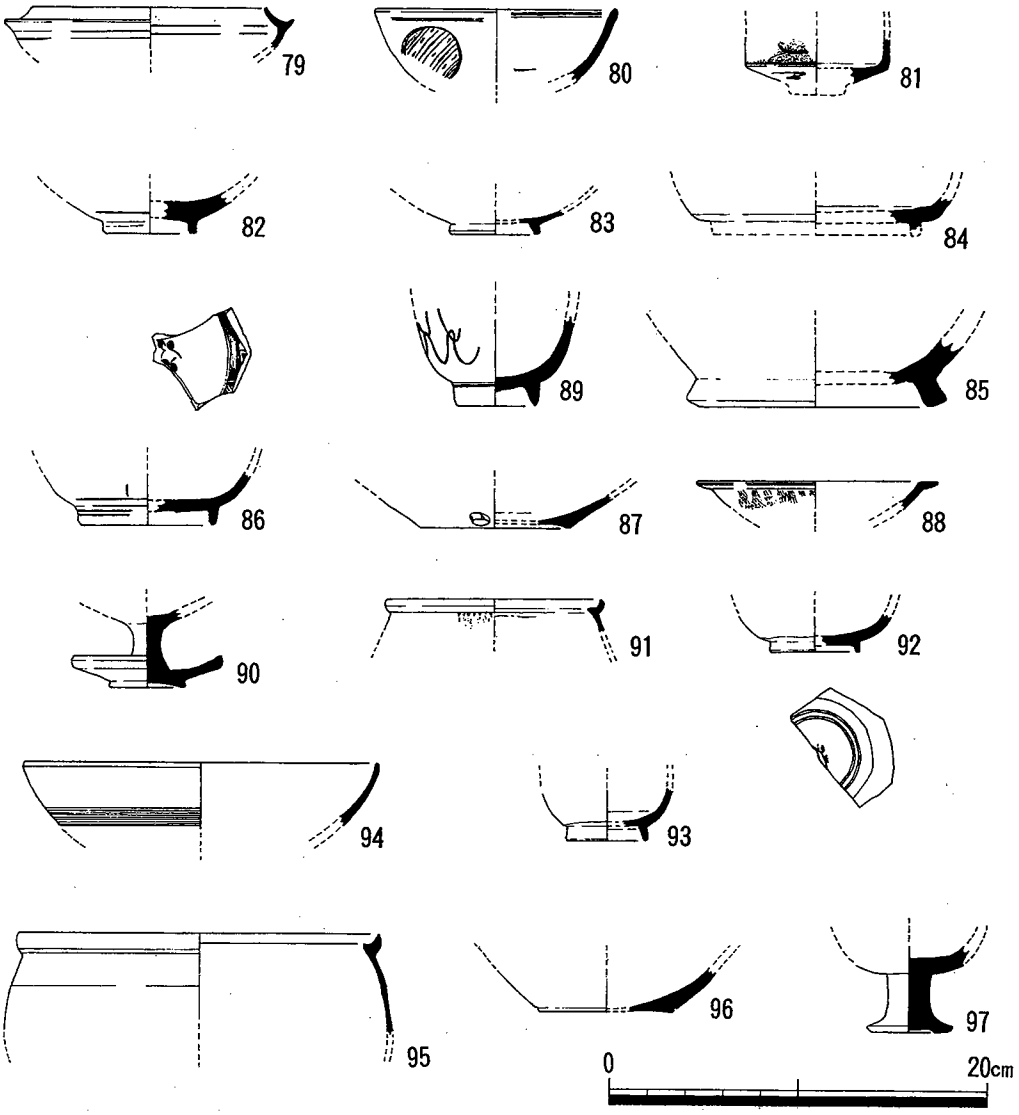


図22. ＳＤ－１　出土土器

89～91は裏込め第２層出土である。89は染付であり、外面に網目文を施す。90は磁質灯明台である。淡緑灰色の釉がかかる。91は陶質行平である。

92～97は裏込め第１層出土である。92～96は陶器である。92は底部外面に判読不明の刻印を有す。92～95は内外面に淡灰黄色の釉がかかる。96は内面に淡灰黄色の釉が薄くかかる。97は磁質仏飯器であり、淡白灰色の釉がかかる。

包含層第６層出土遺物　（図23　図版20）

98～ 100は土師器である。98は甕口縁部片である。「く」の字を呈する頸部を持ち、口

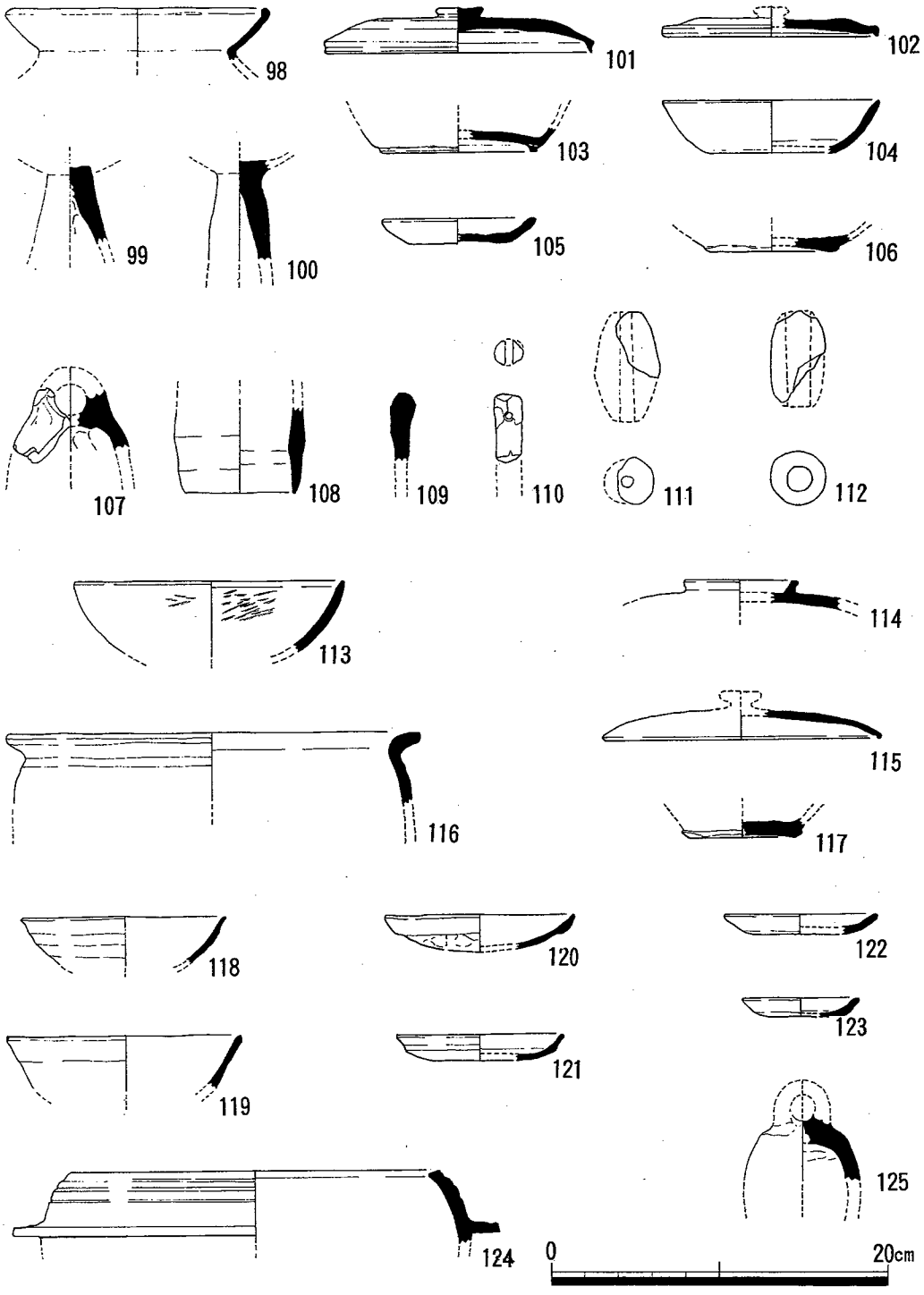


図23. 包含層第６層（98～112）、包含層第５層(113～125) 出土遺物

縁端部は内側につまみ上げている。復元口径14.8cmを測る。99、100は高杯脚部である。

101 ～ 103は須恵器である。101 、102 は須恵器杯蓋であり、101 は復元口径15.6cm、102 は12.6cmを測る。103 は杯身である。細い高台が付く。

104 ～ 106は土師器である。104 は復元口径12.6cmを測る杯である。105 、106 は小皿であり、底部外面に糸切り痕を有す。

107 ～ 109は蛸壷である。107 、108 は土師質の飯蛸壷、109 は須恵質の様に焼きしめられた真蛸壷である。

110 ～ 112は土師質土錘である。110 は棒状、111 菱形、112 は楕円形を呈する。

包含層第５層出土遺物　（図23　図版20）

113 は黒色土器Ｂ類口縁部片である。内外面共にミガキを施し、復元口径15.8cmを測る。

114 は須恵器杯蓋である。環状のつまみを有す。

115 ～ 117は土師器である。115 は復元口径16.4cmを測る蓋である。116 は甕口縁部片である。復元口径24.2cmを測る。117 は杯と思われる。底部外面に糸切り痕を有す。

118 ～ 121は瓦器である。118 、119 は椀である。保存不良のため調整不明。復元口径は 118が11.8cm、119 が13.8cmを測る。120 は皿化した椀である。口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエを施す。121 は小皿である。口縁部はヨコナデにより外反する。

122 、123 は土師器小皿である。復元口径は前者が 8.8cm、後者が 6.8cmを測る。

124 は瓦質羽釜である。口縁部外面は沈線状を呈した段を施す。復元口径22cmを測る。

125 は土師質飯蛸壷である。

第3節　第3区の調査

1. 調査の概要　（図2）

調査は建設計画に基づき、調査対象地内に幅 1.5m、長さ25mの試掘区を2ケ所設定、西側のものをA区、東側のものをB区として調査を開始した。

今回の調査は遺構の広がり等を明らかにすることが目的であり、また、遺構保存が前提であるので、遺構内埋土の掘削は最小限に止め、遺構検出を主な作業として行った。

A区ではほぼ東西方向に走る溝や柱穴多数、B区では溝や柱穴等を多数検出した。

2. 基本層序　（図24）

調査区における基本層序は大まかに6層に分別できる。耕作土（約 0.3m）、床土（約 0.1 m）の下、上から順に、層厚 0.1～ 0.2mを測る淡茶黄色砂質土（第3層）、層厚 0.2mを測る淡灰褐色砂質土（第4層）、層厚0.15～ 0.2mを測る灰褐色砂質土（第5層）、層厚 0.1～ 0.2mを測る灰黒色粘質土（第6層）が堆積し、この下に地山となる黄色粘土がある。

第5層までの土層は、A・B区ともに堆積するが、第6層についてはB区東端5mにのみ存在し、B区では前面に存在するものの薄い。また、第6層と地山面との境のラインが明確ではない。

なお、第3区におけるそれぞれの包含層は、第1区の包含層にほぼ対応するものと思われる。

3. 検出遺構　（図25）

調査ではA・B両区から多数の遺構を検出した。遺構はA区において第6層上面より掘り込まれており、一部を除いて第6層上面では検出できなかったので、第6層を除去後、地山面での検出となった。B区では第6層が東端にしか堆積しないので、第5層を除去した地山面上にて大部分の遺構を検出した。

以下、調査区毎の概要を示す。

A　区

A区にて検出した遺構は全て第6層上面より切り込まれたものである。埋土は何れも黒褐色系の粘質土であり、第6層との区別はつきにくい。遺物は各遺構から出土しているが、

柱穴が多いということと、溝等も一部を掘削したのみであるということから非常に少量で細片が殆どである。出土した遺物を見ると平安時代におさまるものであり、遺物が出土しなかった遺構についても、埋土や第6層上面から切り込まれているなどから平安時代のものと思われる。

なお、後述する第6層出土土器は、第6層除去時遺構の上部にあったものを一緒に掘削したものと思われ、それ以外は遺物を全く含まない。

B　区

B区にて検出した遺構は、第6層が一部にしか堆積しないため大部分は地山上面に検出した。埋土は溝SD－1など耕作に係わるものと思われるものが灰褐色粘質土であり、それ以外は灰黒色粘質土である。遺物は非常に少量でありまた細片であるので詳細は不明だが、おおむね平安時代でおさまるものと思われる。

また、B区西よりで検出したPit－3は、市道鳥羽畠中線の調査にて検出した建物に続くものと思われる。

4. 出土遺物

本調査にて出土した遺物の大半は平安時代のものである。古墳時代以降のものや中世、近世のものも出土しているが、少量である。大部分が包含層出土であり、その殆どが細片化している。さらに、遺構保護の関係で遺構掘削を行わなかったこともあり、図示できるものは少ない。

以下、主なものについて示す。

柱　穴　Pit －14　(図26)

126 は須恵器杯蓋である。内面は回転ナデを施し、外面は黒色の釉が薄くかかる。復元口径17.6cmを測る。

柱　穴　Pit －17　(図26　図版24)

127 は須恵器杯蓋である。内外面共に回転ナデを施し、復元口径17.2cmを測る。

128 は土師器飯蛸壺である。釣手部のみであり、保存不良のため調整は不明瞭だが外面にナデを施す。砂粒が非常に多い。

129 は土師器甕口縁部と思われる。復元口径17.2cmを測る。

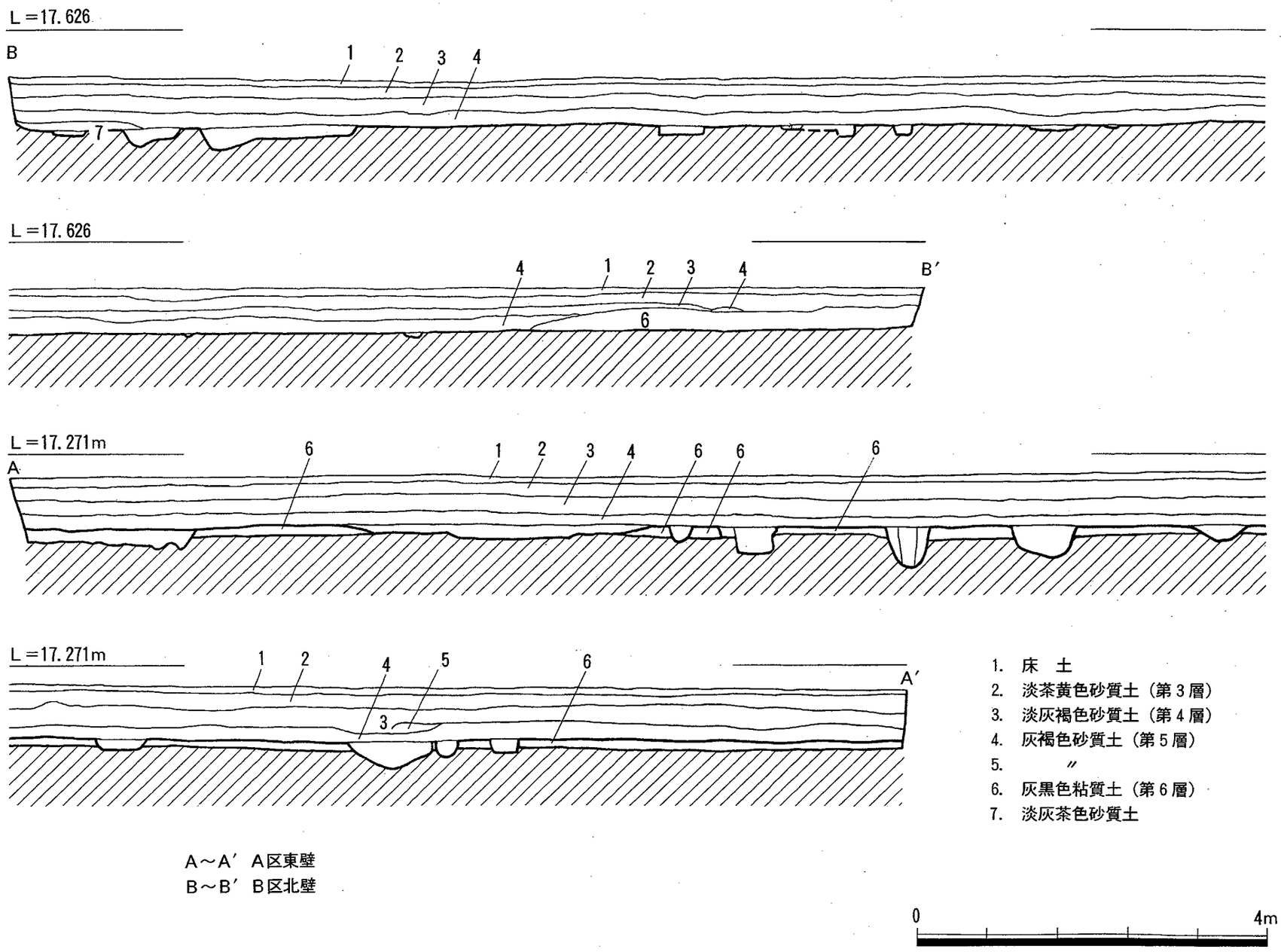


図24. 第３区調査区土層図

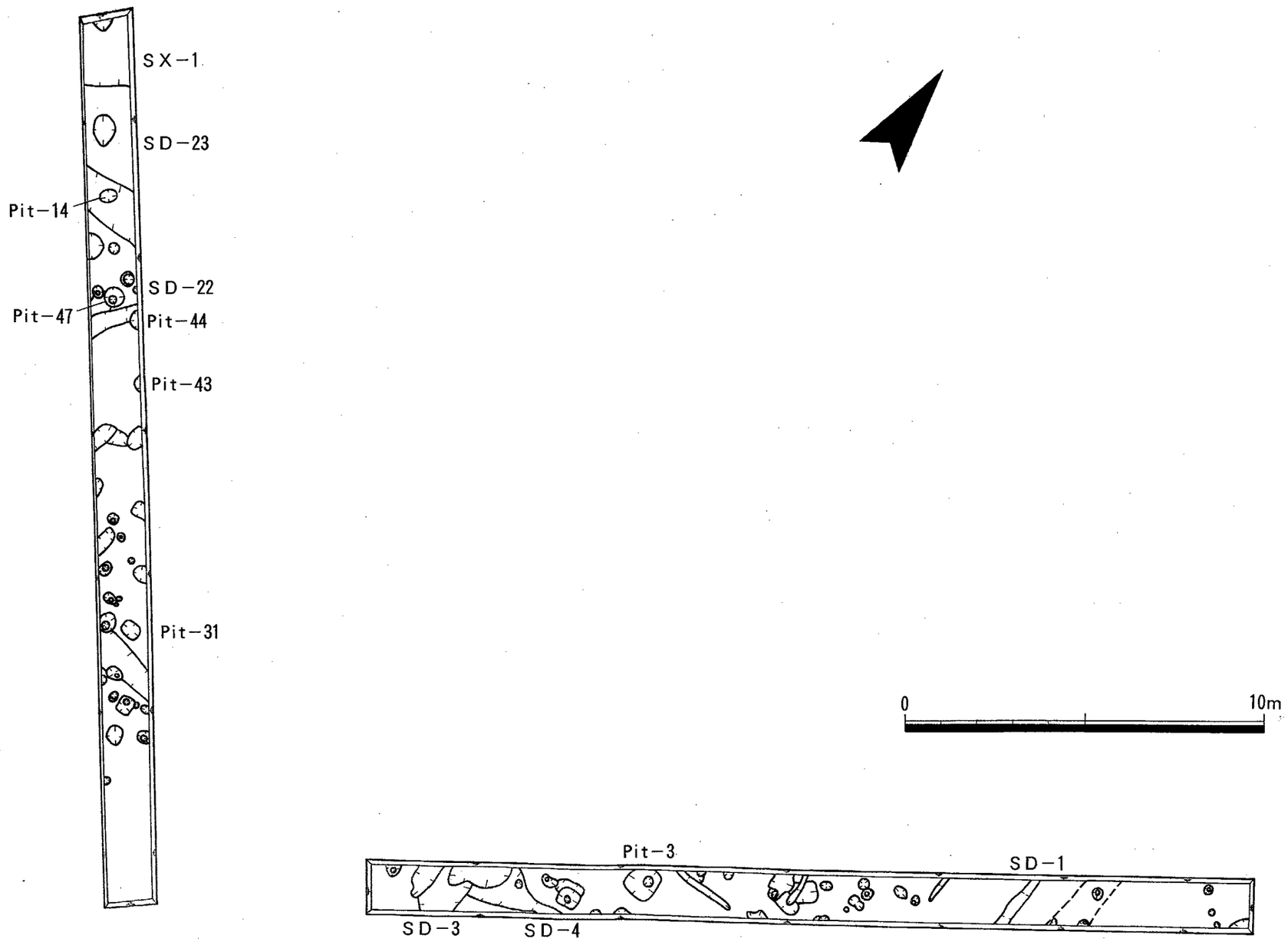


図25. 第3区遺構配置図

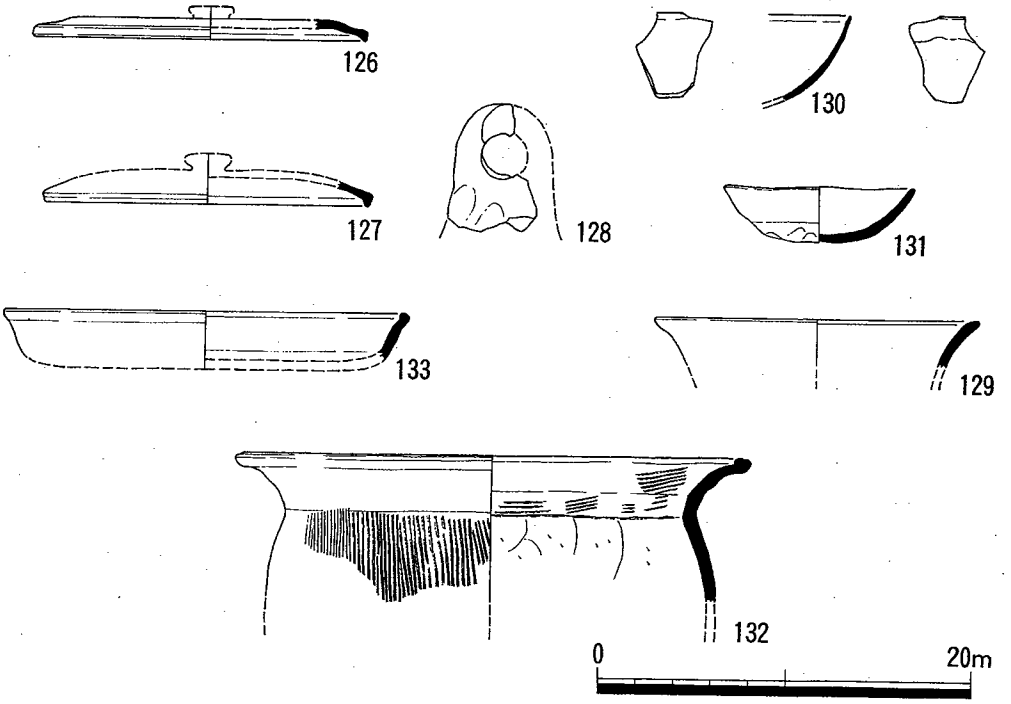


図26. Pit-14(126)、Pit-17(127、128)、Pit-31(129)、
Pit-47(130)、Pit-44(131)、Pit-43(132)、Pit-3(133) 出土遺物

柱　穴　Pit －47　(図26)

130 は黒色土器A類椀である。保存状態不良のため調整は不明。黒色化は口縁外面に迄及ぶ。

柱　穴　Pit －44　(図26)

131 は土師器杯である。約½残存する。体部内外面はヨコナデを施し、底部外面は指オサエ後粗いナデを施すようである。復元口径10.1cm、器高 2.9cmを測る。

柱　穴　Pit －43　(図26　図版24)

132 は土師器甕である。体部は緩やかに内弯し、頸部から口縁部にかけて外反した後端部を内側に折り返す。体部外面は粗い縦位ハケ、内面は斜位ケズリを施す。口縁部は内面横位ハケ後、内外面に強いヨコナデを施す。復元口径26.3cmを測る。

柱　穴　Pit －3　(図26)

133 は土師器皿である。体部はやや外反した後口縁部を上方へつまみ上げる。内外面共にヨコナデを施し、復元口径21.2cmを測る。

包含層第6層出土土器　(図27)

134 は須恵器杯である。復元高台口径 9.8cmを測る。

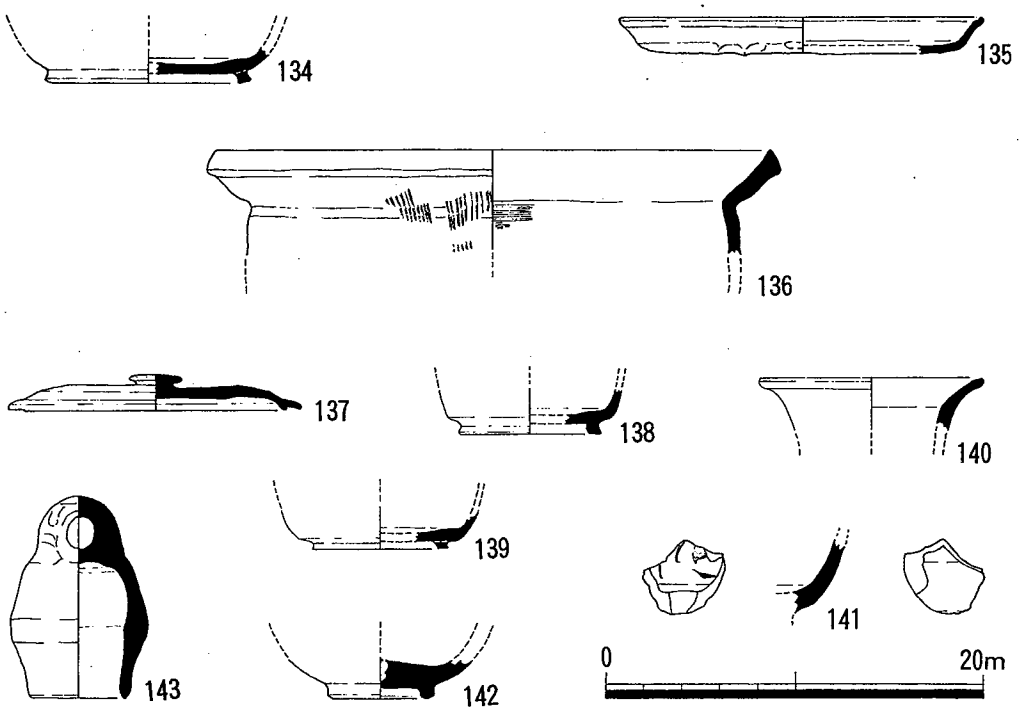


図27. 包含層第6層(134~136)、包含層第5層(137~139、141~143)、包含層第4層(140)出土遺物

135 、136 は土師器である。135 は皿であり、内面と外面体部にヨコナデを施す。底部外面は粗いナデを施す。復元口径19cmを測る。136 は甕である。体部外面には縦位ハケ、内面には黄位ハケを施す。復元口径29.4cmを測る。

包含層第5層、第4層出土遺物　(図27　図版24)

137 ～ 139は須恵器である。137 は杯蓋である。天井部外面は回転ケズリを施し、口縁部外面から内面全ては回転ナデを施す。口縁部内面にはかえりが付く。復元口径15.5cmを測る。138 は壺底部と思われる。復元高台径 7.7cmを測る。139 は杯である。復元高台径 7.2 cmを測る。

140 ～ 142は青磁である。140 は壺である。復元口径11.6cmを測り、淡白緑色の釉がかかる。141 、142 は碗である。141 は内面に片切り彫り花文を施す。142 は復元高台径 5 cmを測る。両片共に暗灰緑色の釉がかかる。

143 は土師質飯蛸壺である。内外面共に強いナデを施し、復元口径 4.8cm、器高10.6cmを測る。胎土には砂粒が多く含まれる。

140 は第4層出土であり、それ以外は第5層出土のものである。

第４章　ま　と　め

今回の調査は少ない面積での調査ではあったが、市庁舎周辺部における線・点的な調査成果に面的な成果を追加する結果となった。

第１区と第３区間にある市道鳥羽畠中線は昭和61・62年度において発掘調査を実施し、古墳時代前期から中世にかけての遺構を検出している。（以下、市道調査とする。）道路地ということで、細長い調査区において、特に平安時代前期の掘立柱建物、土坑など、平安時代集落の一角を検出した。また、出土遺物についても石帯や緑釉陶器片等が出土し、集落としての内容についても興味深い成果が得られている。（注）

今回調査を実施した第３区は、これら平安時代遺構を多数検出した北西側、第１区は南東側にそれぞれ接した部分であったため、前述のような面積的な条件の下ではあったが、平安時代の遺構の広がりを明確にすることが期待され、期待以上の成果が得られた。検出した遺構については、市道調査の時期的な変遷に比べると多く、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世に分かれ、出土遺物量は平安時代のものが多い。

以下、各時代別にまとめる。

古墳時代の遺構としては、第１区に集中している。溝ＳＤ－６を初めとする溝群や溝ＳＤ－15、21、22、23がそれに当る。溝群については、調査当初は畑地跡と考えていたが、溝間が広く、また溝幅が割に広いことから、畑地と考えるにはやや根拠が弱い。しかし、市道調査部を含め周辺には本時期の遺構は、建物１棟を除く全てが溝のみであり、当地域に集落的な状況が読み取りにくいことから、これら溝群が集落外での営み（農耕等）にかかわるものである可能性は高い。また、時期的には、市道調査部にて検出した溝ＳＤ－405に続くと思われる溝ＳＤ－23は、布留式期の土器のみであり、ＳＤ－405 は庄内期と報告しているが布留式期であり、これらの溝も布留式期前後のものである。

奈良時代の遺構としては、第２区土坑ＳＫ－２がある。確実に奈良時代と断定できるものは本土坑のみであり、本時期の様相について積極的に述べることはできない。しかし、従前の市庁舎近接地における調査では、未確認であった奈良時代遺構の存在が明らかとなったこと、良好な保存状態を示すことから、今後の調査の指標となった点は大きな成果である。

平安時代の遺構としては、第１区から第３区にかけて検出した。特に、第１区では掘立

柱建物２棟、第３区では市道調査部から続く建物を検出した。調査区内における柱穴の大部分や他の溝なども本時期に属するものと思われるが、出土遺物が少なく、また細片であることなど時期は確定できず、遺構のまとまり等も明確ではない。したがって平安時代集落について積極的に述べることはできない。だが、少なくとも本時期の集落が第１区から第３区の間に存在したこと、ほぼ北西端と南東端を確認したことは重要である。

市道調査部では５棟の平安時代掘立柱建物、土坑、溝などを検出している。建物の規模が判明するものは、いずれも梁行２間、桁行２～３間のものであり、棟方向は、南北方向２棟、東西方向２棟である。建物の配置は接近しすぎていたり、離れすぎたりとややまとまりに欠ける。今回検出した２棟は、建物規模、棟方向について市道調査部と一致している。ただ、掘方径が0.４～0.９ｍを測り、市道調査部のものよりやや大きい点が異なる。

遺物としては第１区より緑釉陶器が出土している。いずれも包含層より細片として出土したため、図示できたものは４点のみである。市道調査部では、いずれも包含層よりの出土であるが、緑釉陶器、円面硯、石帯などが出土している。泉南地域ではこれらの遺物が出土することは希であるが、緑釉陶器については、調査地周辺にて割合出土する。これらの遺物が直接その集落の性格を表すものとは思われないが、地方における中央的な遺物の在り方を考える上で注目に値する。

中、近世の遺構としては、第１区から第３区にかけて存在するが、検出数は非常に少なく、集落としての様相はつかみにくい。遺物の大部分は包含層よりの出土であり、遺構内からの出土も細片が少量出土するだけである。また、包含層第４層はその土質から耕作土が変質したものと思われ、本調査地周辺が中世のある時期から農地であったことを示している。更に、近世の遺構は第２区のＳＤ－１のみであり、ＳＤ－１は近世から現状の駐車場となる直前まで周辺の農地の配水溝として使用されていた状況を呈し、本調査地が中世以降、現代に至るまで農地であったことを示している。

以上、４時期に分けて調査成果の概要を示したが、面積的な制約のため、集落跡の一端を垣間見たに過ぎなかった。また、検出した遺構の大部分が柱穴や規模の小さな溝であったため、遺物が細片となったものが少量出土するだけで、時期を確定することが困難であったということも制約の一つとなってしまった。

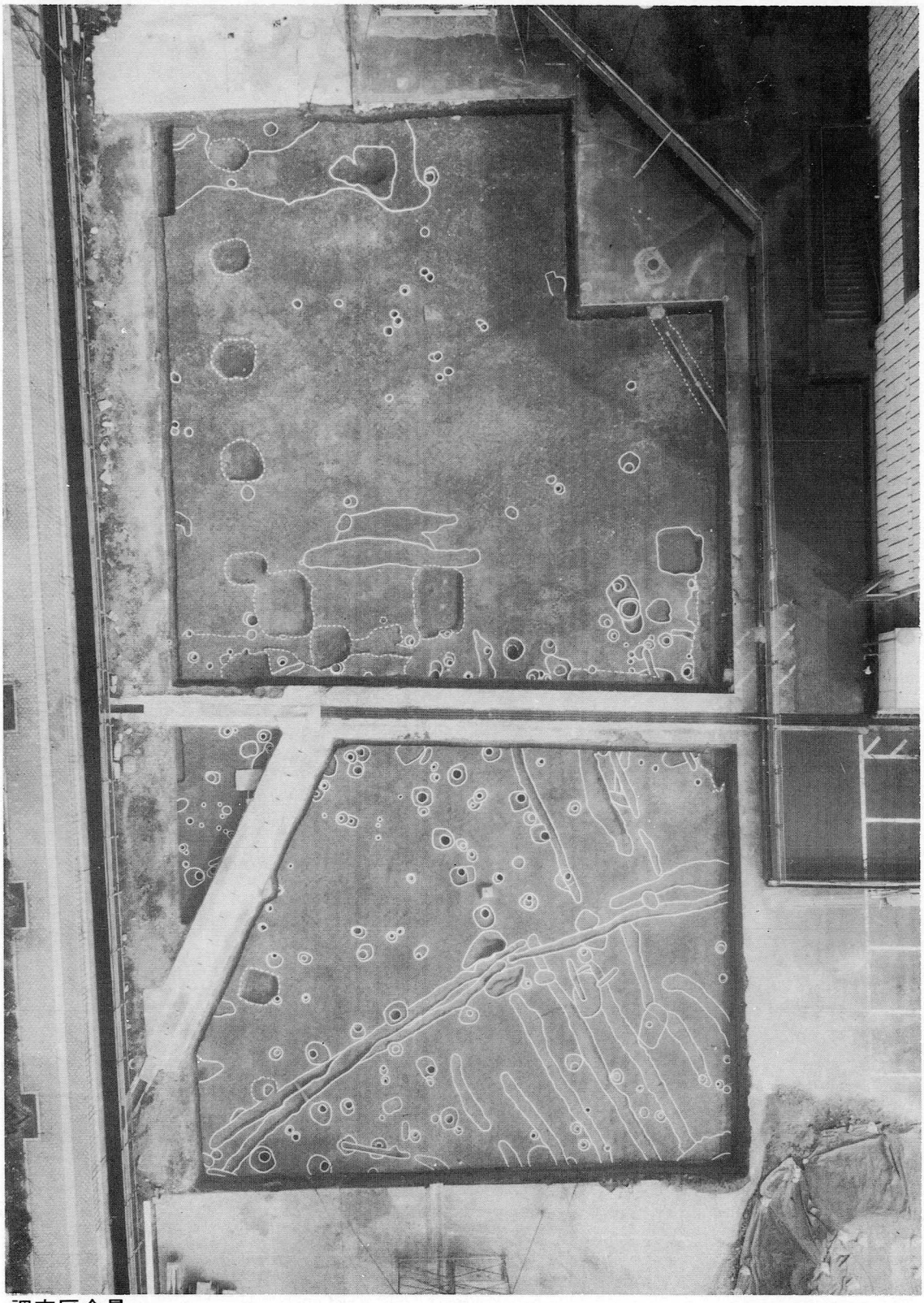
いずれにせよ、従前までの限られた成果に対し、一部の時期ではあるが遺構の広がりを明らかにしたこと、また、今後の調査に対する指標となる新しい成果が得られたことの意義は大きいと思われる。

加治神前畠中遺跡は、従前に行われた調査によって様々な成果が得られ、本市における古墳時代から近世にかけての歴史的変遷を明らかにできる有望な遺跡である。現状では成果の割には、それらを有機的に関連づける事実が判明しておらず、今後これらの点について注意をはらい積極的に調査を進め、集落の様相を明らかにして行きたい。

（注）池田毅編「加治神前畠中遺跡発掘調査概報」　貝塚市埋蔵文化財調査報告第15集
貝塚市教育委員会　1988

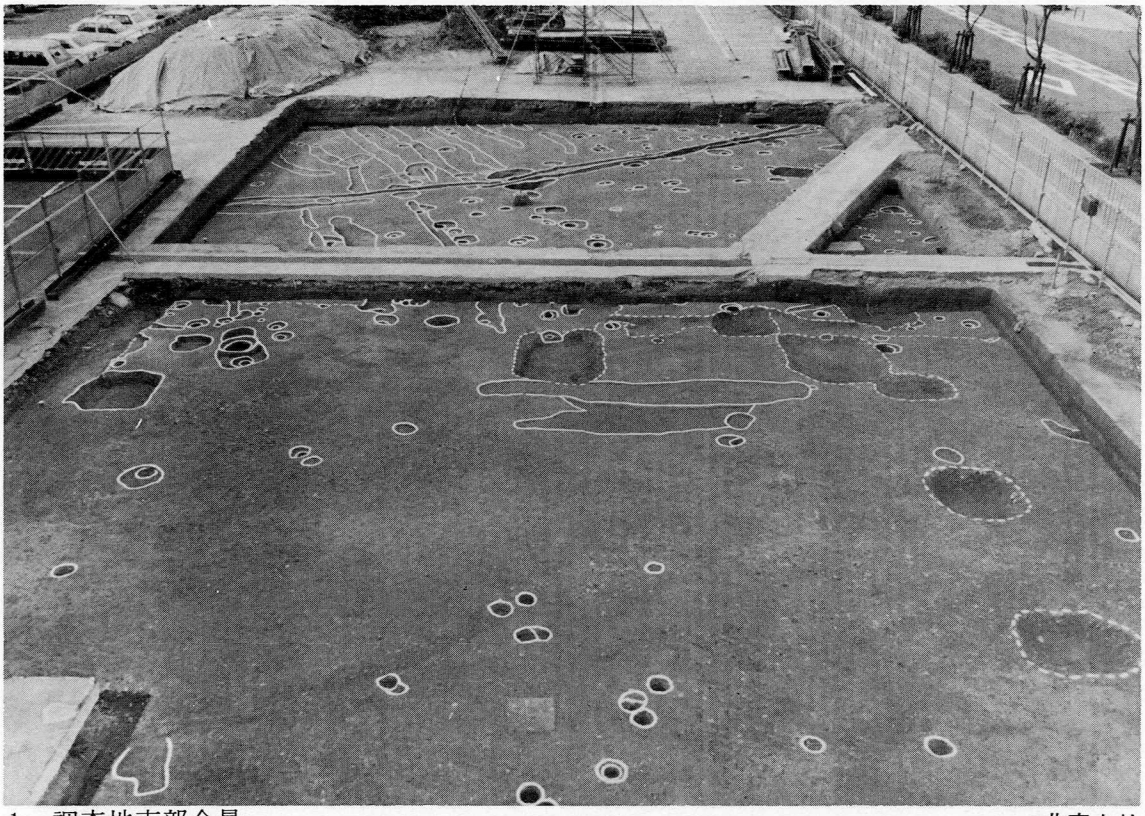
図　　版

図版1　第1区

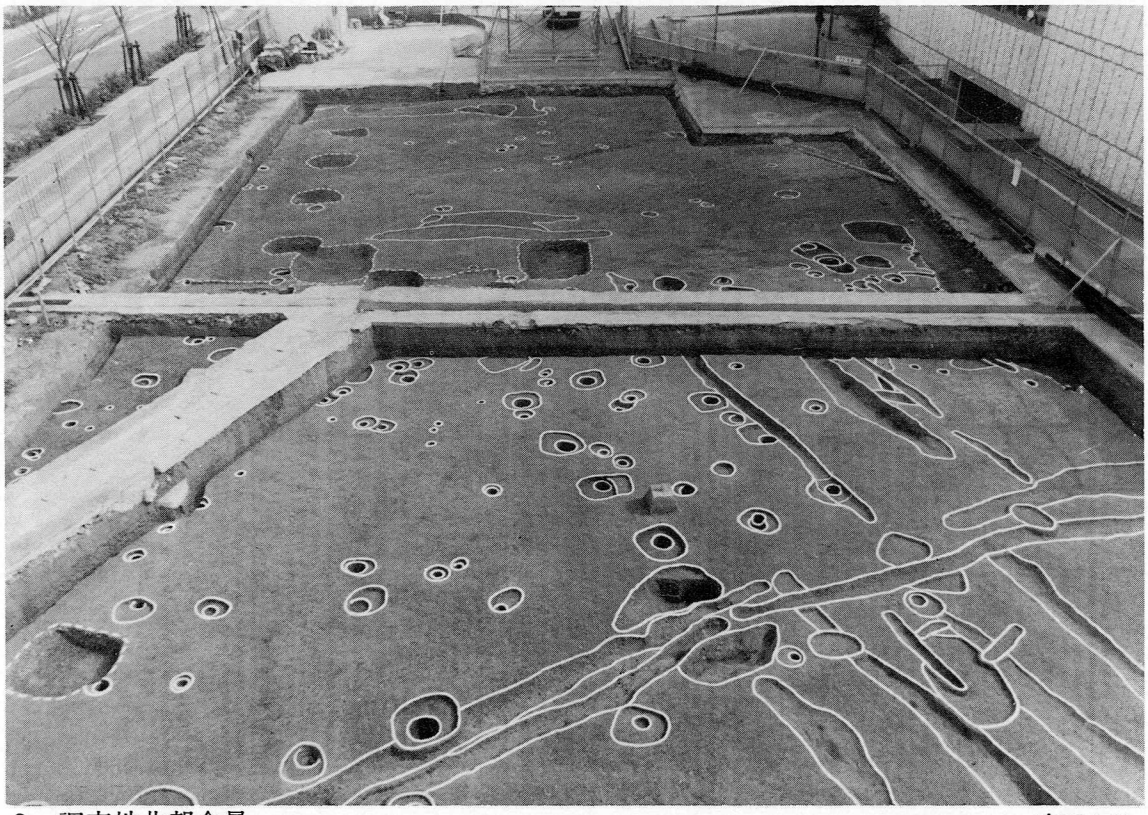


調査区全景

図版2　第1区

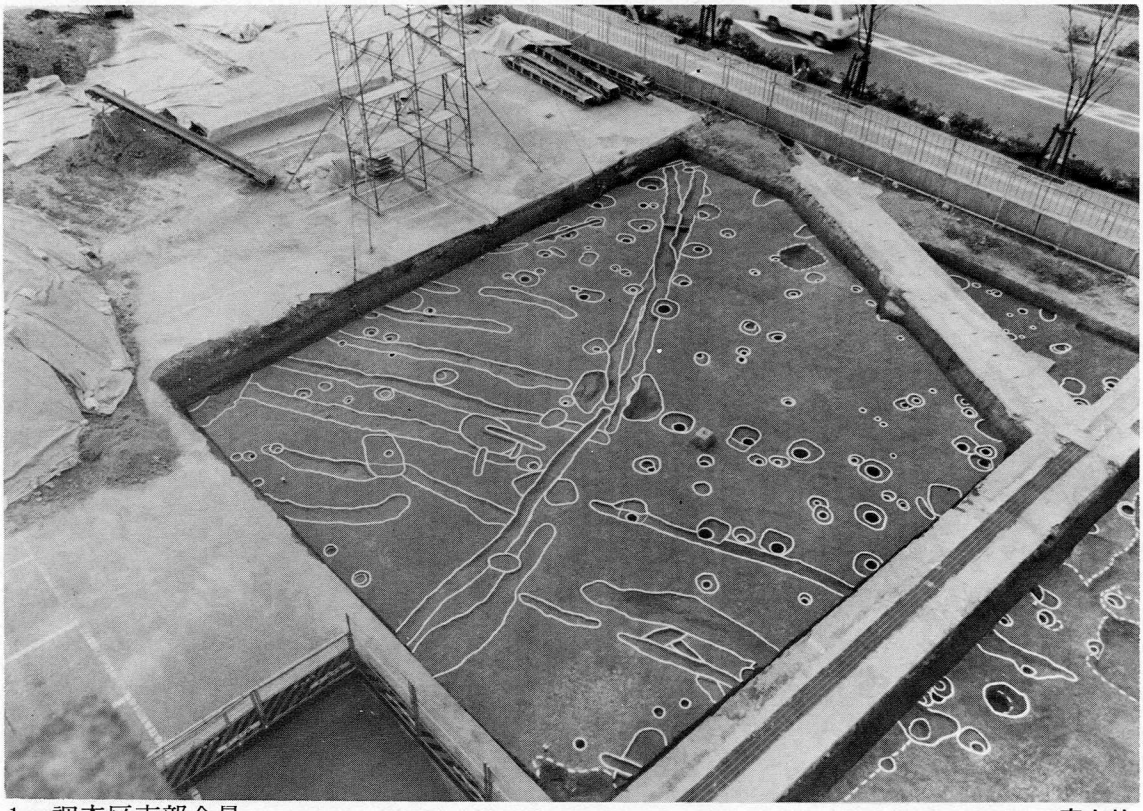


1.　調査地南部全景　　北東より

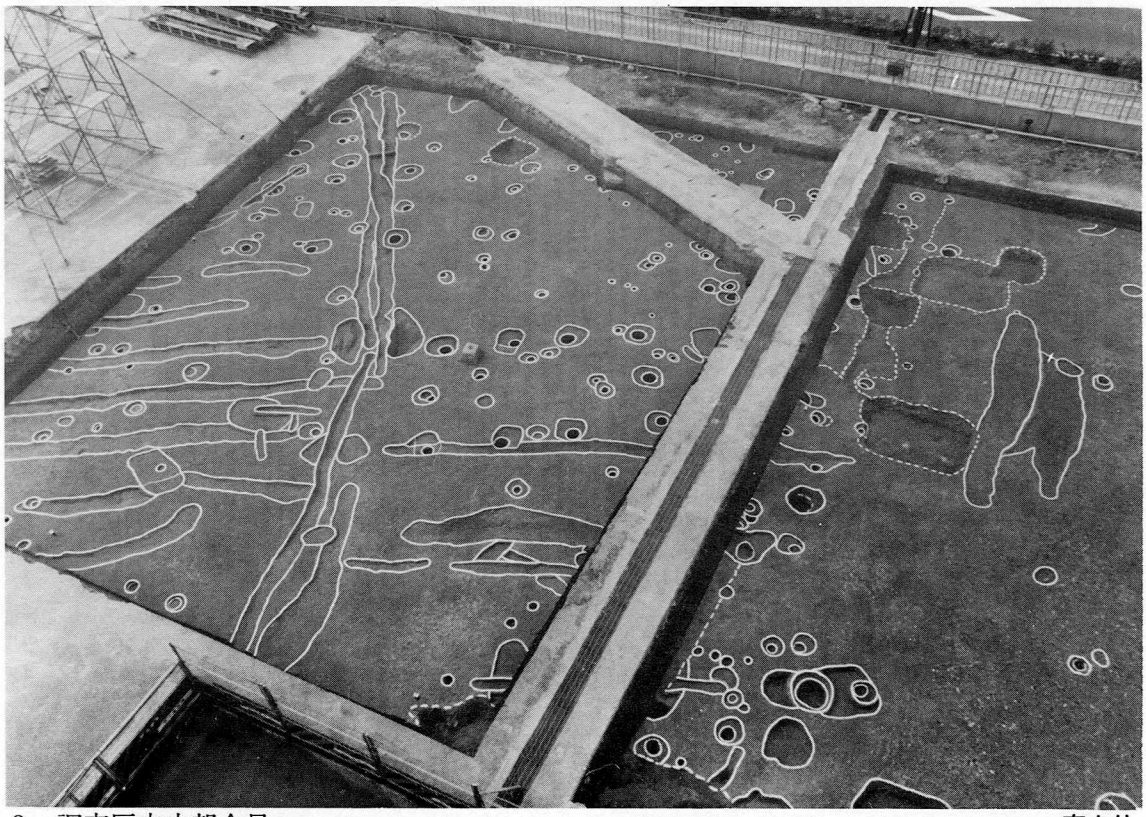


2.　調査地北部全景　　南西より

図版3　第1区

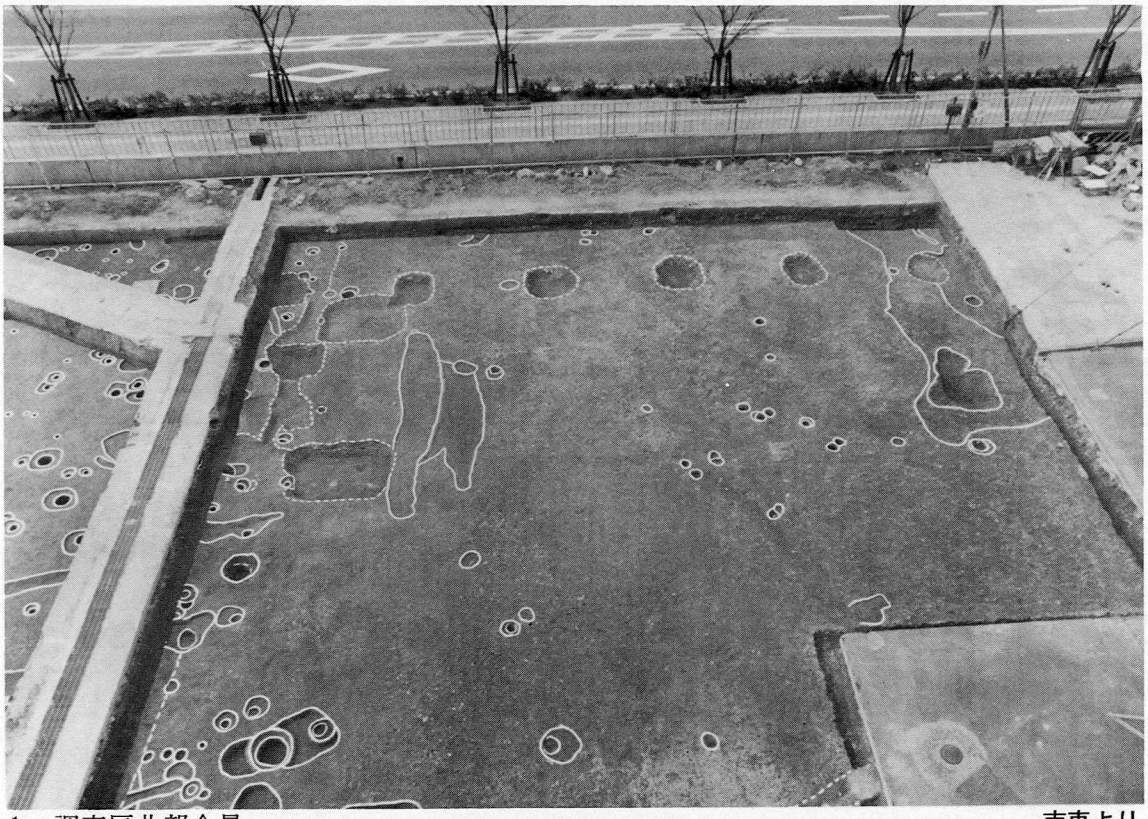


1.　調査区南部全景　　東より

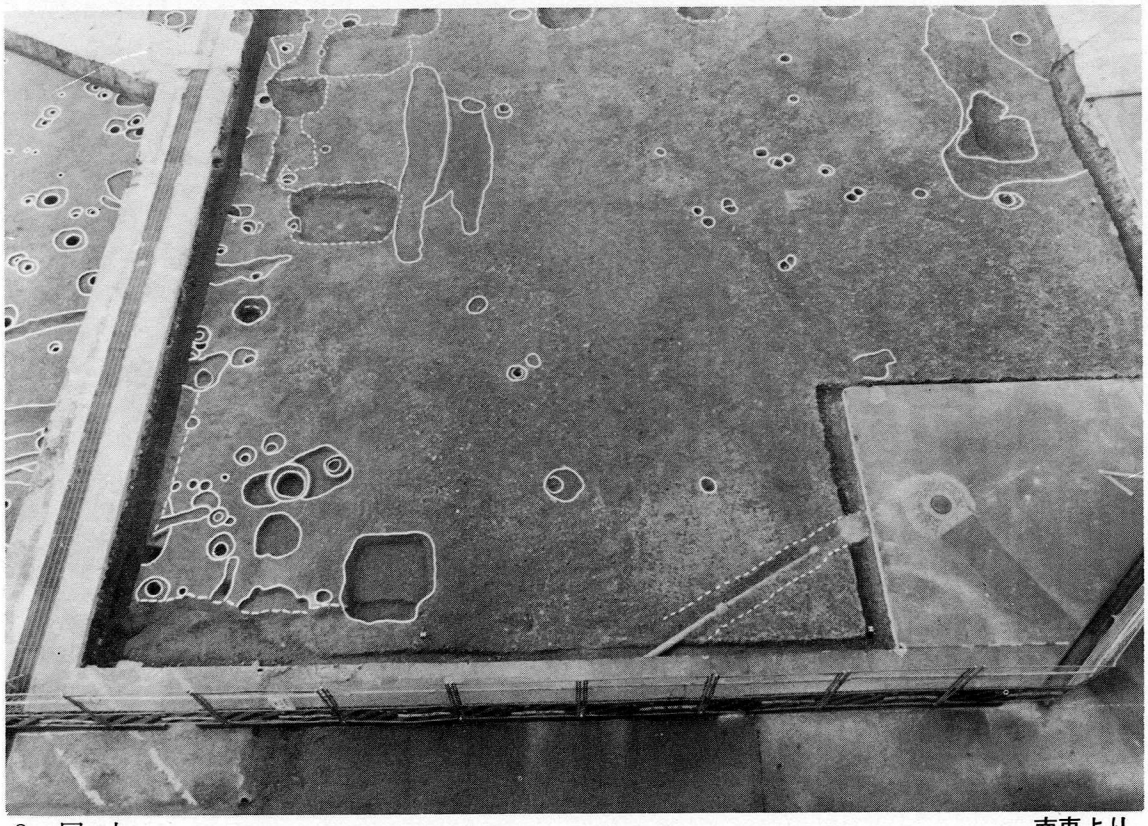


2.　調査区中央部全景　　東より

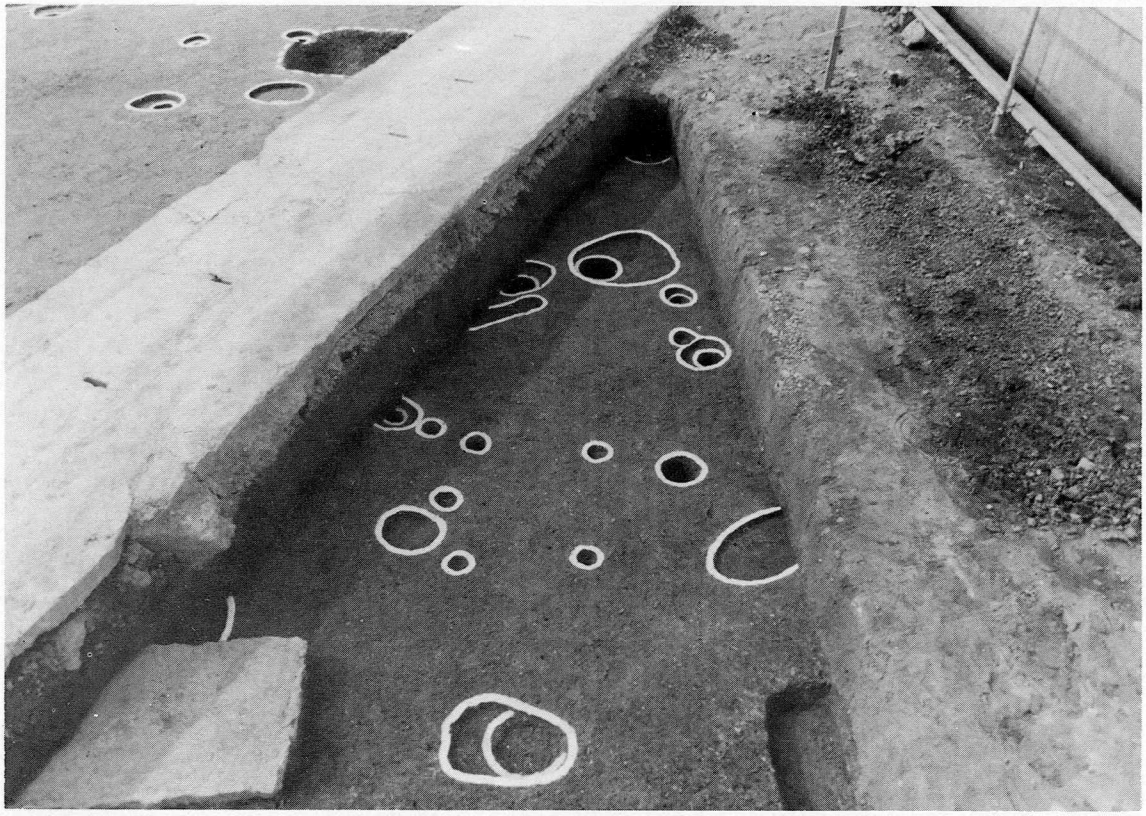
図版4　第1区



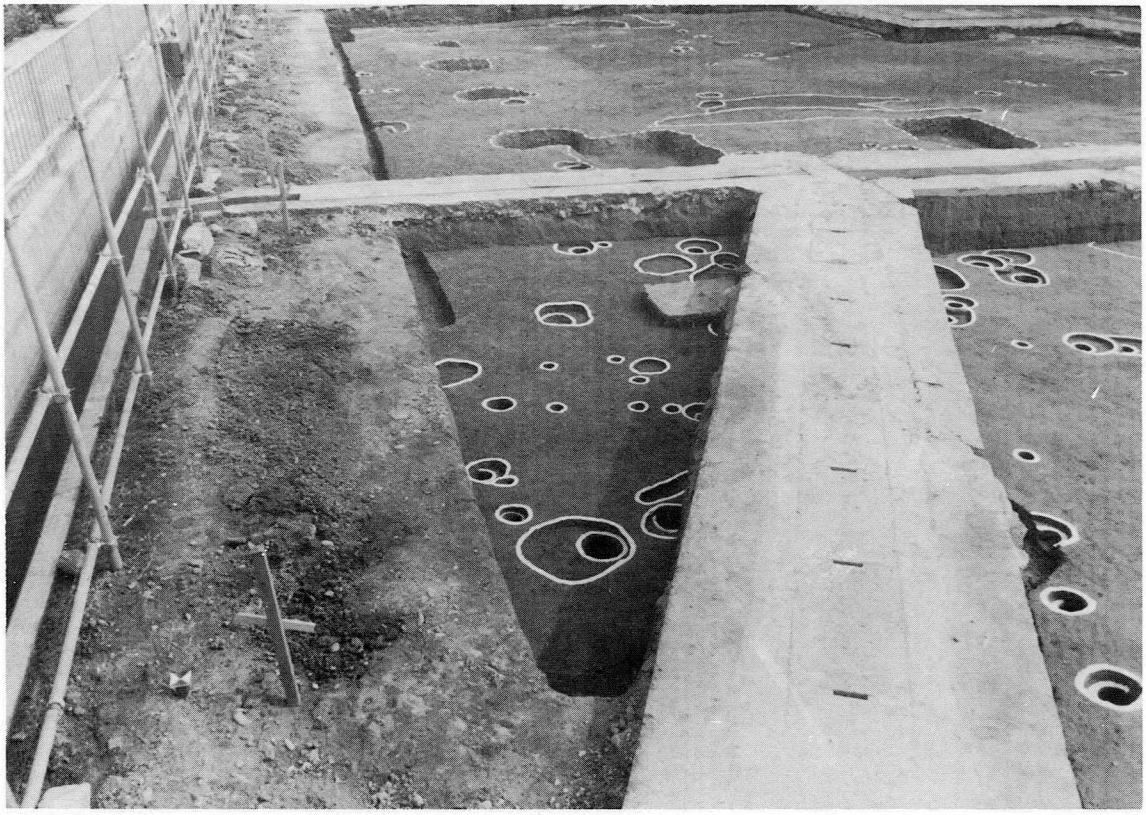
1.　調査区北部全景　　南東より



2.　同　上　　南東より



1. 調査区西部完掘状況　　北東より

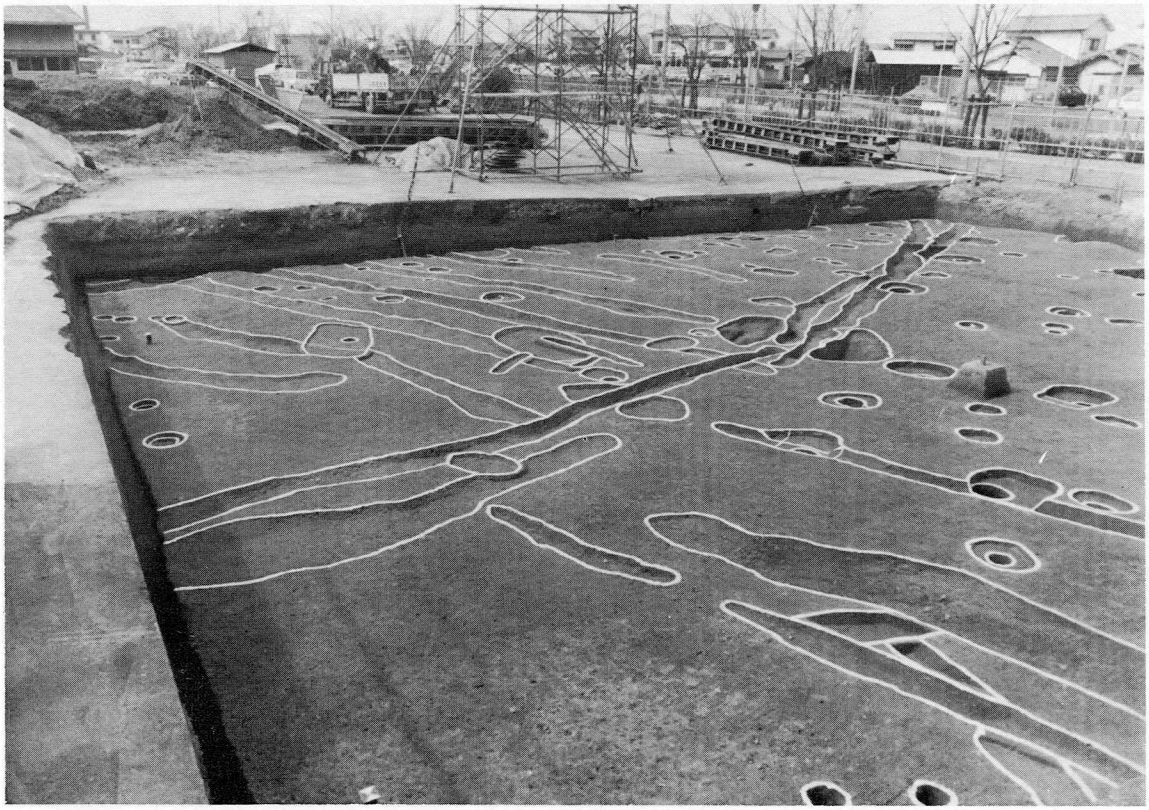


2. 同 上　　南西より

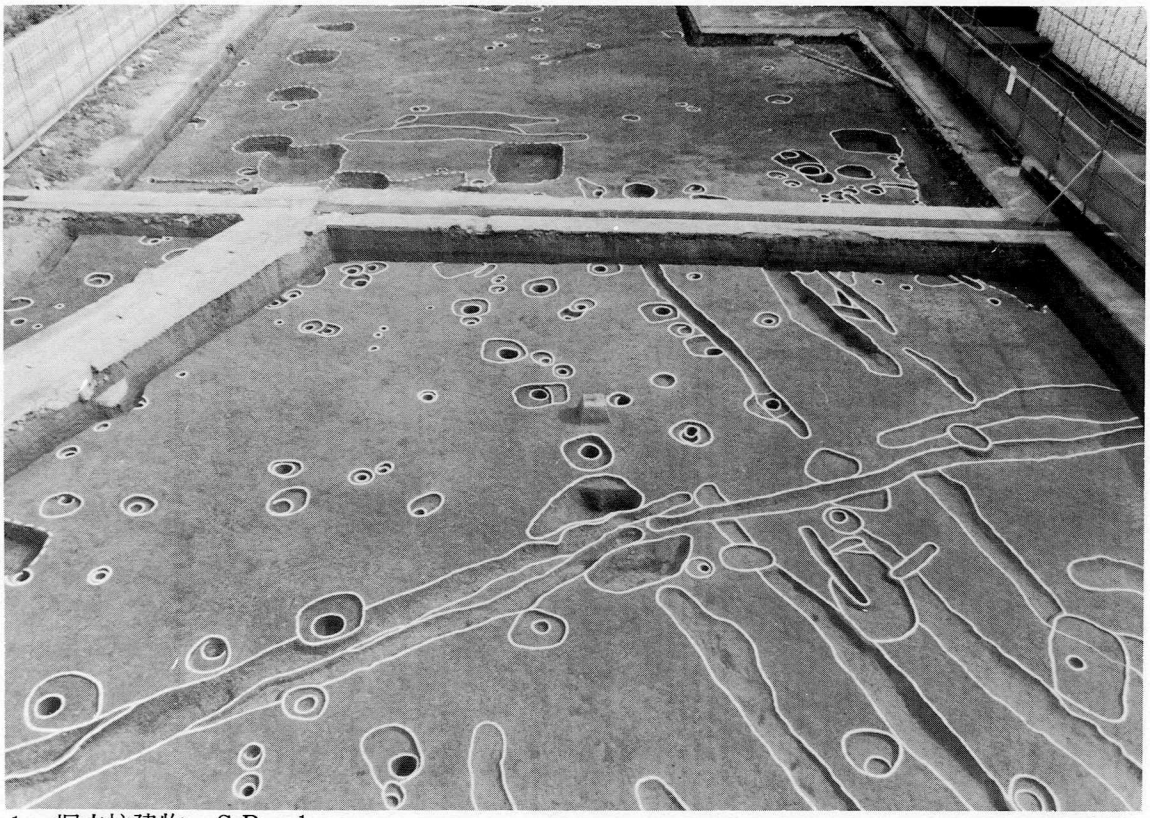
1. 溝　SD－6・12・13・16・17・20　西より

2. 同上　南より

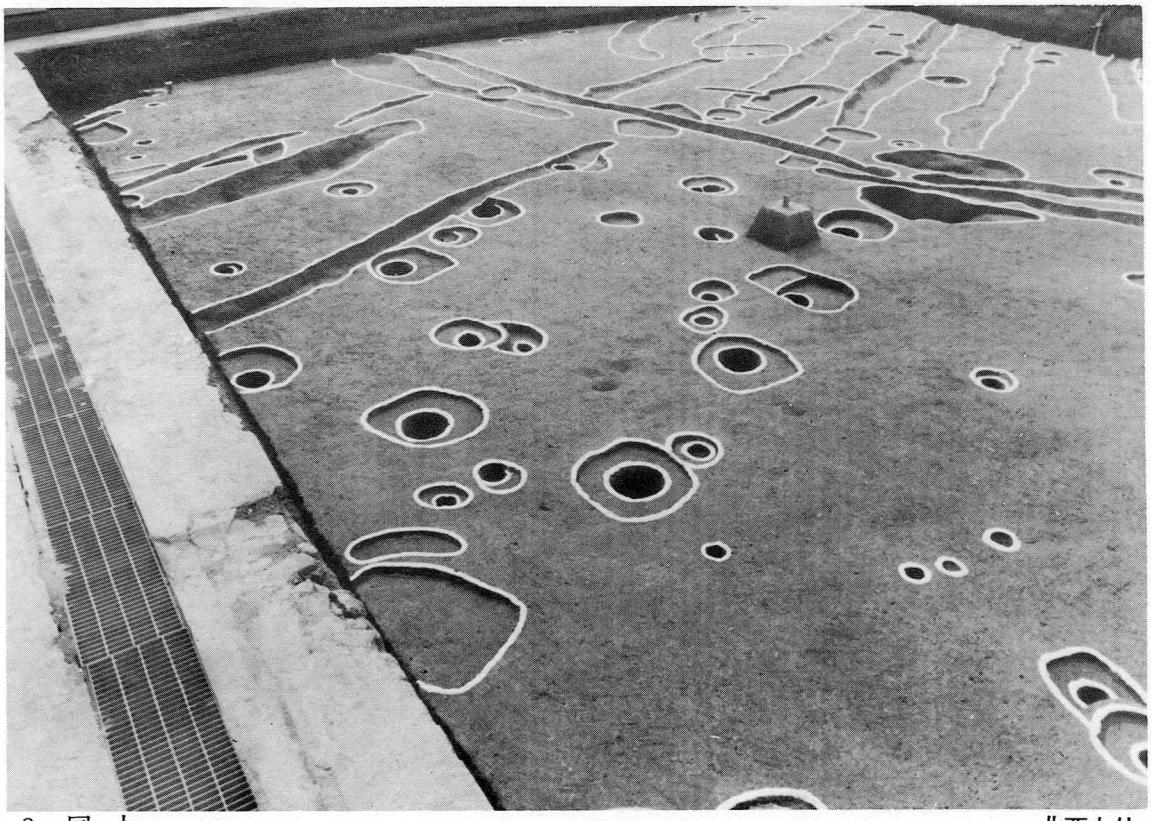
1. 溝　ＳＤ－15・21～23　　西より



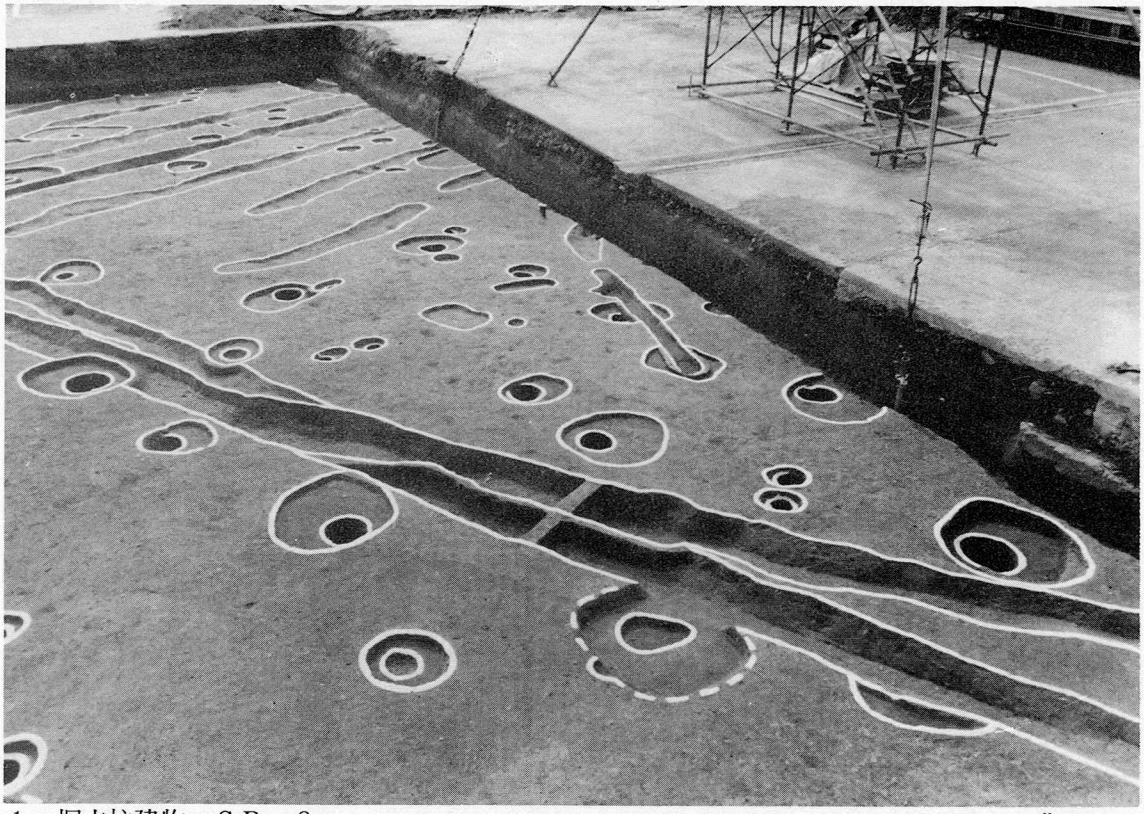
2. 同　上　　北東より



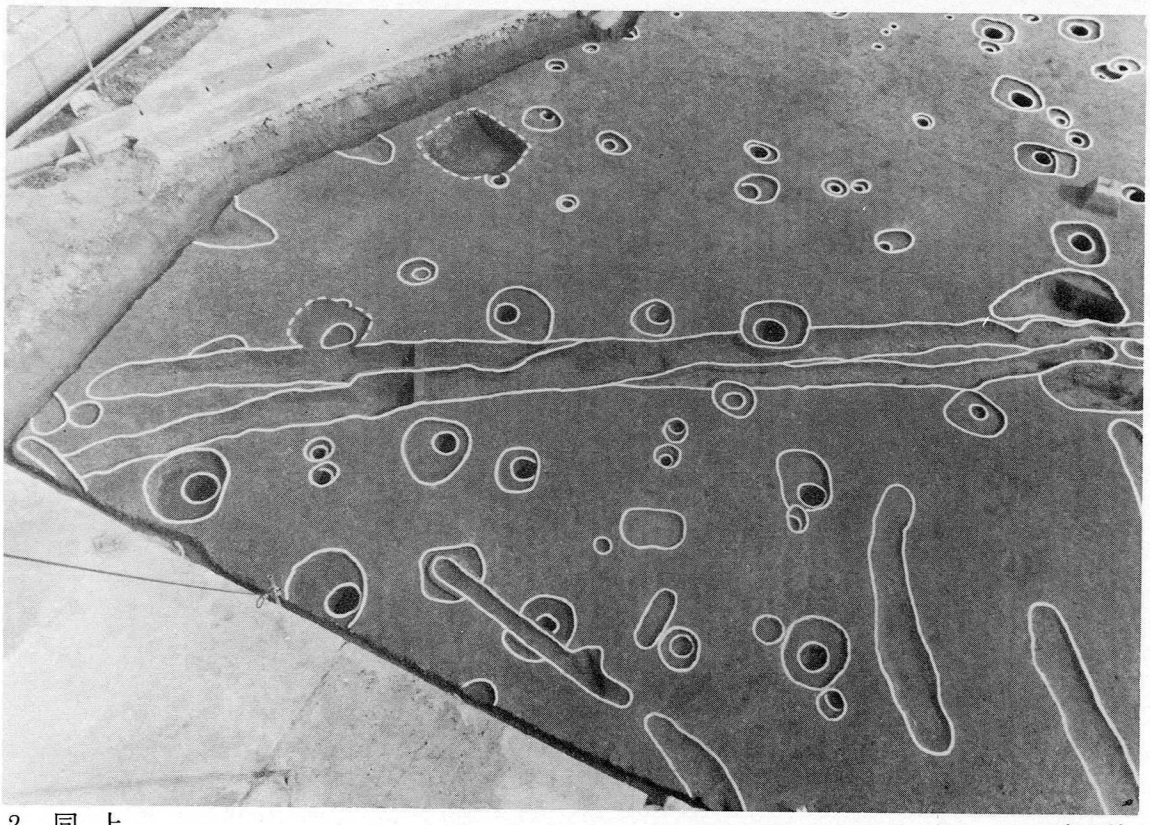
1. 掘立柱建物　ＳＢ－１　　南西より



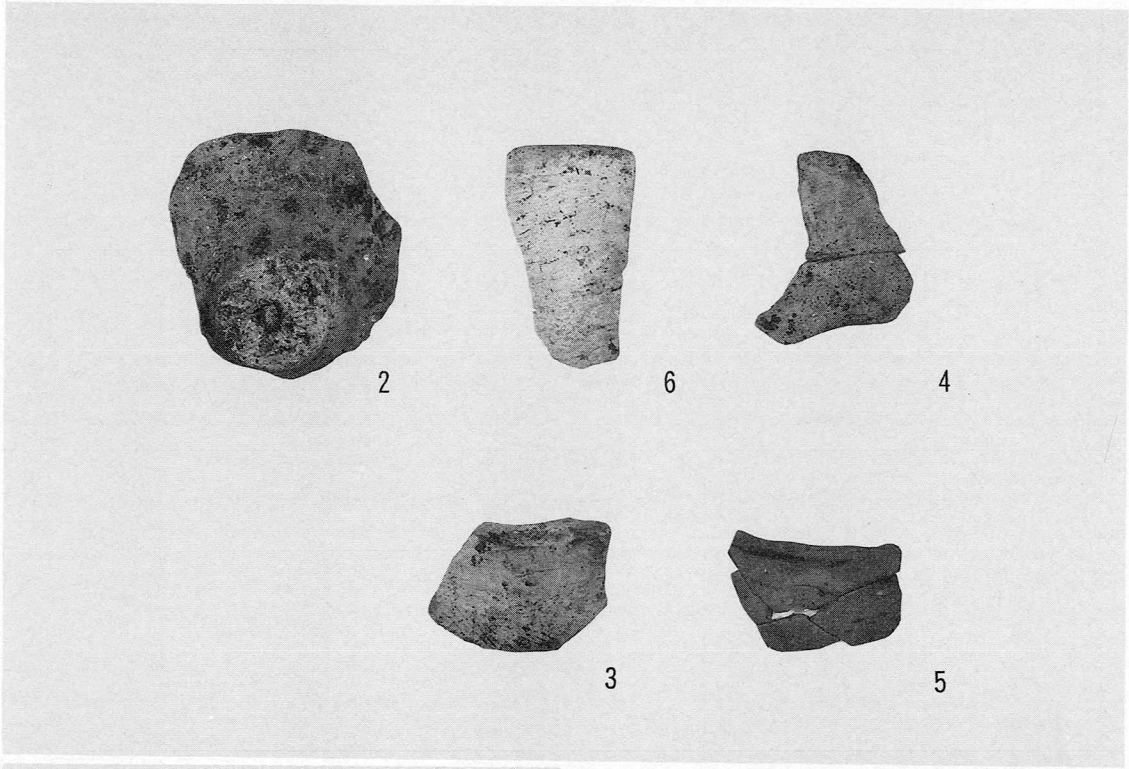
2. 同　上　　北西より

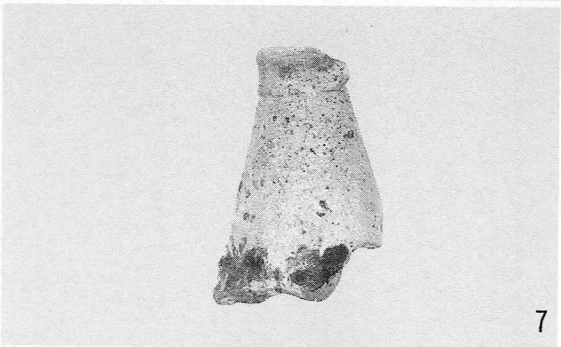


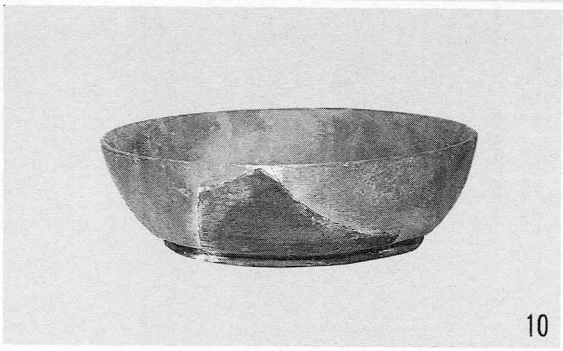
1. 掘立柱建物　ＳＢ－２　　北西より

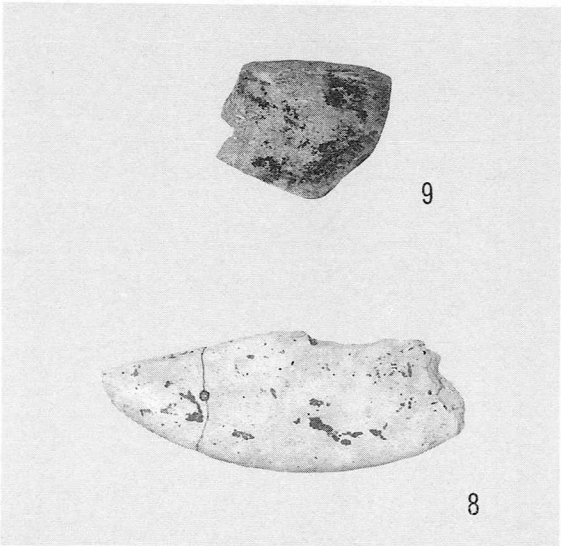


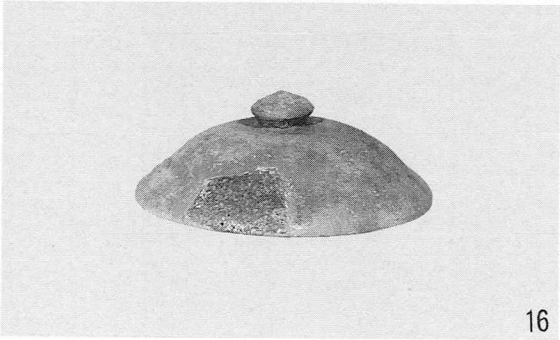
2. 同　上　　南より



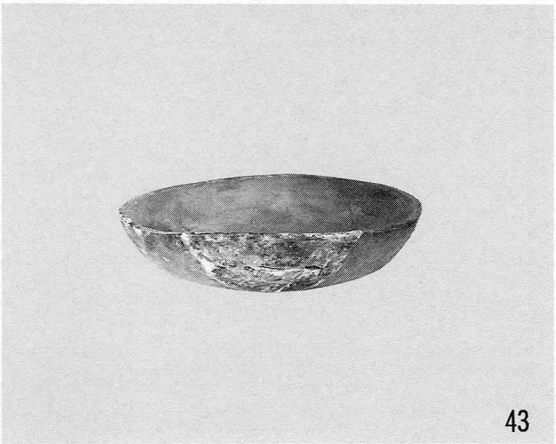


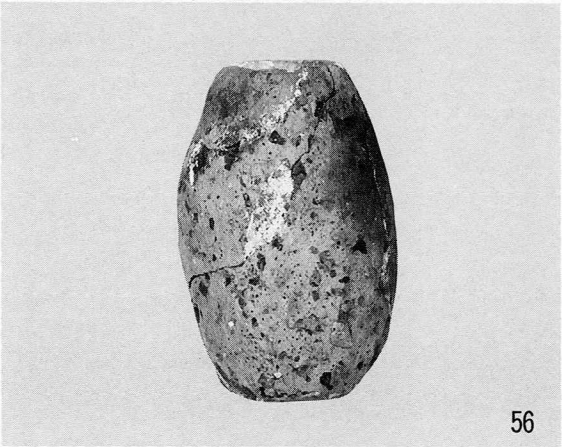


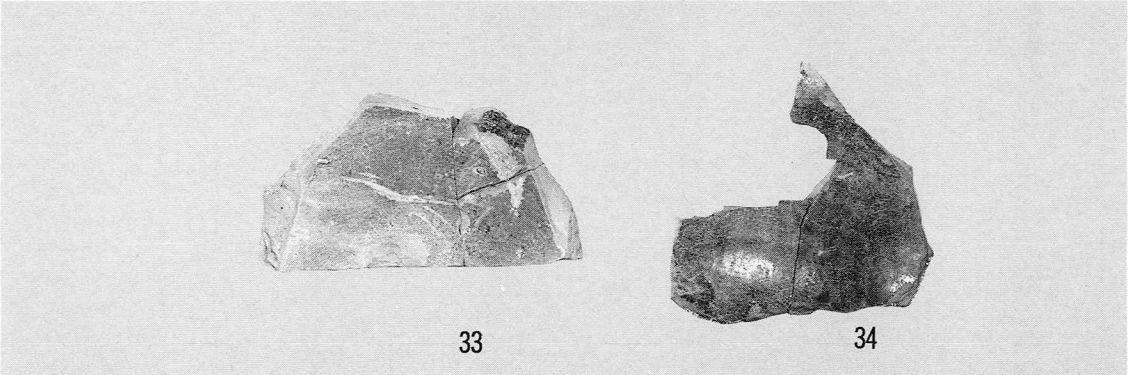


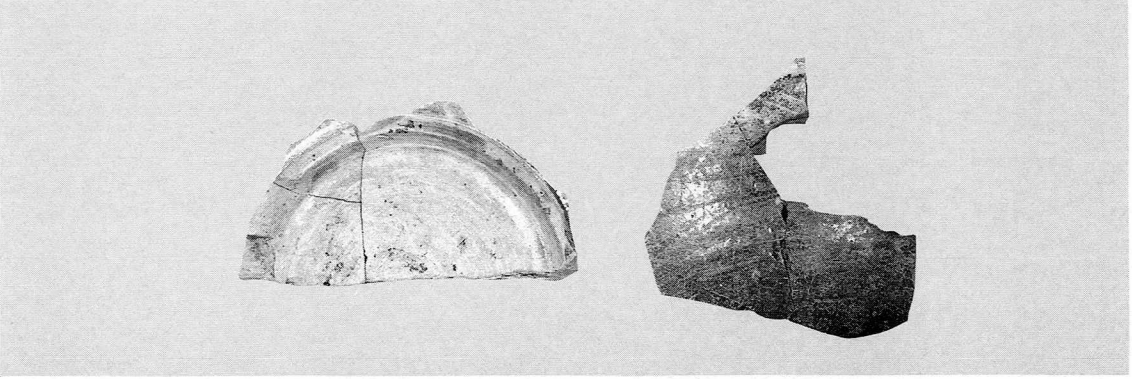


SD－22（2～6）、SD－15（7）、SD－11（8・9）、SB－1（10）
包含層第6層（16）出土遺物



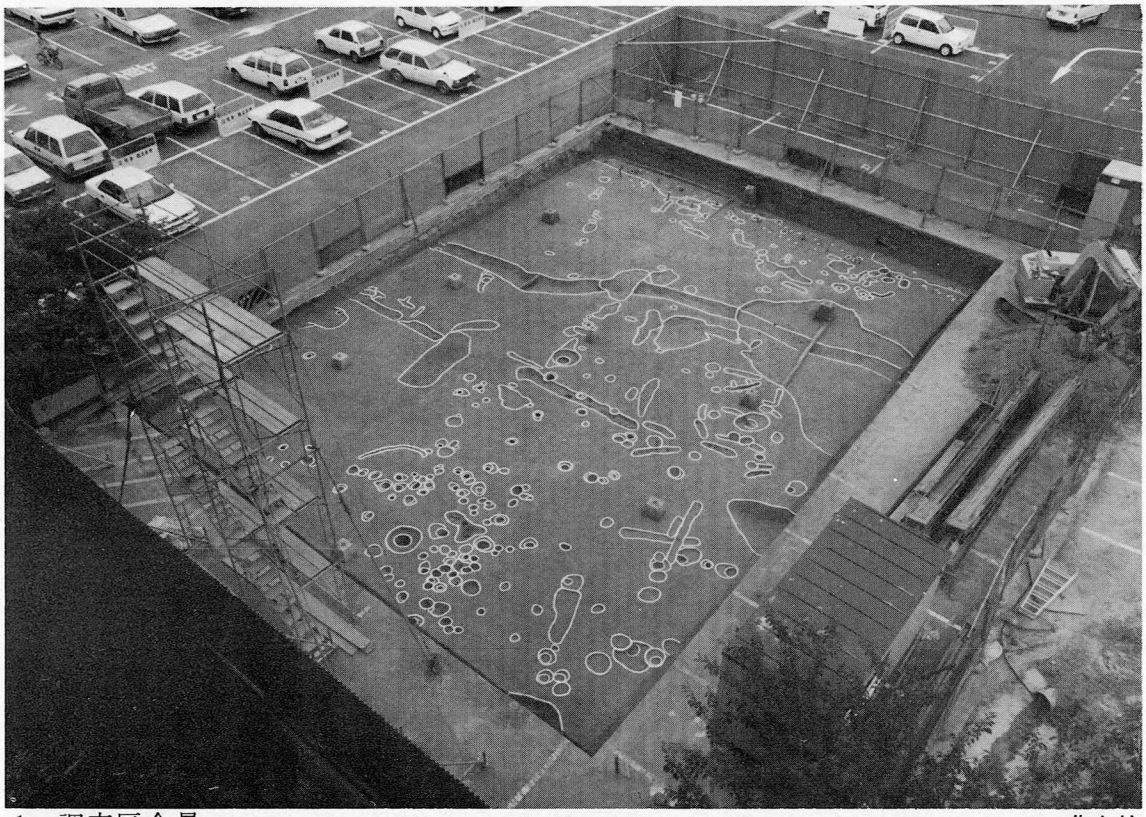




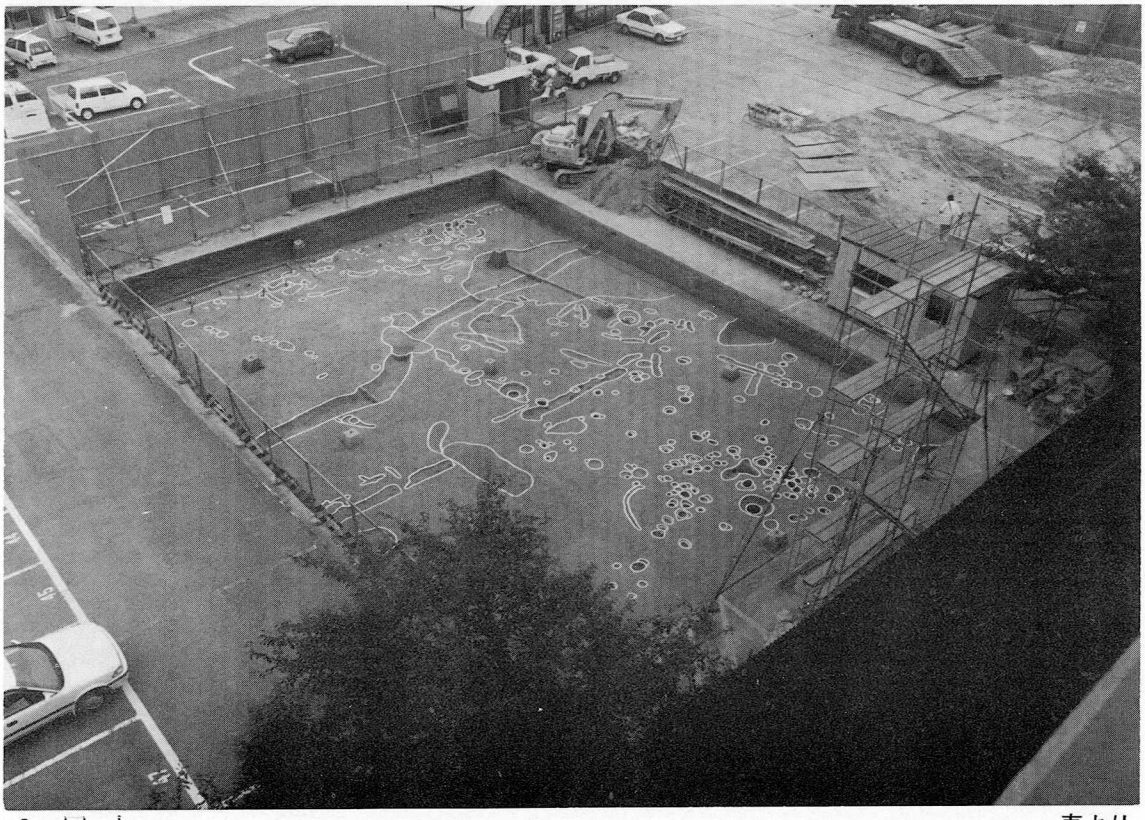


包含層第6層（26・56）、包含層第5層（33・34・43）出土遺物

図版12　第2区

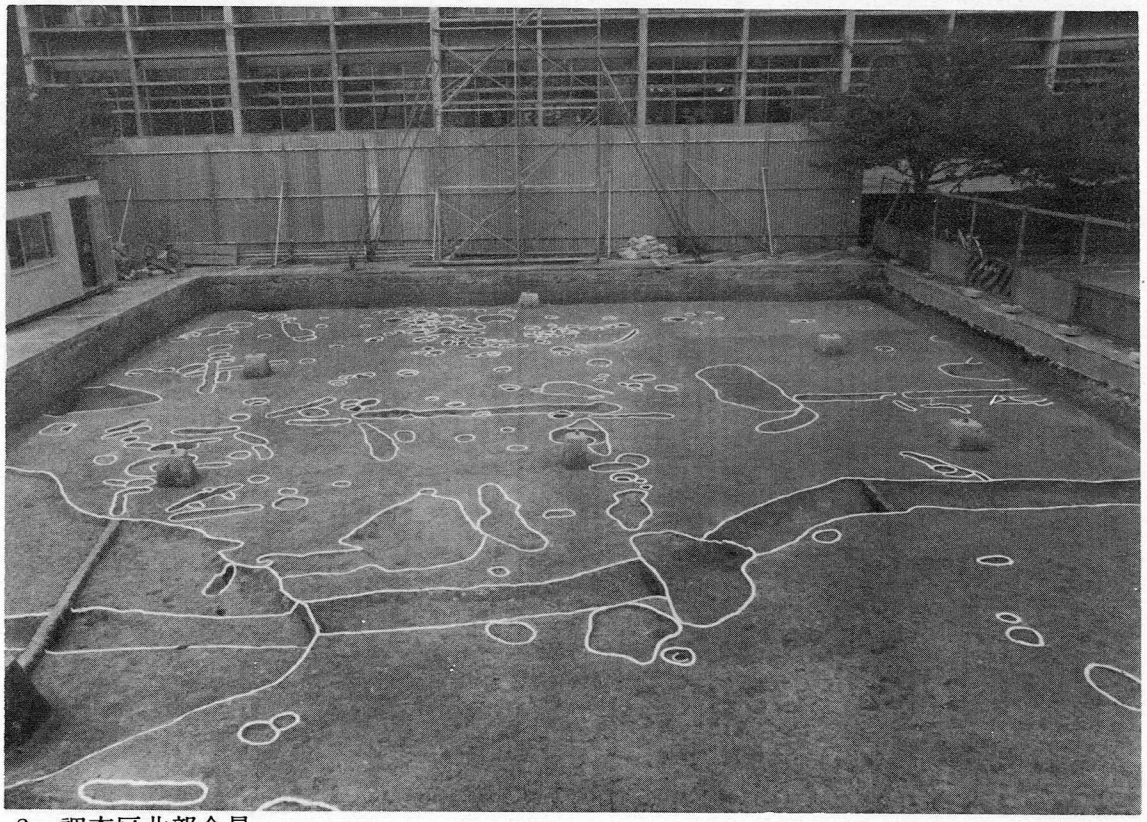


1. 調査区全景　　北より

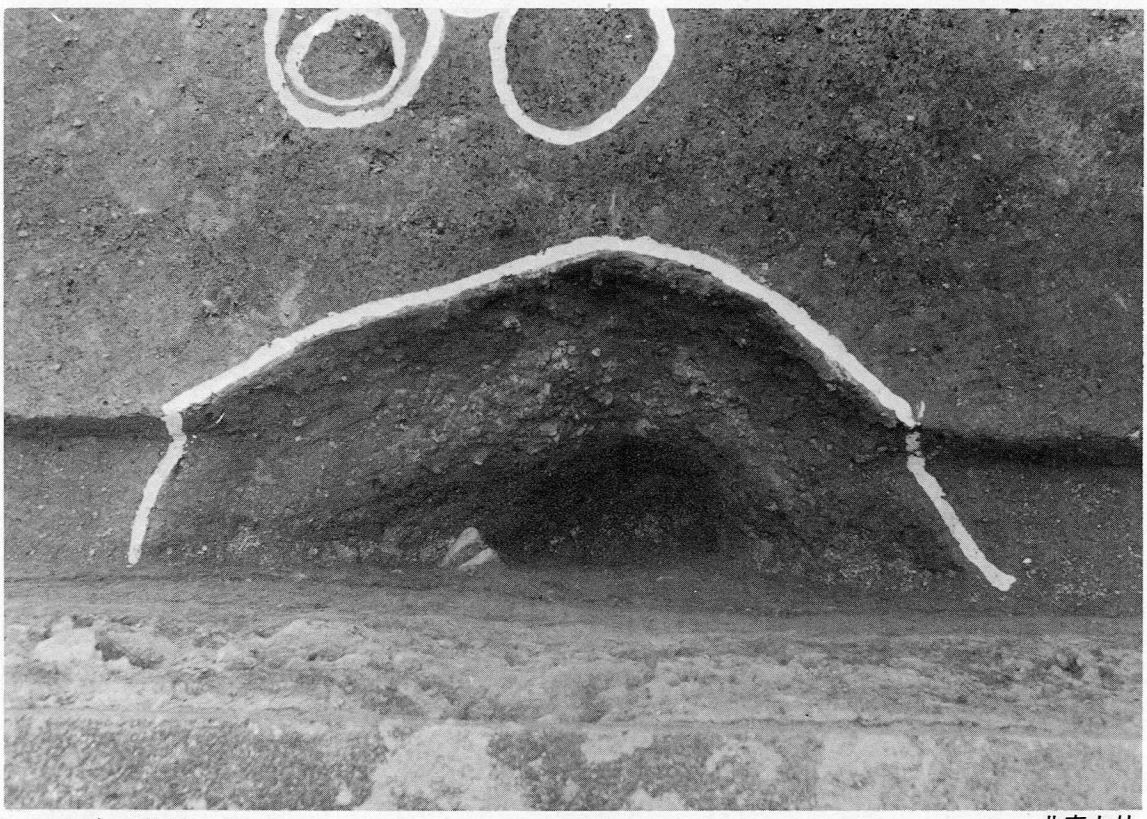


2. 同　上　　東より

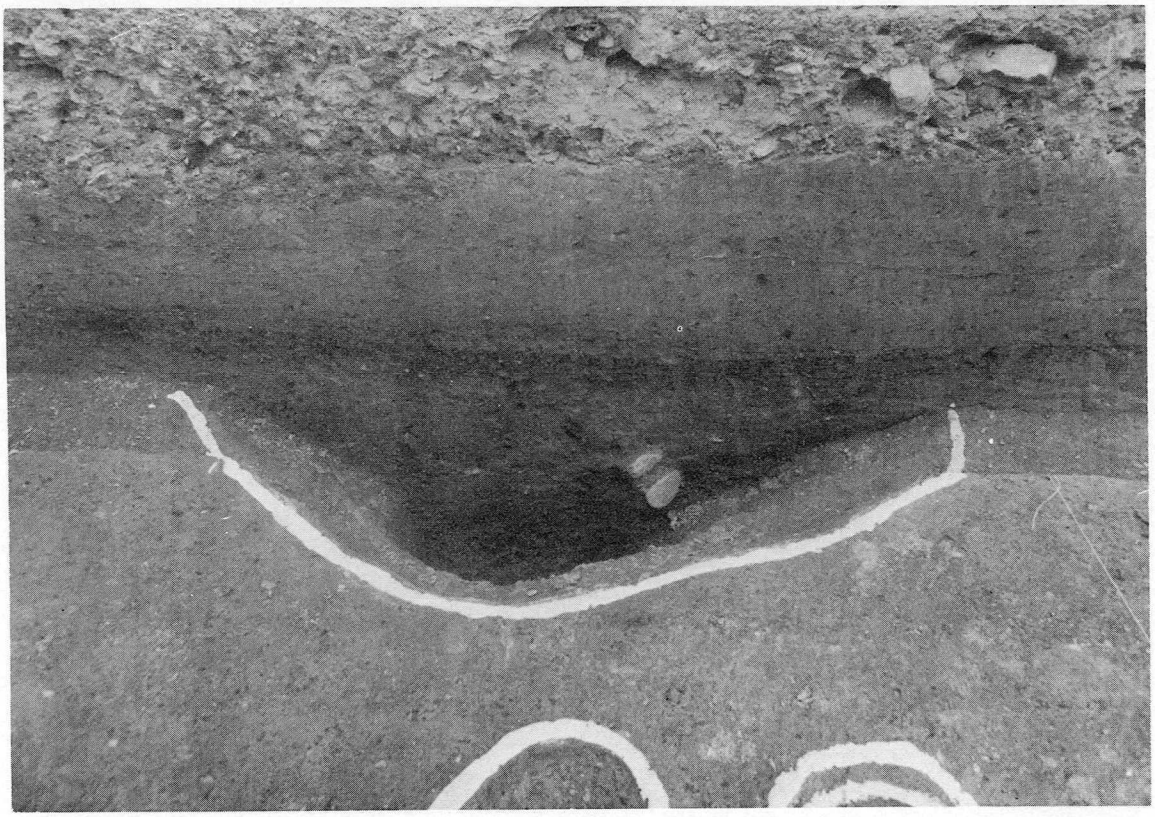
1. 調査区南部全景　　北西より



2. 調査区北部全景　　南西より

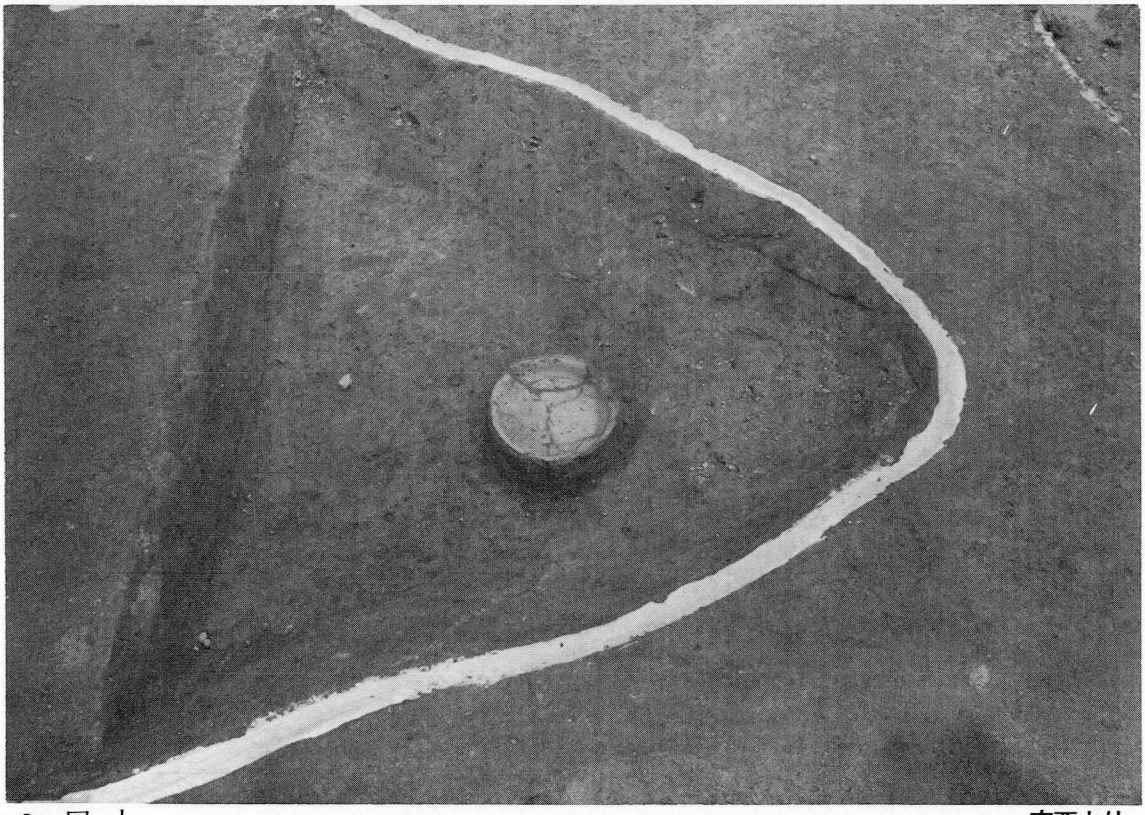


1. 土坑　ＳＫ－１　　北東より

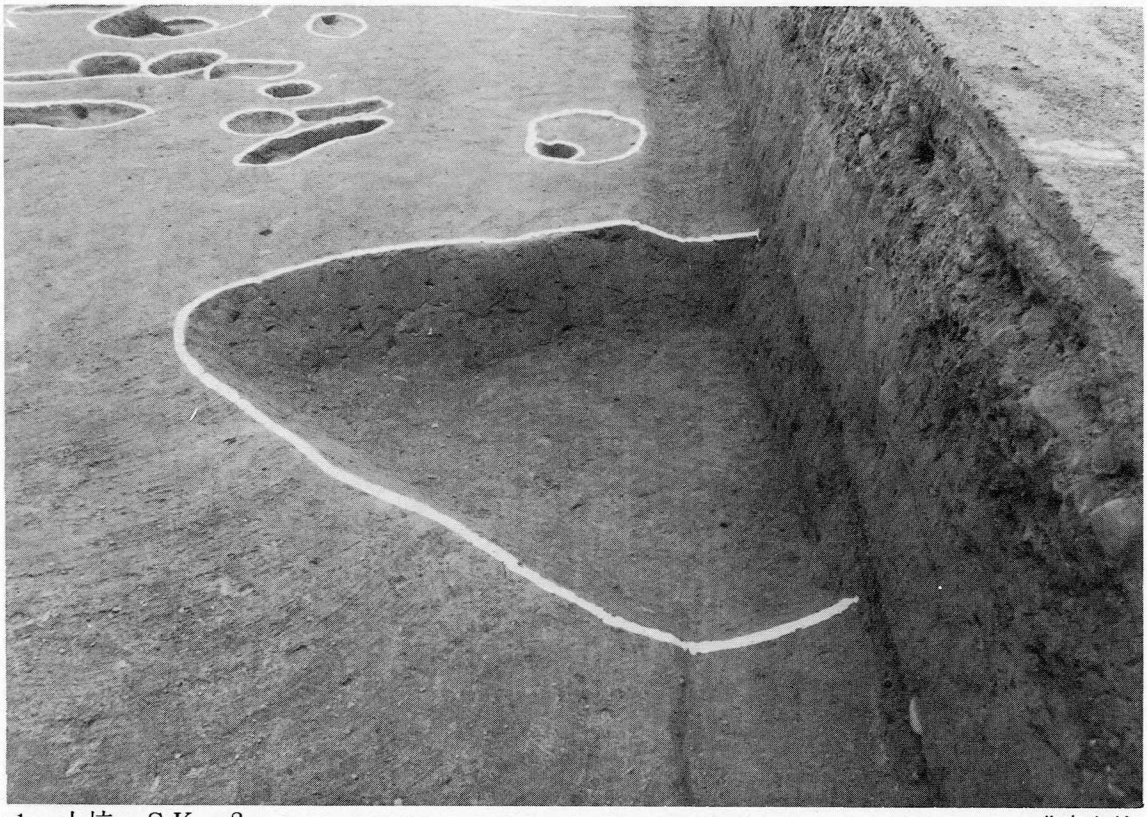


2. 同 上　　南西より

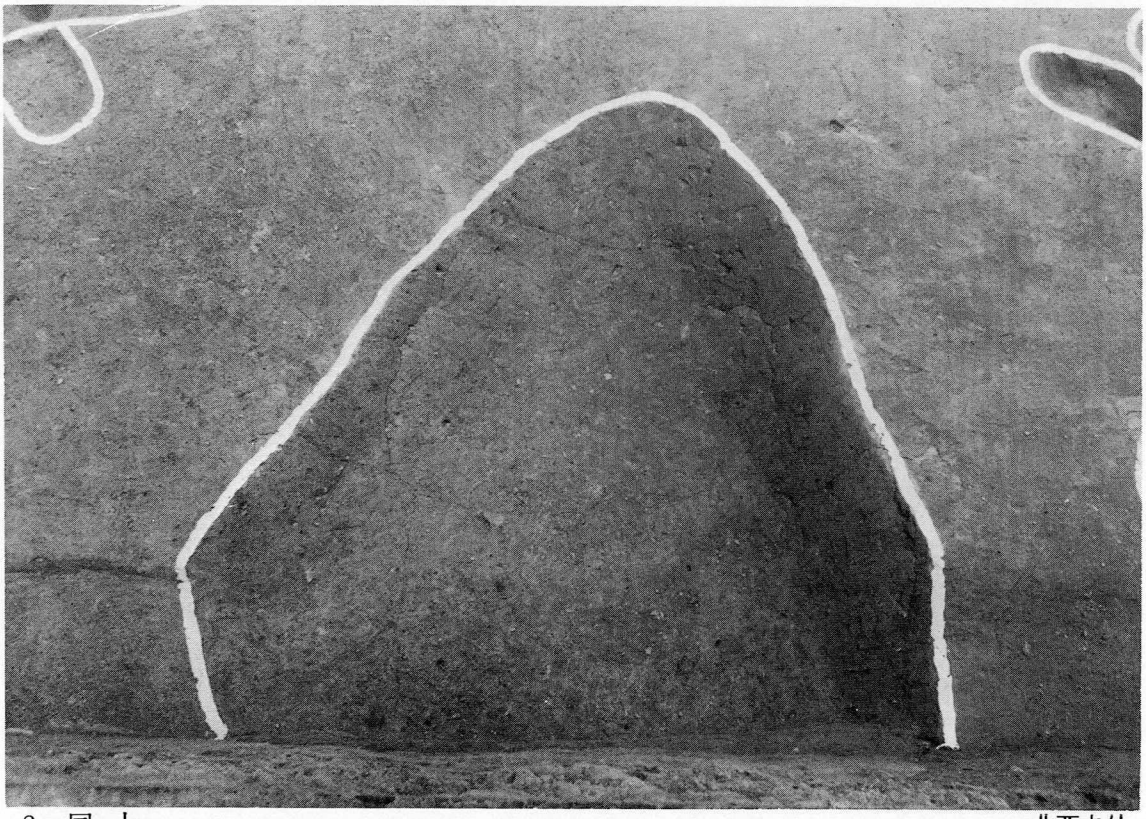
1. 土坑　ＳＫ－２　遺物出土状況　　北西より



2. 同 上　　南西より



1. 土坑　SK－2　　北東より



2. 同 上　　北西より

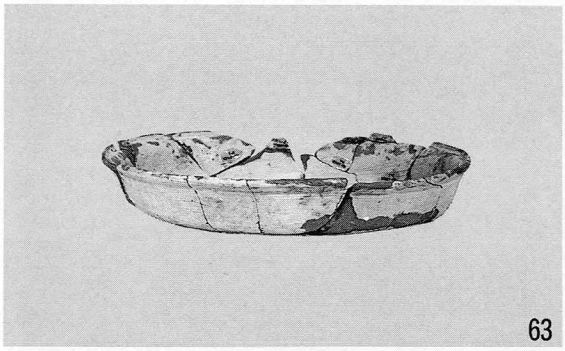
図版17　第2区

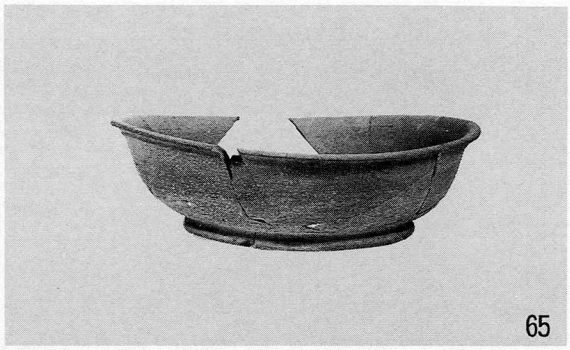
1. 溝　SD－1　　南東より

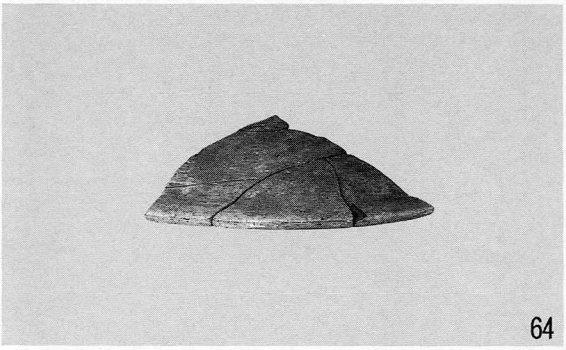
2. 同 上　　北より

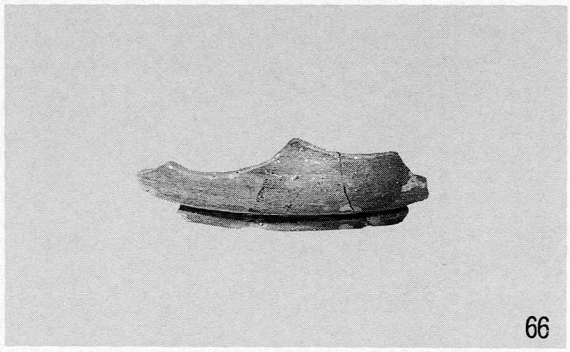
1. 溝　ＳＤ－１　　北より

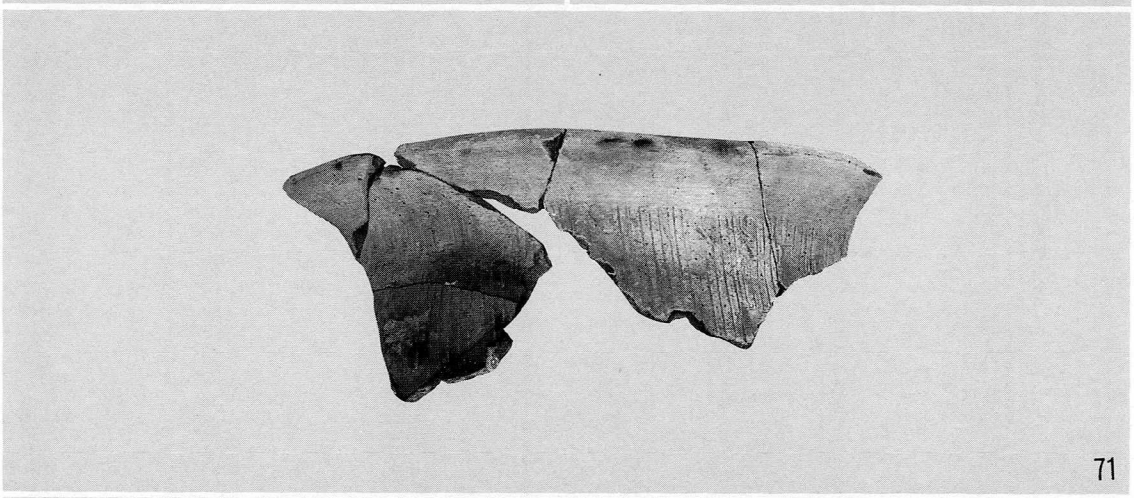
2. 溝ＳＤ－１ 石組基礎部　　南東より

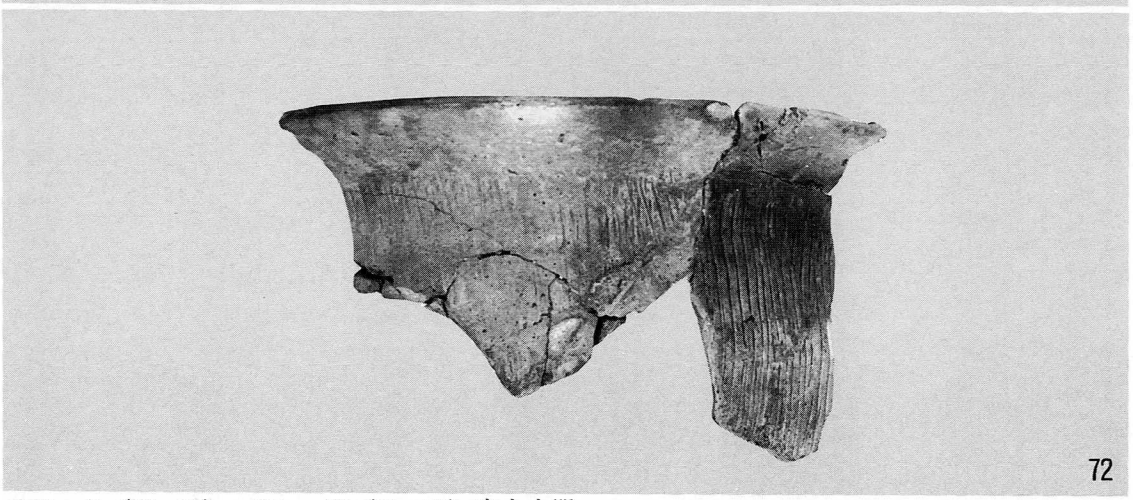




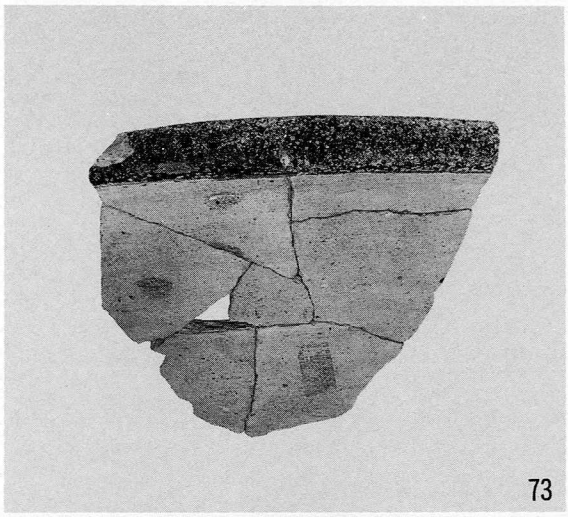


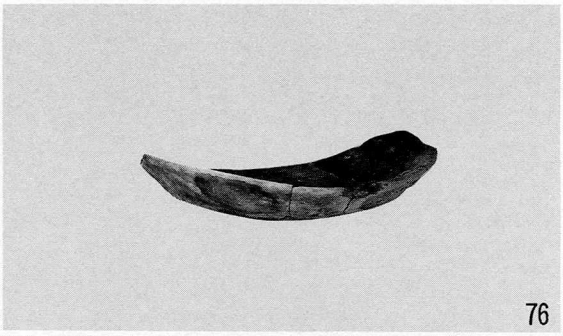


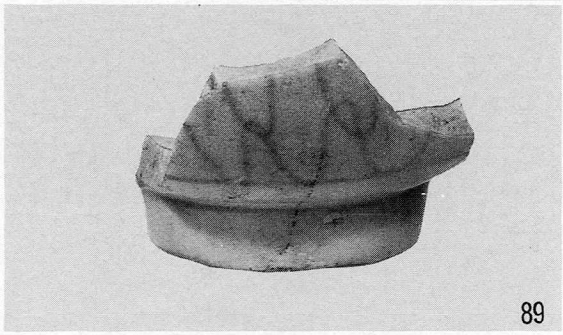


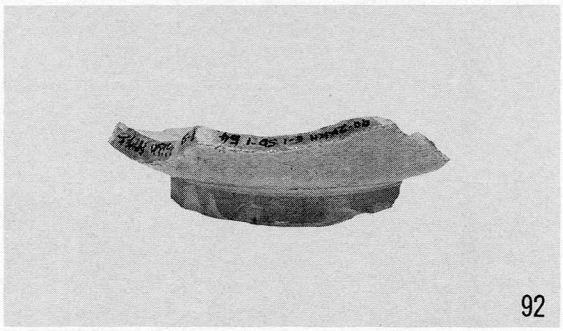


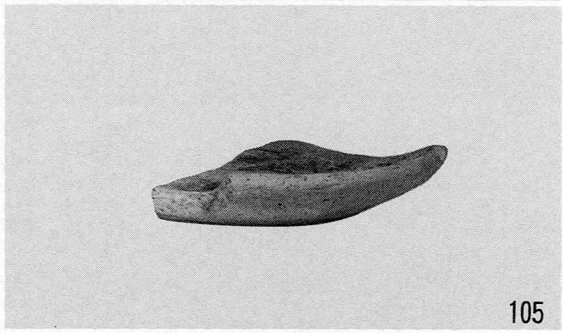
ＳＫ－２（63～66）、Pit －33（71・72）出土土器

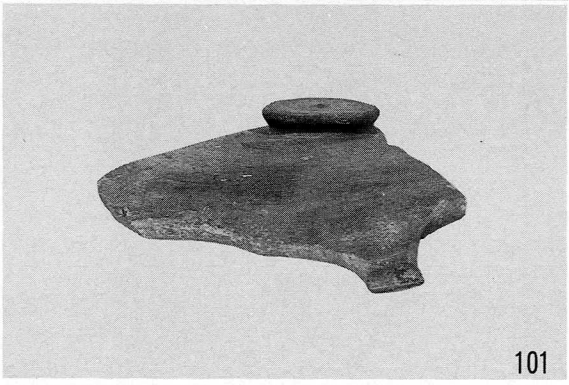


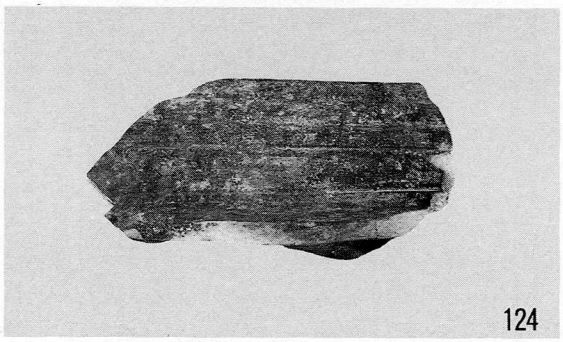






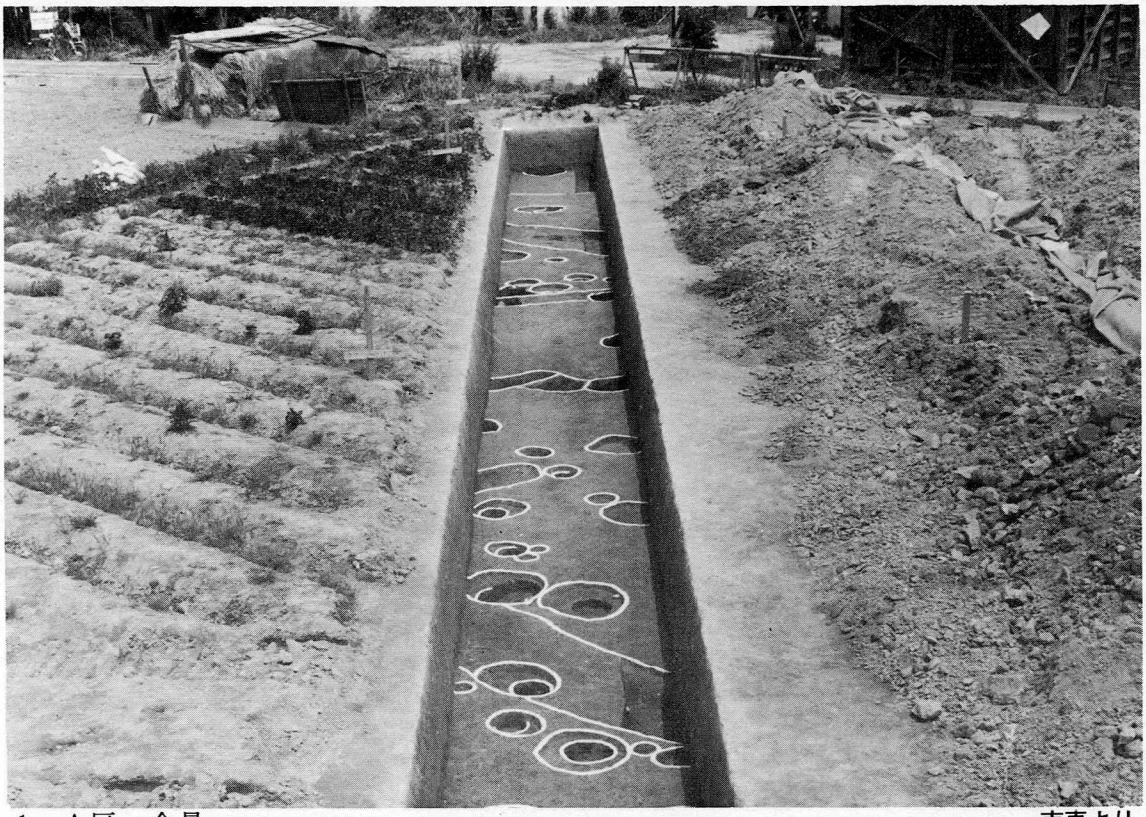




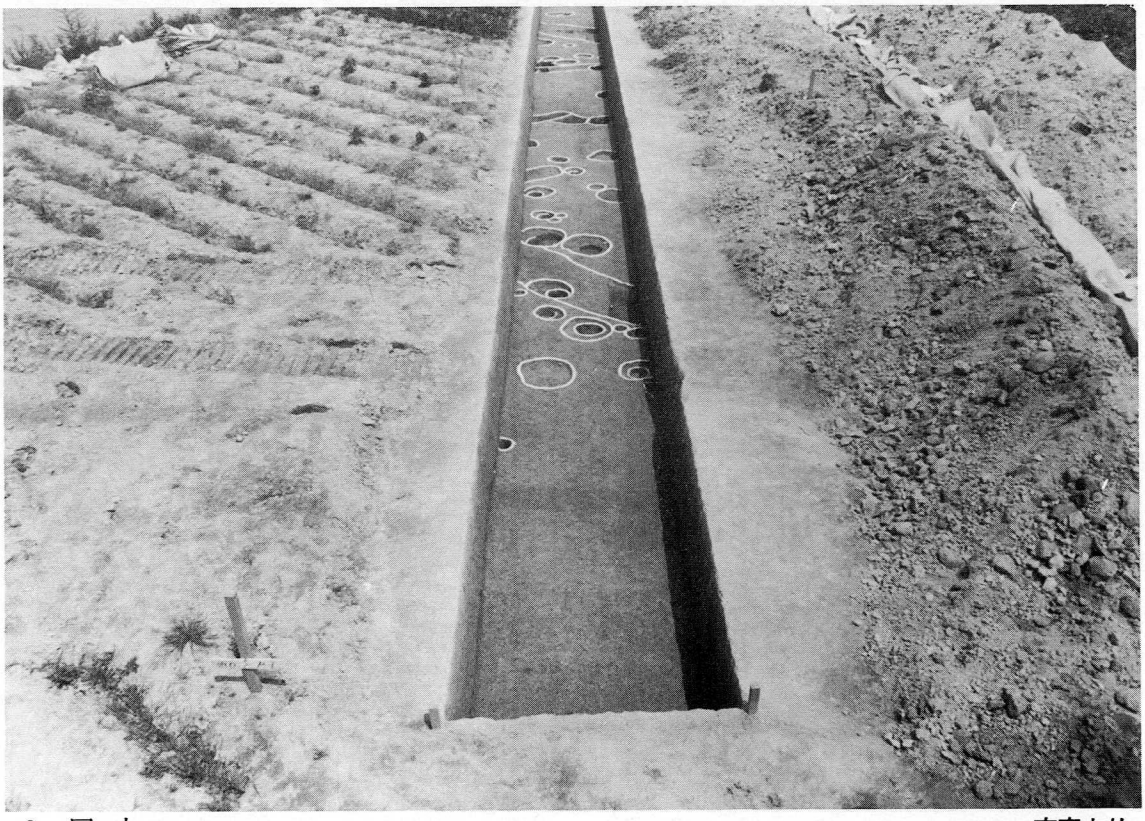


ＳＤ－２（73・76）、ＳＤ－１（89・90・92・97）、包含層第６層(101・105)、
包含層第５層（124)出土土器

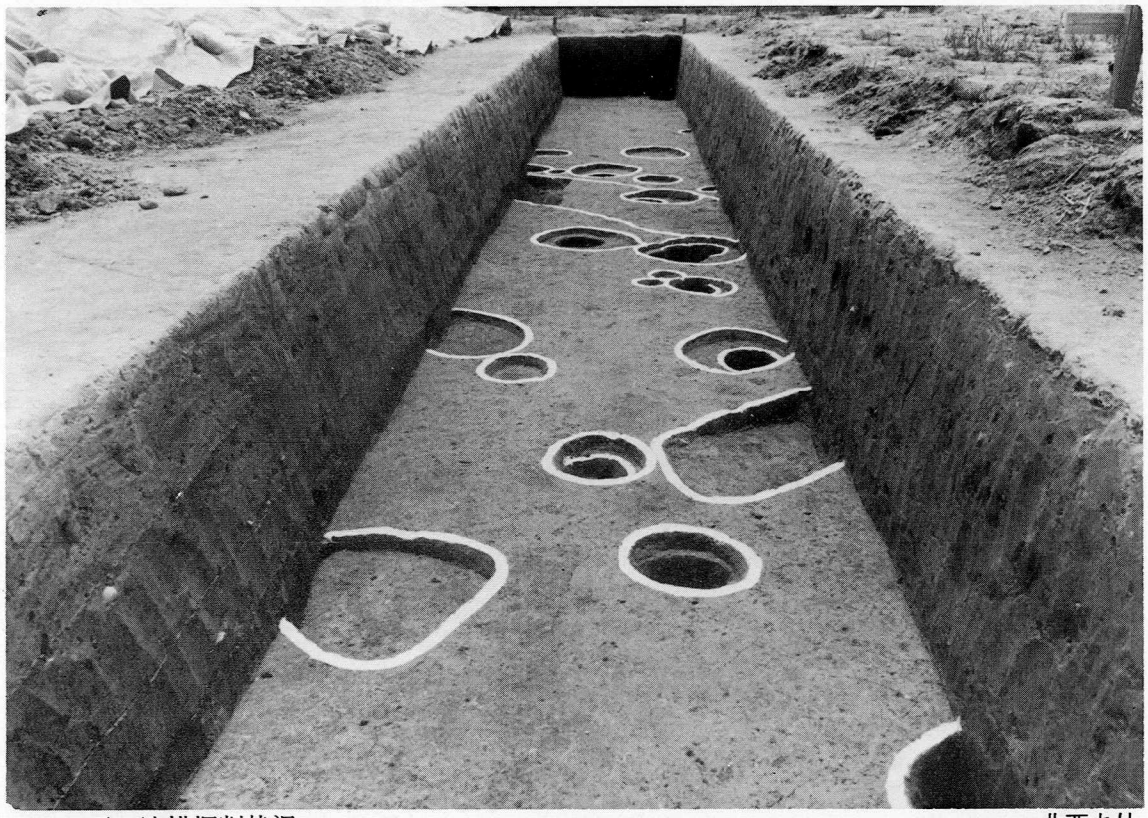
図版21　第3区



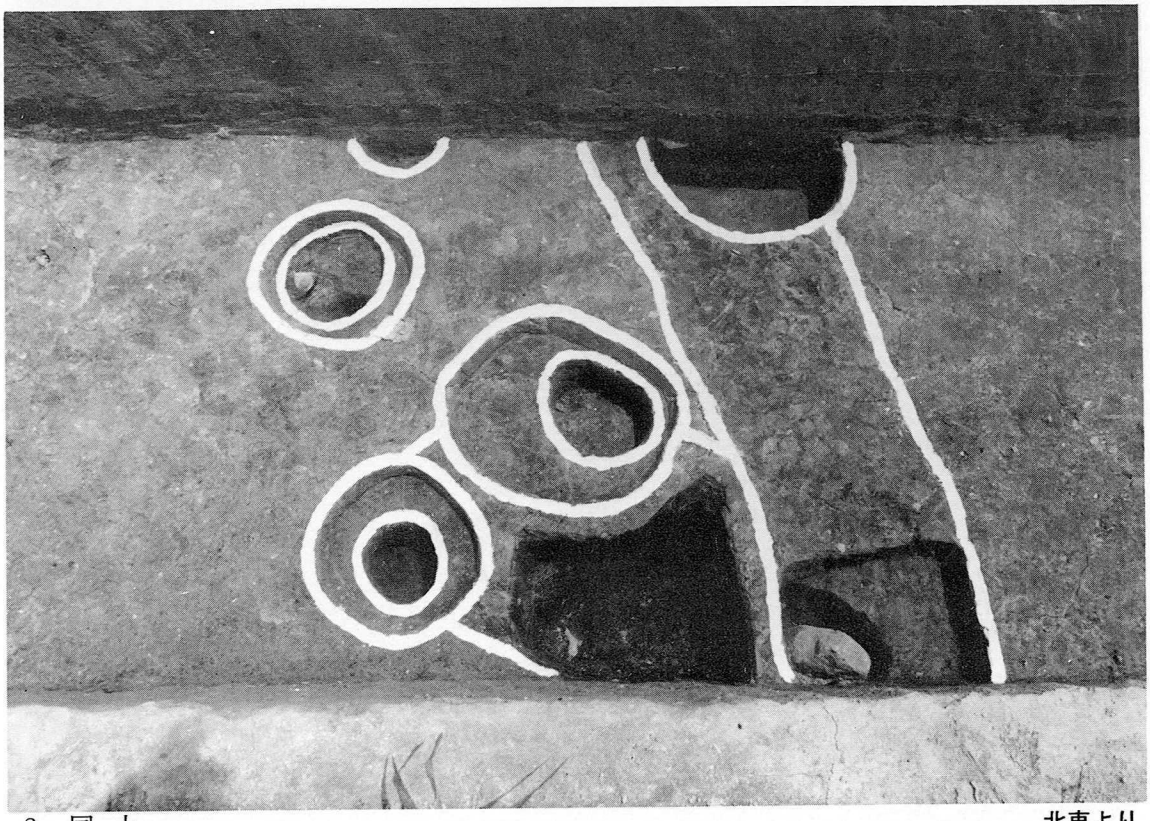
1. A区　全景　　南東より



2. 同 上　　南東より



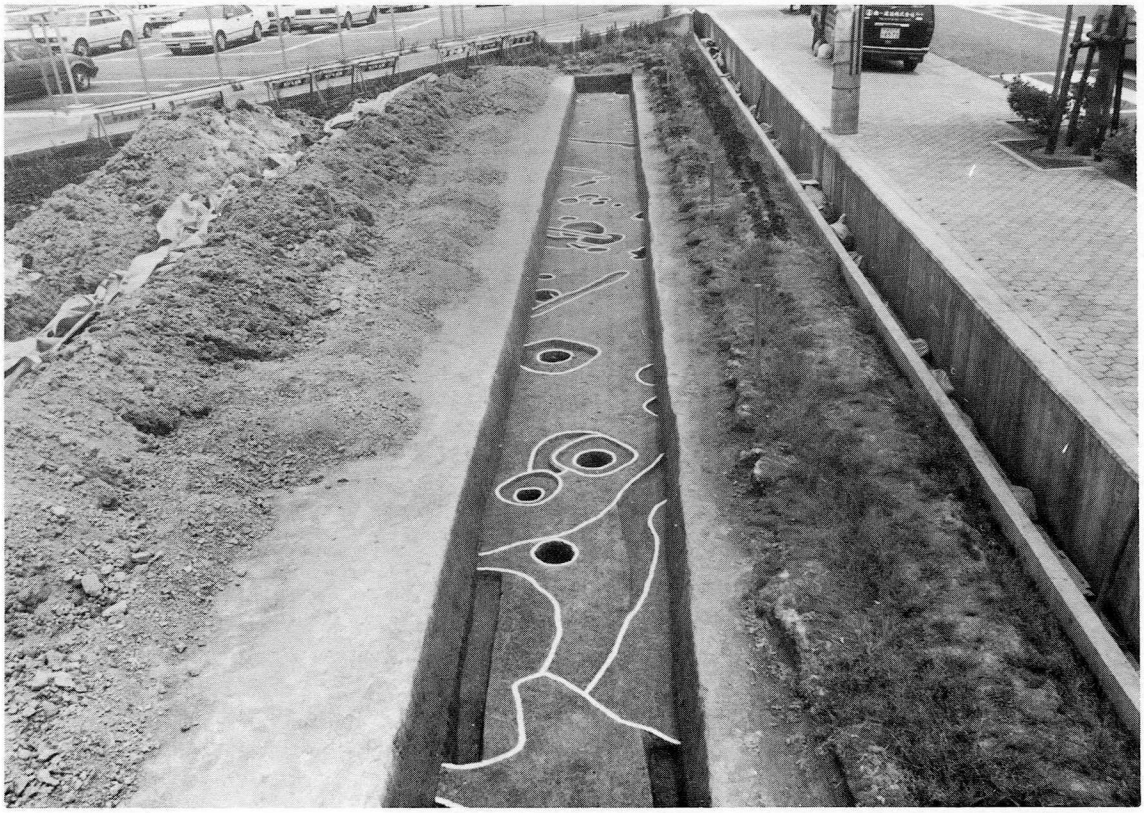
1. A区　遺構掘削状況　　北西より



2. 同 上　　北東より

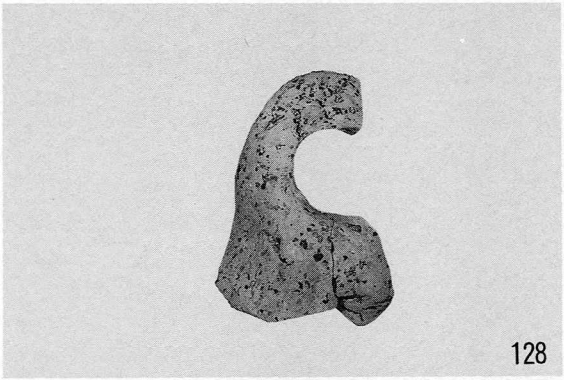
図版23　第3区

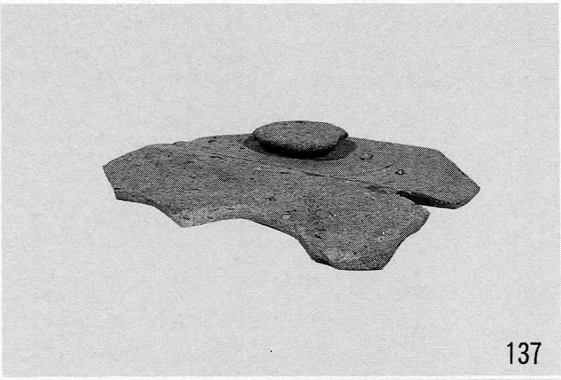
1. B区　全景　　北東より

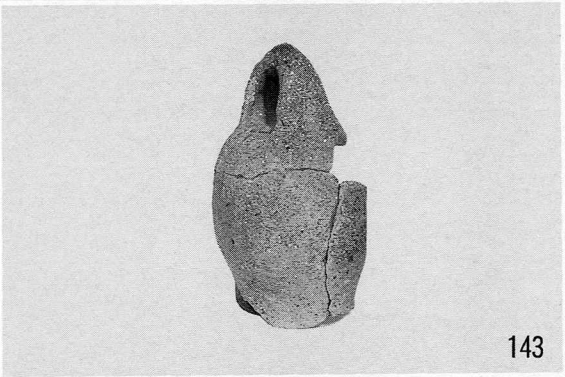


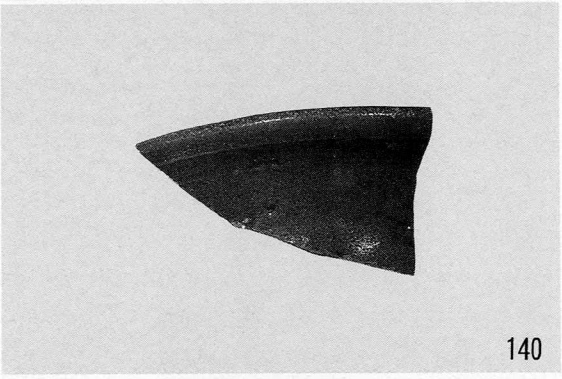
2. 同上　　南西より

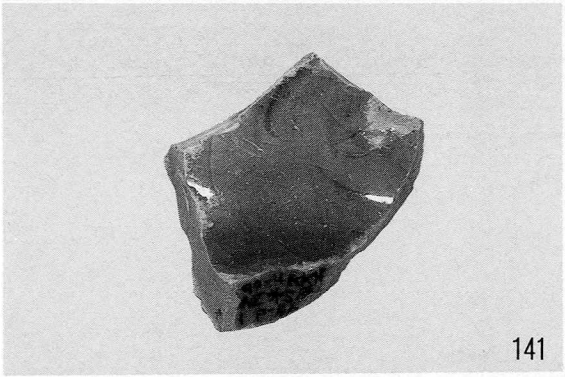
図版24 第3区

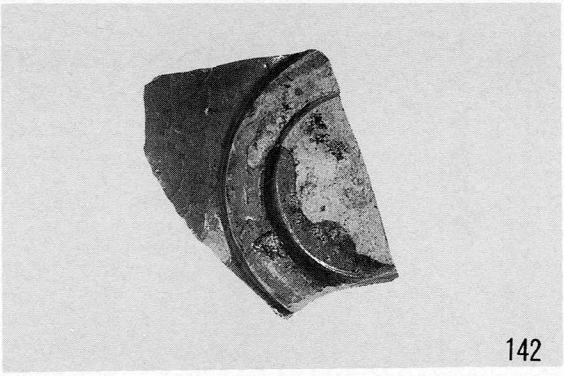


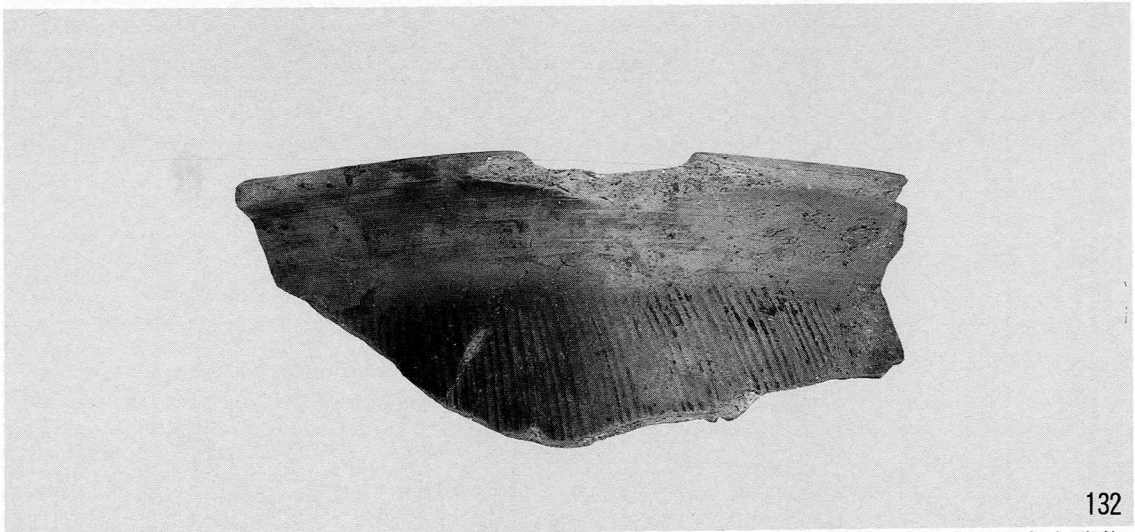












Pit－17 (128)、Pit －43 (132)、包含層第5層(137・141～143)、包含層第4層 (140)出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告第21集
加治神前畠中遺跡発掘調査概要
印　刷　平成 3 年 3 月 25 日
発　行　平成 3 年 3 月 30 日
編　集　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中１－17－１
印　刷　㈲春木印刷所
岸和田市下野町２－２－８